

文京遺跡 V

— 文京遺跡18次調査報告 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2007

文京遺跡 V

— 文京遺跡18次調査報告 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2007

序 文

愛媛大学は、本部事務局と法文学部・教育学部・工学部・理学部の4つの学部が所在する城北キャンパスに縄文時代から中世にわたる複合遺跡である文京遺跡、農学部のある榑味キャンパスに弥生時代から中世の榑味遺跡を抱え、1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会のもとに埋蔵文化財調査室を設置し、埋蔵文化財の保護に努めている。

その中で、城北キャンパスでは、これまで30次にわたる全面調査が実施されている。本書で報告する文京遺跡18次調査は、1998～1999年に実施した愛媛大学総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物新営工事に伴う発掘調査である。調査地点は城北キャンパス西部の旧グラウンド北部にあたる。周辺では、1996・1997年に文京遺跡15・17次として実施した確認調査によって、東西にのびる谷状の窪地と、土層断面観察から窪地には水田が営まれていることが明らかにされていた。今回の発掘調査では、まさしく古代～中世の水田跡が整然とあらわれ、畝跡と考えられる犁による耕作痕跡も出土し、文京遺跡が占める扇状地の扇状部における古代～中世の水田開発の歴史を考える貴重な手がかりとなる。

また、谷状の窪地への落ち際の微高地部分と、建設建物につづく共同溝部分では、弥生時代、古墳時代、古代の3つの時代の集落跡があらわれた。古代においては、谷状の窪地への落ち際に、高床建物と考えられる小型の掘立柱建物群が建つ。これまで、文京遺跡では古代の遺物は出土していたが、遺構が出土したのは今回の調査がはじめてである。先に述べた水田跡や畝跡とあわせ、文京遺跡における古代の集落の実像を考えることができる資料である。

加えて、古墳時代の遺構は共同溝部分で数多く出土した。これらは南に隣接する文京遺跡14次調査地区の古墳時代後期の集落の北東端にあたる。さらに、弥生時代の遺構としては、谷状の窪地への落ち際で、高床倉庫と考えられる小型の掘立柱建物群が出土した。文京遺跡では、これまでの調査で、弥生時代に西日本屈指の大規模集落が営まれていたことが明らかにされている。今回の調査地点では、旧グラウンド南半部の堅穴式住居跡が密集し大型掘立柱建物がある集落の中心部とは異なり、高床倉庫群が建ち並ぶ。弥生時代の大規模集落の構造をより具体的に解明することができる成果の一つである。

今回の調査では、こうした多くの調査成果をえることができた。しかし、その後も連続して進められた校舎建設に対応する発掘調査が優先され、整理作業は寸断され、大きく停滞した。そこで、施設部と協議して短・中期的な整理計画をつくるとともに、整理体制の強化を図り、報告書刊行の準備を進めることとした。そうした体制整備によって、今回、ようやく正式調査報告書を刊行することができた。発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くのの人々に利用・活用されることを祈念します。

2007年3月30日

愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長 下條 信行

例 言

1. 本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1998（平成10）～1999（平成11）年度に実施した愛媛県松山市文京町3番の愛媛大学総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物新営工事に伴う文京遺跡18次調査の正式調査報告書である。
2. 愛媛大学埋蔵文化財調査室では、これまで文京遺跡8・9・11次調査、同10次、13次調査、20・23次調査の発掘報告を刊行している。本書が5冊目の報告書となることから『文京遺跡V』とした。また同時に、愛媛大学埋蔵文化財調査報告XVIにあたる。
3. 本書で示した方位・標高値は、平面直角座標IV系にしたがっている。
4. 土色と遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠したが、本文中ではマンセル記号は省略した。
5. 本書に使用した遺構図は、田崎博之・三吉秀光・板元恒太・丸毛のぞみ・武田尊子・田中久美子・田中いづみが実測図を作成し、田崎博之・三吉秀光・宮崎直栄が浄写を行った。
6. 遺物図は、田崎・三吉・宮崎・西澤昌平・濱田美加が実測図を作成し浄写を行った。また、本書の巻末表2の遺物観察は、各遺物の実測者が共同して作成した。
7. 遺構・遺物写真は、田崎・三吉が撮影した。
8. 本書の執筆は、序説～IV章は田崎・西澤、V章は三吉・濱田、VI章は田崎・三吉が共同して執筆した。
10. 本書の編集は、埋蔵文化財調査室長下條信行の指導のもとに、田崎が行った。
11. 本書に報告した文京遺跡18次調査にかかわる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

本文目次

序 説

1	調査にいたる経緯と調査体制	1		
	(1) 調査にいたる経緯			
	(2) 発掘調査体制			
	(3) 発掘調査の経過			
2	整理作業と報告書刊行の体制と経過	5		
3	調査・整理の方法と遺物・記録類の保管	6		
	(1) 調査区割りの設定と呼称			
	(2) 遺構・遺物の登録番号と種別の表示			
	(3) 調査記録類・出土遺物の保管			
I	位置と環境			
1	文京遺跡の位置と環境	9		
2	周辺の既往調査	11		
II	調査の概要			
1	層序の概要	16		
2	遺構の概要	17		
III	A区の遺構・遺物の記録(その1) - II-2層(水田層)と自然流路(SR-400)の調査 -			
1	層序	23		
2	II-2-①層と出土遺物	24		
3	II-2-②(上層水田)層の遺構と遺物	26		
	(1) 遺構			
	1) 水田			
	SS- 1 (26)	SS- 2 (26)	SS- 3 (27)	SS- 4 (27)
	SS- 5 (28)	SS- 6 (28)	SS- 7 (28)	SS-13 (28)
	SS-14 (29)	SS-15 (29)	SS-16 (29)	SS-17 (30)
	SS-19 (30)	SS-20 (30)	SS-21 (30)	SS-22 (31)
	SS-23 (31)	SS-26 (31)	SS-27・28 (31)	SS-30 (32)
	SS-31 (32)	SS-32・33 (32)	SS-34 (32)	SS-35 (32)
	SS-36 (33)	SS-37・38 (33)	SS-39 (33)	SS-40 (33)
	2) 溝			
	SD- 8 (33)	SD- 9 (33)	SD-10 (34)	SD-11 (35)
	SD-12 (35)	SD-18 (36)	SD-24 (38)	SD-25 (38)
	SD-29 (39)			
	3) 小穴			
	(2) 水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物			
4	II-2-③層と出土遺物	40		
5	II-2-④(中層水田)層の遺構と遺物	43		

(1) 遺構				
1) 水田	SS-105 (43)	SS-106 (44)	SS-107 (45)	SS-108 (45)
	SS-109 (46)	SS-110 (46)	SS-111 (47)	SS-112 (47)
	SS-113 (47)	SS-115 (48)	SS-116 (48)	SS-117 (48)
	SS-118 (49)			
2) 溝	SD-101 (49)	SD-102 (52)	SD-103 (53)	SD-104 (54)
	SD-114 (55)	SD-119 (55)	SD-120 (55)	SD-122 (55)
3) 水溜遺構	SX-121 (56)			
4) 土塋	SK-123 (56)			
(2) 水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物				
6	II - 2 - ⑤層上面から掘り込まれた遺構と遺物			
				61
(1) 遺構				
1) 土塋	SK-201 (61)	SK-202 (62)	SK-203 (62)	SK-204 (62)
2) 溝	SD-208 (62)	SD-209 (66)		
3) 小穴・その他				
7	II - 2 - ⑤層と出土遺物			
				66
8	II - 2 - ⑥層 (下層水田) の遺構と遺物			
				69
(1) 遺構				
1) 水田	SS-303 (69)	SS-304 (69)	SS-305 (70)	SS-306 (70)
	SS-308 (70)	SS-309 (71)	SS-310 (71)	SS-311 (71)
	SS-312 (71)	SS-314 (72)	SS-316 (72)	SS-317 (72)
	SS-318 (72)			
2) 溝	SD-301 (73)	SD-302 (75)	SD-307 (76)	
(2) 水田耕作土・畦畔出土の遺物				
9	自然流路 SR-400 と出土遺物			
				78
IV	A区の遺構・遺物の記録 (その2) - 微高地上の遺構の調査 -			
1	出土遺構の概要			
				90
2	耕作痕跡			
				90
3	掘立柱建物			
				92
	SB-410 (92)	SB-411 (94)	SB-412 (94)	SB-413 (95)
	SB-414 (95)	SB-415 (96)	SB-416 (99)	SB-417 (100)
	SB-418 (102)	SB-419 (104)	SB-420 (105)	SB-421 (106)
	SB-422 (108)	SB-423 (108)	SB-424 (109)	
4	土塋			
				110
	SK-401 (110)	SK-402 (114)	SK-403 (116)	SK-404 (116)
	SK-406 (116)	SK-407 (116)	SK-408 (116)	SK-425 (118)
5	溝			
				118
	SD-405 (118)			
6	欄列			
				118
	SA-409 (118)			
7	小穴・その他			
				119

V	B区の遺構・遺物の記録				
1	層序と出土遺構の概要				123
2	竪穴式住居跡				124
	SC-605 (124)	SC-606 (125)	SC-670 (128)	SC-689 (131)	
	SC-729 (131)	SC-730 (132)	SC-738 (132)	SC-741 (133)	
	SC-747 (113)	SC-748 (134)	SC-750 (134)	SC-751 (135)	
	SC-752 (137)				
3	掘立柱建物				138
	SB-740 (138)	SB-743 (141)	SB-744 (142)	SB-746 (143)	
	SB-749 (143)				
4	溝				144
	SD-601 (144)	SD-602 (144)	SD-603 (145)	SD-604 (150)	
	SD-610 (150)	SD-627 (151)			
5	土壌				152
	SK-647 (152)	SK-662 (152)	SK-663 (152)	SK-666 (153)	
	SK-675 (154)	SK-684 (154)	SK-690 (155)	SK-693 (155)	
	SK-695 (156)	SK-697 (158)	SK-705 (160)	SK-710 (162)	
	SK-711 (162)	SK-713 (164)	SK-725 (164)	SK-732 (166)	
	SK-733 (167)	SK-735 (167)	SK-739 (168)		
6	炭化物集積				170
	SX-669 (170)				
7	立柱痕跡をもつ柱穴・小穴				170
8	Ⅲ層出土の遺物				177
VI	調査のまとめ				
1	古代～中世				180
2	古墳時代				193
3	弥生時代				195

挿図目次

図1	文京遺跡18次調査地点とグリーンゾーン(遺跡保存地区)配置図(縮尺1/3,500)……………2	図22	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層の耕作土出土遺物実測図(縮尺1/3)……………37
図2	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層上面の調査……………4	図23	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層の畦畔部出土遺物実測図1(縮尺1/3)……………37
図3	法文学部考古学概論講義の遺跡見学……………5	図24	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層の床土層出土遺物実測図(縮尺1/3)……………38
図4	城北キャンパス西半部の調査地点(縮尺1/2,000)……………7	図25	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層の畦畔部出土遺物実測図2(縮尺2/3)……………38
図5	道後平野の地形概要と道後城北遺跡群・文京遺跡の位置(平井1989より作成)……………9	図26	A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図1(縮尺2/3)……………40
図6	道後城北遺跡群における地形と発掘調査地点……………10	図27	A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図2(縮尺1/3)……………41
図7	1974(昭和49)年頃の愛媛大学城北キャンパス周辺……………11	図28	A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図3(縮尺1/3)……………42
図8	旧地形の復元図(縮尺1/4,000)、文京遺跡15次調査7・8トレンチ実測図(縮尺1/300、1/30)……………14-15(折り込み)	図29	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層に伴う水口部分の土層断面図1(縮尺1/20)……………44
図9	文京遺跡18次調査の基本土層概念図(縮尺1/500、1/40)……………17	図30	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層遺構配置図(縮尺1/100)……………44-45(折り込み)
図10	文京遺跡18次調査A区の出土遺構配置図1(縮尺1/300)……………18	図31	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層に伴う水口部分の土層断面図2(縮尺1/20)……………50
図11	文京遺跡18次調査A区の出土遺構配置図2(縮尺1/300)……………19	図32	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層SD-101出土遺物実測図(縮尺1/3)……………51
図12	文京遺跡18次調査A区の出土遺構配置図3(縮尺1/300)……………20	図33	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層に伴う水口部分の土層断面図3(縮尺1/20)……………52
図13	文京遺跡18次調査B区の出土遺構配置図(縮尺1/100、1/200)……………22	図34	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層SD-102出土遺物実測図(縮尺1/3)……………53
図14	壘壕出土遺物実測図(縮尺2/3)……………23	図35	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層SD-103・104・114・119・122・水口出土遺物実測図(縮尺1/3)……………54
図15	A区土層断面図(縮尺1/80)24-25(折り込み)	図36	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層SX-121出土遺物実測図(縮尺1/3)……………56
図16	A区Ⅱ-2-①層出土遺物実測図(縮尺1/3)……………25	図37	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層耕作土出土遺物実測図(縮尺1/3)……………57
図17	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層遺構配置図(縮尺1/100)……………26-27(折り込み)	図38	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層畦畔出土遺物実測図(縮尺1/3)……………58
図18	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴う水口部分の土層断面図(縮尺1/20)……………27	図39	A区Ⅱ-2-④(中層水田)層床土層出土遺物実測図(縮尺1/3)……………59
図19	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴う溝の土層断面図1(縮尺1/20)……………34	図40	A区Ⅱ-2-③層、Ⅱ-2-④(中層水田)層耕作土層・畦畔・床土層出土遺物実測図(縮尺2/3)……………60
図20	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴う溝の土層断面図2(縮尺1/20)……………35		
図21	A区Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴う水路・水口出土遺物実測図(縮尺1/3)……………36		

図41	A区SK-201~204遺構実測図(縮尺1/50)	61	図62	A区SR-400②e層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	85
図42	A区II-2-⑤層上面から掘り込まれた遺構配置図(縮尺1/100).....	62-63(折り込み)	図63	A区SR-400②e層出土遺物実測図2(縮尺1/3)	86
図43	A区SK-201・202、SD-208出土遺物実測図(縮尺1/3).....	63	図64	A区SR-400③層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	86
図44	A区SK-201出土遺物実測図(縮尺2/3)	64	図65	A区SR-400③層出土遺物実測図2(縮尺1/3)	87
図45	A区SK-201・SD-208・209出土遺物実測図(縮尺2/3)	65	図66	A区SR-400①・③層出土遺物実測図(縮尺2/3)	88
図46	A区SD-209出土遺物実測図(縮尺1/3)	65	図67	A区SR-400③層出土遺物実測図3(縮尺2/3)	88
図47	A区II-2-⑤層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	67	図68	A区DV・DW-41・42区、DX~DZ-41~44区の耕作痕跡(縮尺1/100).....	91
図48	A区II-2-⑤層出土遺物実測図2(縮尺1/3)	68	図69	A区犁による耕作痕跡出土遺物1(縮尺1/3、2/3).....	92
図49	A区II-2-⑥(下層水田)層遺構配置図(縮尺1/100).....	70-71(折り込み)	図70	A区SR-400および微高地上の遺構配置図(縮尺1/100).....	92-93(折り込み)
図50	A区II-2-⑥(下層水田)層SD-301・302・水口出土遺物実測図(縮尺1/3).....	73	図71	A区SB-410~412遺構実測図(縮尺1/50)	93
図51	A区II-2-⑥(下層水田)層SD-301出土遺物実測図(縮尺1/2).....	74	図72	A区SB-412出土遺物実測図(縮尺1/3)	94
図52	A区II-2-⑥(下層水田)層SD-301・307・水田畦畔出土遺物実測図(縮尺2/3).....	75	図73	A区SB-413遺構実測図(縮尺1/50).....	95
図53	A区II-2-⑥(下層水田)層耕作土層出土遺物実測図(縮尺1/3).....	76	図74	A区SB-414出土遺物実測図(縮尺1/3)	95
図54	A区II-2-⑥(下層水田)層畦畔部出土遺物実測図(縮尺1/3).....	77	図75	A区SB-414遺構実測図(縮尺1/50).....	96
図55	A区II-2-⑤層、II-2-⑥(下層水田)層耕作土層・畦畔部出土遺物実測図(縮尺2/3)	77	図76	A区SB-415遺構実測図(縮尺1/50).....	97
図56	A区SR-400①層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	79	図77	A区SB-415出土遺物実測図1(縮尺1/3)	97
図57	A区SR-400①層出土遺物実測図2(縮尺1/3)	80	図78	A区SB-415出土遺物実測図2(縮尺1/3)	98
図58	A区SR-400②a層出土遺物実測図(縮尺1/3)	81	図79	A区SB-416遺構実測図(縮尺1/50).....	99
図59	A区SR-400②b~m層出土遺物実測図(縮尺1/3)	82	図80	A区SB-416出土遺物実測図(縮尺1/3)	100
図60	A区SR-400②b層出土遺物実測図(縮尺1/3)	83	図81	A区SB-417遺構実測図(縮尺1/50).....	101
図61	A区SR-400②i~m層出土遺物実測図(縮尺1/3)	84	図82	A区SB-417出土遺物実測図(縮尺1/3)	102
			図83	A区SB-418遺構実測図(縮尺1/50).....	103
			図84	A区SB-419遺構実測図(縮尺1/50).....	103
			図85	A区SB-419出土遺物実測図(縮尺1/3)	104
			図86	A区SB-420遺構実測図(縮尺1/50).....	105
			図87	A区SB-420出土遺物実測図(縮尺1/3)	

.....	106	層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	125
図88 A区 SB-421遺構実測図 (縮尺 1/50)	107	図112 B区 SC-606出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 125
図89 A区 SB-421出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 107	125
図90 A区 SB-422遺構実測図 (縮尺 1/50)	108	図113 B区 SC-606・741・747・748遺構実測図 (縮尺	1/50)
図91 A区 SB-422出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 108	1/50)	126
.....	108	図114 B区 SC-670遺構実測図 (縮尺 1/50)	127
図92 A区 SB-423遺構実測図 (縮尺 1/50)	109	図115 B区 SC-670出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3) 129
図93 A区 SB-423出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 109	129
.....	109	図116 B区 SC-670出土遺物実測図 2 (縮尺 1/2) 130
図94 A区 SB-424遺構実測図 (縮尺 1/50)	110	130
図95 A区 SB-424出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 110	図117 B区 SC-670上面Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺 1	/3)
.....	110	130
図96 A区 SK-401・402・406・407・408・425遺構実 111	図118 B区 SC-689・738遺構実測図 (縮尺 1/50) 131
測図 (縮尺 1/50)	111	131
図97 A区 SK-401・408出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 112	図119 B区 SC-729、SK-713遺構実測図 (縮尺 1/50) 132
.....	112	132
図98 A区 SK-401出土遺物実測図 (縮尺 2/3、1 112	図120 B区 SC-729・SC-730・SC-738出土遺物実測図 (縮	尺 1/3)
/3)	112	尺 1/3)	132
図99 A区 SK-402出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3) 113	図121 B区 SC-730・SC-735遺構実測図 (縮尺 1/50) 133
.....	113	133
図100 A区 SK-402出土遺物実測図 2 (縮尺 1/3) 114	図122 B区 SC-750遺構実測図 (縮尺 1/50)	134
.....	114	図123 B区 SC-750出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3) 134
図101 A区 SK-402出土遺物実測図 3 (縮尺 1・2 : 114	134
2/3、3 : 1/2)	114	図124 B区 SC-750出土遺物実測図 2 (縮尺 1/2) 135
図102 A区 SK-402出土遺物実測図 4 (縮尺 1/3) 115	135
.....	115	図125 B区 SC-750出土遺物実測図 3 (縮尺 1/2) 135
図103 A区 SK-404・406・407・425出土遺物実測図 (縮 117	135
尺 1/3)	117	図126 B区 SC-751・752遺構実測図 (縮尺 1/50) 136
.....	117	136
図104 A区 SD-405遺構実測図 (縮尺 1/50)	118	図127 B区 SC-751出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 137
図105 A区 SA-409遺構実測図 (縮尺 1/50)	119	137
図106 A区 SP-443・466・473・495・496・508・528・ 120	図128 B区 SC-752出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 138
539・566・567・569遺構実測図 (縮尺 1/50) 120	138
.....	120	図129 B区 SB-740遺構実測図 (縮尺 1/50)	139
図107 A区 SP-446・471・473・508・527・529・539・ 121	図130 B区 SB-740出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3、	2/3)
566・569出土遺物実測図 (縮尺 1/3) 121	141
.....	121	141
図108 B区土層断面図 (縮尺 1/80) 122-123 (折り込み)	図131 B区 SB-740出土遺物実測図 2 (縮尺 2/3) 141
.....	122-123 (折り込み)	141
図109 B区遺構配置図 (縮尺 1/100) 122-123 (折り込み)	図132 B区 SB-743・744・746・749遺構実測図 (縮尺	1/50)
.....	122-123 (折り込み)	1/50)	142
図110 B区 SC-605遺構実測図 (縮尺 1/50)	124	図133 B区 SB-749出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3) 143
図111 B区 SC-605・606 (DG・DH-38・39区) 上面Ⅲ 124	143

图134 B区 SB-749出土文物实测图2 (缩尺1/2)	图157 B区 SK-697出土文物实测图 (缩尺1/3)
..... 143 160
图135 B区 SD-601遣構实测图 (缩尺1/60) ··· 145	图158 B区 SK-705出土文物实测图1 (缩尺1/3、2/3) ····· 161
图136 B区 SD-601出土文物实测图1 (缩尺1/3)	图159 B区 SK-705·725遣構实测图 (缩尺1/50)
..... 145 162
图137 B区 SD-601出土文物实测图2 (缩尺1/1、1/2) ····· 146	图160 B区 SK-705出土文物实测图2 (缩尺1/2、1/4) ····· 163
图138 B区 SD-601出土文物实测图3 (缩尺2/3)	图161 B区 SK-710出土文物实测图 (缩尺1/3)
..... 147 164
图139 B区 SD-602遣構实测图 (缩尺1/60) ··· 147	图162 B区 SK-711·739遣構实测图 (缩尺1/50)
图140 B区 SD-602出土文物实测图 (缩尺1/3) 164
..... 147	图163 B区 SK-711出土文物实测图1 (缩尺1/3)
图141 B区 SD-603·604·610遣構实测图 (缩尺1/50) ····· 148 165
图142 B区 SD-603出土文物实测图 (缩尺1/3)	图164 B区 SK-711出土文物实测图2 (缩尺1/2)
..... 149 165
图143 B区 SD-603上面出土文物实测图 (缩尺1/3)	图165 B区 SK-713出土文物实测图 (缩尺1/3)
..... 149 166
图144 B区 SD-604出土文物实测图 (缩尺1/3)	图166 B区 SK-725出土文物实测图 (缩尺1/3)
..... 150 167
图145 B区 SD-610出土文物实测图 (缩尺1/3)	图167 B区 SK-725あるいはSK-732出土文物实测图1 (缩尺1/3) ····· 167
..... 151	图168 B区 SK-725あるいはSK-732出土文物实测图2 (缩尺2/3) ····· 167
图146 B区 SD-627遣構实测图 (缩尺1/60) ··· 151	图169 B区 SK-739出土文物实测图 (缩尺1/3)
图147 B区 SK-647·662·663·666·675·684·693·697·710遣構实测图 (缩尺1/50) ····· 153 169
图148 B区 SK-647·SK-662·SK-693出土文物实测图 (缩尺1/3) ····· 154	图170 B区 SX-669出土文物实测图 (缩尺1/3)
图149 B区 SK-663出土文物实测图1 (缩尺1/3) 170
..... 155	图171 B区 SP-607·608·609·611·626·637·656·659·661·683·702·715·716·723·724·737遣構实测图 (缩尺1/50) ····· 171
图150 B区 SK-663出土文物实测图2 (缩尺1/2)	图172 B区 SP-611·628出土文物实测图 (缩尺1/3)
..... 155 172
图151 B区 SK-690·695遣構实测图 (缩尺1/50)	图173 B区 SP-607·655·656·659·665·668·672·677·683·699·701·708·728出土文物实测图 (缩尺1/3、2/3) ····· 173
..... 156	图174 B区 SP-624·626·682·702·721出土文物实测图 (缩尺1/3、2/3) ····· 174
图152 B区 SK-690出土文物实测图1 (缩尺1/3)	图175 B区Ⅲ層出土文物实测图1 (缩尺1/3)
..... 157 176
图153 B区 SK-690出土文物实测图2 (缩尺1/3)	图176 B区Ⅲ層出土文物实测图2 (缩尺1/3)
..... 158 177
图154 B区 SK-690出土文物实测图3 (缩尺1/2)	图177 B区Ⅲ層出土文物实测图3 (缩尺1/2、2/
..... 159	
图155 B区 SK-695出土文物实测图1 (缩尺1/3)	
..... 160	
图156 B区 SK-695出土文物实测图2 (缩尺1/2)	
..... 160	

3)	178	図183 文京遺跡18次調査A区の遺構変遷2 (縮尺1/500)	191
図178 文京遺跡18次調査A区出土の古代～中世の遺物分類1 (縮尺1/3)	181	図184 文京遺跡18次調査B区周辺の古墳時代後期の遺構分布	194
図179 文京遺跡18次調査A区出土の古代～中世の遺物分類2 (縮尺1/3)	184	図185 文京遺跡18次調査A区における弥生時代の遺構分布 (縮尺1/500)	195
図180 各型式の層序における出土状況	186	図186 文京遺跡18次調査B区周辺の弥生時代の遺構分布	197
図181 古代後半～中世前期の土師器・黒色土器の変遷 (縮尺1/5)	187	図187 文京遺跡18次調査B区の弥生時代遺構の変遷	198
図182 文京遺跡18次調査A区の遺構変遷1 (縮尺1/500)	190		

写真図版目次

図版1-1 愛媛大学城北キャンパス (中央の運動場が調査地点、1998年12月、南西から)	2 A区調査区東壁土層	3 A区調査区北壁中央～東部土層	2 A区北東部Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (西から)	3 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-8～10東半部周辺 (北西から)	4 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-10 (DV-45-5区) 獣歯出土状況
図版2-1 A区全景 (調査前、南東から)	2 A区表土剥ぎ作業 (南東から)	図版3-1 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (東から)	2 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北東から)	2 A区Ⅱ-2-④ (中層水田) 層完掘状況 (北東から)	2 A区Ⅱ-2-④ (中層水田) 層完掘状況 (東から)
図版3-1 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (東から)	2 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北東から)	図版4-1 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (西から)	2 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北西から)	図版9-1 A区Ⅱ-2-④ (中層水田) 層完掘状況 (南西から)	2 A区Ⅱ-2-④ (中層水田) 層完掘状況 (北西から)
図版4-1 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (西から)	2 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北西から)	図版5-1 A区東半部Ⅱ-2-③ (上層水田) 層完掘状況 (北西から) 1	2 A区東半部Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北西から) 2	図版10-1 A区北半部Ⅱ-2-④ (中層水田) 層完掘状況 (南西から)	2 A区Ⅱ-2-④ (中層水田) 層SX-121 (北西から)
図版5-1 A区東半部Ⅱ-2-③ (上層水田) 層完掘状況 (北西から) 1	2 A区東半部Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北西から) 2	図版6-1 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-10周辺 (西から)	2 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-12周辺 (東から)	図版11-1 A区DV～DX-41～43区Ⅱ-2-②層下層検出の耕作痕跡 (東から)	2 A区DV～DX-41～43区Ⅱ-2-②下層検出の耕作痕跡 (西から)
図版6-1 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-10周辺 (西から)	2 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-12周辺 (東から)	3 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-18周辺 (西から)	4 A区Ⅱ-2-② (上層水田) 層SD-25 (北から)	図版12-1 A区SD-208・209 (東から)	図版13-1 A区SD-208灰ブロック出土状況 (DW-44区、東から)
図版7-1 A区北東部Ⅱ-2-② (上層水田) 層完掘状況 (北西から)				2 A区SK-201土層断面 (東から)	図版14-1 A区Ⅱ-2-⑥ (下層水田) 層完掘状況 (東から) 1

図版15-1	A区Ⅱ-2-⑥(下層水田)層完掘状況(東から) 2	図版28-1	B区南端 DH・DI-31~33区完掘状況(南から)
	2 A区Ⅱ-2-⑥(下層水田)層完掘状況(北東から)	2	B区南端 DH・DI-31~33区完掘状況(北から)
図版16-1	A区Ⅱ-2-⑥(下層水田)層 SD-301・302(東から)	図版29-1	B区 SC-670(南から)
	2 A区Ⅱ-2-⑥(下層水田)層 SD-301土層断面(DT-42区、東から)	2	B区 SK-690(南西から)
図版17-1	A区 SR-400およびⅣ層上面出土遺構(東から)	図版30-1	B区 SK-697・739(南から)
		2	B区 SK-739完掘状況(南から)
図版18-1	A区 SR-400(東から)	図版31-1	B区 SK-705(南から)
	2 A区 SR-400(南東から)	2	B区 SK-725(南から)
図版19-1	A区微高地上Ⅳ層上面出土の遺構(東から) 1	図版32-1	B区 SX-711炭化物検出状況(東から)
図版20-1	A区微高地上Ⅳ層上面出土の遺構(東から) 2	2	B区 SB-740SP-687土層(南から)
図版21-1	A区 SB-413~416検出状況(東から)	3	B区 SB-740SP-688土層(南から)
	2 A区 SB-413~416完掘状況(南から)	図版33	A区出土遺物 1
図版22-1	A区 SB-417検出状況(東から)	図版34	A区出土遺物 2
	2 A区 SB-417完掘状況(南西から)	図版35	A区出土遺物 3
図版23-1	A区 SB-419・420完掘状況(南東から)	図版36	A区出土遺物 4
	2 A区 SB-421完掘状況(南東から)	図版37	A区出土遺物 5
図版24-1	A区 SB-412・422・423完掘状況(南東から)	図版38	A区出土遺物 6
	2 A区 SK-402土層断面・遺物出土状況(東から)	図版39	A区出土遺物 7
図版25-1	B区完掘状況全景(北西から)	図版40	A区出土遺物 8
	2 B区東壁土層(北東から)	図版41	B区出土遺物 1
	3 B区東壁土層(南西から)	図版42	B区出土遺物 2
図版26-1	B区東壁土層(南西から)	図版43	B区出土遺物 3
	2 B区西壁土層(南東から)	図版44	B区出土遺物 4
	3 B区 SD-630・SD-604東壁土層(北西から)	図版45	B区出土遺物 5
	4 B区 SD-601東壁土層(南西から)	図版46	B区出土遺物 6
図版27-1	B区北半部完掘状況(西から)	図版47	B区出土遺物 7
	2 B区北半部完掘状況(北から)	図版48	B区出土遺物 8
		図版49	B区出土遺物 9
		図版50	B区出土遺物 10
		図版51	B区出土遺物 11
		図版52	B区出土遺物 12
		図版53	B区出土遺物 13

表 目 次

表1 周辺の既往調査一覧…………… 12~14

表2 文京遺跡18次調査出土主要遺構一覧…………… 21

序 説

1 調査にいたる経緯と調査体制

(1) 調査にいたる経緯

1998(平成10)年5月、施設部から埋蔵文化財調査室へ、総合情報処理センター(現 総合情報メディアセンター南棟)建物新営工事についての報告があり、6月25日には総合情報処理センター長から発掘調査の依頼があった。しかし、建物新営予定地は、前年の1997(平成9)年7月1日に松山市文化財審議会から愛媛大学に対して要望された遺跡保存範囲内にあり、以後、遺跡の保存問題とかわかって、発掘調査に着手するまで学内外との協議を進めることとなった。保存問題については、すでに2002年に刊行した『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報—1997・1998年度—』で記しているが、今回の調査と深くかわるので、これにもふれながら調査にいたる経緯を報告する。

文京遺跡の保存・保護の要望に対しては、1997年7月9日に開かれた埋蔵文化財調査委員会と既往の調査成果を踏まえた埋蔵文化財の分布状況が報告された。これを受けて、9月10日の全学の将来計画委員会は、城北団地及び山越団地長期計画検討部会に対して、施設整備基本計画の見直しの中で埋蔵文化財に対する本学の方針の検討が諮問された。11月13日に開かれた検討部会では、埋蔵文化財調査室長が遺跡の保存理由について説明し、翌1998年1月7日には埋蔵文化財調査室長名で遺跡の保存理由、保存の範囲について文書で回答した。この検討部会の審議結果は、答申として4月8日の全学の将来計画委員会に報告された。その中には、遺跡は何かの形で保存する必要があること、埋蔵文化財にかかわる事項は、必要な時点で施設整備委員会及び埋蔵文化財調査委員会などで審議することが含まれていた。

一方、5月13日の全学の施設整備委員会では、1996(平成8)年6月に文部省へ提出した建設計画可能範囲の中で総合情報処理センターの建設が了承された。遺跡の保存・保護についての審議が進められている中で、総合情報処理センター建物新営工事の決定であり、前述したように、建設予定地は松山市から要望された遺跡保存範囲内にあり、その後、埋蔵文化財調査

室と施設部だけでなく、学長、関係委員会との協議が進められる。

7月8日には、埋蔵文化財調査委員会が開催され、遺跡の保存要請と教育研究棟の設置要求との調和を図りながら、今後の施設整備にあたり、グリーンゾーンの的なものも考慮することが確認された。8月24日、埋蔵文化財調査室に大学事務局と松山市教育委員会との協議経緯が報告され、総合情報処理センター建物新営と遺跡保存範囲の関係を具体的に示してもらいたい旨の要望があったことが説明された。これを受けて、9月24日、事務局長を含めて、施設部と埋蔵文化財調査室で、遺跡保存範囲を明確にすること、工事に当たっての工法の変更などの可能性が協議された。さらに、9月30日、鮎川学長、事務局長、施設部、埋蔵文化財調査室で、総合情報処理センター建設について意見が交換され、①旧グラウンドの工学部校舎と総合情報処理センターおよび図書館建設予定地の間の範囲を埋蔵文化財の保存・保護もかねたグリーンゾーンとすることを大学長の責任として決定し、その内容と範囲を学外へ明言すること、②グリーンゾーンを設けるに伴って、総合情報処理センターの建設予定地を北側に4mずらすことの2点に沿った検討を進めることの基本方針が確認され、文化財保護法の発掘調査の届け出書類を整え、10月1日に松山市教育委員会へ提出した。10月14日に開かれた全学の施設整備委員会では、委員長である鮎川学長から、城北団地全体のキャンパス構成上からグリーンゾーンとすることが望ましい旨提案され、その範囲が検討された(図1)。その際、グリーンゾーンの将来像について委員から質問があり、委員長からは学生の憩いの場などとして予算の範囲内で整備したいとの発言があった。

以上の文京遺跡の保存・保護についての対応が具体的に決定されたことを踏まえて、埋蔵文化財調査室と施設部は、10月15日と10月20日に協議を行い、総合情報処理センター建設に伴う発掘調査について、①発掘調査の届け出の再確認の必要があること、②建設予定地がグリーンゾーンとして保存される範囲に接するため建設工法を変更すること、③工法変更に伴って調査

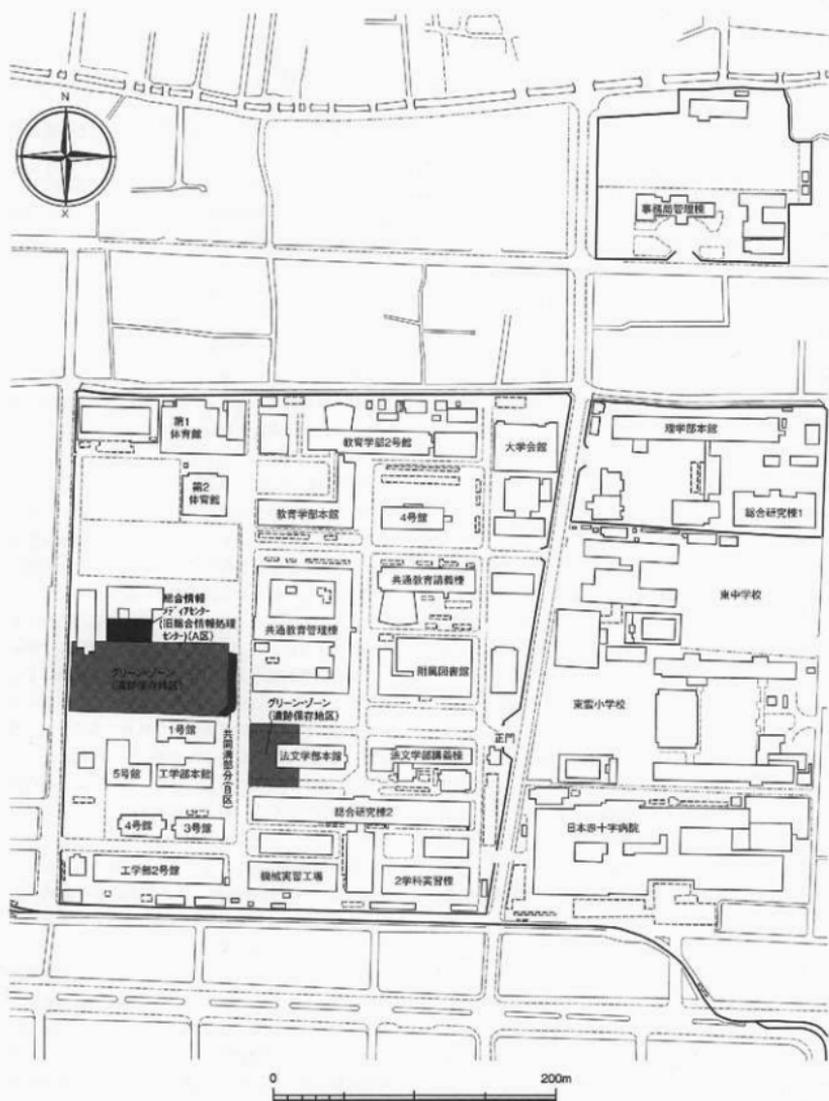


図1 文京遺跡18次調査地点とグリーンゾーン（遺跡保存地区）配置図（縮尺1/3,500）

面積が狭くなることを確認した。10月20日には、埋蔵文化財調査委員会の持ち回り審議で、グリーンゾーンの範囲、文京遺跡の保存要望書への回答、総合情報処理センター建設に伴う発掘調査の着手が了承された。その後、具体的な発掘計画について協議を進め、11月6日に施設部に発掘調査計画書を提出し、11月25日の協議では、①12月11日から発掘調査に着手すること、②調査日程については2月の時点で再協議すること、③今次調査を文京遺跡18次調査とすること、④調査区は総合情報処理センターの建物本体部分と共同溝部分であること、⑤発掘調査は建設を急ぐ建物本体部分から着手することとなった。

(2) 発掘調査体制

文京遺跡18次調査の発掘調査にかかわる1998(平成10)年度と1999(平成11)年度の埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室、施設部を含めた調査体制は、以下の通りである。

(埋蔵文化財調査委員会)

(委員長)

学 長 鮎川恭三 (1998年度)

副学長 渡部晴行 (1999年度)

(委 員)

法文学部長 小松光三 (1998年度)

藤川研策 (1999年度)

法文学部教授 下條信行

松原弘宣

教育学部長 向井康雄

教育学部助教授 川岡 勉 (1999年度 教授)

理学部長 小松正幸

医学部長 植田規史 (1998年度)

前田信治 (1999年度)

工学部長 有井清益

農学部長 西頭徳三 (1998年度)

白石整也 (1999年度)

事務局長 田中 勇 (1998年度)

久保庭伊佐男 (1999年度)

庶務部長 久保芳廣

経理部長 深谷英夫 (1998年度)

野添文男 (1999年度)

施設部長 鐔物良雄

(埋蔵文化財調査室)

(室長) 下條信行 (法文学部・教授、調査の総括)

(調査員) 田崎博之 (法文学部・助教授)

吉田 広 (法文学部 講師)

三吉秀亮 (法文学部・助手)

(調査補助) 宮崎直栄 (施設部事務補佐員)

(庶務担当) 鈴木優子 (施設部事務補佐員)

(調査補助員)

坂元 恒太 (愛媛大学法文学部考古学専攻生学部
3年生、現ミュージアム知覧)

丸毛のぞみ (同3年生、現今治市教育委員会)

武田 尊子 (同3年生、現松山市教育委員会)

田中久美子 (同3年生)

田中いづみ (同2年生、現西条市教育委員会)

(施設部)

(部長) 鐔物良雄

(総務係長) 赤坂宏光

(企画課長) 大谷 治

(企画係長) 氏原 修

(施設課長) 細谷 聖

(第一工営係長) 篠崎正敏

(第一工営係主任) 城戸芳夫

(3) 発掘調査の経過

今次調査の調査区は総合情報処理センターの建物本体部分と共同溝部分に分かれている(図1)。建物本体部分をA区、共同溝部分をB区とし、A区から発掘調査に着手することとした。当初、1998(平成10)年12月11日から開始する予定であったが、調査計画書の提出など、調査に関わる書類の不備が明らかとなり、実際に調査を開始したのは12月15日であった。その間は、雨水の流入を防ぐため調査区周辺で土壌積みなどを行い、環境整備に努めた(図版1-1)。

発掘調査は、まず重機で表土の真砂土層を除去した後、A区南東隅で基本層序のⅡ層を掘り下げ、地表下135cmで、後述する15次調査7トレンチのⅡ層を上下に分ける砂礫層に対応する堆積土層を確認した。この砂礫層の上面からは土師器の小片が出土した。そこで、砂礫層より上位のⅡ層をⅡ-1層、砂礫層以下をⅡ-2層とし、Ⅱ-1層の最下面まで重機で掘り下げた。

12月18日には、Ⅱ-1層最下面までの重機による除去が終わったA区東半部から、Ⅱ-2層最上部の砂礫層上面まで人力で掘り下げを始める。12月24日には、

構内に設置された基準点から国土座標系を移動し、5m方眼に測量用の杭を打ち始める。年末年始の休業を終わり、1月5日から調査を再開。A区西半部で15次調査8トレンチの位置を確認した。また、塹壕が縦横に掘り込まれており、これらを人力で掘り下げ始める。1月6日には測量用の杭を打ち終わり、以後、文京遺跡全域で設定した調査区割りで遺構の位置確認と遺物の取り上げを始める。また、A区東壁沿いに先行トレンチを設定して、Ⅱ-2層以下の土層の堆積状況を観察した。その結果、調査区南半部で基本層序のⅣ層が落ち込み、北半部に谷状の窪地が形成されていることを確認できた。その谷状の窪地の上部に堆積しているのがⅡ-2層である。Ⅱ-2層は、6層の砂礫層と水田層と考えられる土層から構成されており、最上部の砂礫層をⅡ-2-①層とし、以下Ⅱ-2-⑥層まで分層した。Ⅱ-2-①・③・⑤層は砂礫層、Ⅱ-2-②・④・⑥層は水田層である。なお、調査時には、Ⅱ-2-②層を上層水田、Ⅱ-2-④層を中層水田、Ⅱ-2-⑥層を下層水田と呼称した。

Ⅱ-2層の下層には、上部から砂礫混じりの灰茶色土層、灰白細砂・粗砂層、基底面の拳〜人頭大の円礫を主体とする礫層が堆積している。谷状の窪地を流れる自然流路が埋積する過程で堆積した土層である。この自然流路をSR-400とした。

その後、A区東半部からⅡ-2-①層の砂礫層を掘り下げ、Ⅱ-2-②(上層水田)層の畦畔部の上面を検出する。1月22日までに、Ⅱ-2-②(上層水田)層上面で水田区画と溝を検出し終え、1から順番の遺構番号を与えて、遺構ごとの精査を始める(図2)。A区南半部では、Ⅱ-2-②(上層水田)層の上半はⅡ-1層の耕作で削平され、床土にあたる下半部しか残存していない。Ⅱ-2-①層の除去が終わったA区東半部から実測作業を開始。2月4・5日で全体写真を撮影した。2月8日からⅡ-2-②(上層水田)層の掘り下げと精査に着手した。

2月16日、A区南半部の微高地部分では、基本層序のⅣ層があらわれている。このⅣ層上面では、犁跡と考えられる幅が狭い溝群が東西にいく列ものびる。また、弥生時代〜古墳時代と考えられる遺構を検出できた。これらの弥生時代〜古墳時代と考えられる遺構は、A区北半部にひろがるⅡ-2-③層以下の調査を終了後に進めることとした。

2月12日、施設部に調査の進捗状況を報告するとと



図2 A区Ⅱ-2-②(上層水田)層上面の調査

もに、調査期間を含めて発掘調査計画の見直しを行う。協議の結果、3月下旬までA区Ⅱ-2-④(中層水田)層に伴う水田・水路の調査、4〜5月にⅡ-2-⑥(下層水田)層および微高地上の弥生時代〜古墳時代の遺構の調査、6〜7月に共同溝部分のB区の調査を行うことし、発掘調査期間の変更を施設部に依頼した。また、2月24日には3月以降の調査補助員・作業員の動員計画を協議。2月26日には施設部へ発掘調査計画書を再提出した。

3月1日、作業員を2グループに分けて、A区西半部ではⅡ-2-②(上層水田)層の下半部(床土層)の精査を進める。東半部ではⅡ-2-③層の砂礫層を掘り下げている。下層のⅡ-2-④(中層水田)層の上面で、水田区画や溝の大略が検出されつつある。測量杭の打ち直しを行い、下層のⅡ-2-④(中層水田)層上面で検出した遺構配置図を作成し、101からの連番の遺構番号を付していく。3月17日、Ⅱ-2-④(中層水田)上面で出土した水田跡・溝の精査と、A区東半部の遺構実測作業を終わり、3月18日には全景写真を撮影した。3月23日、A区西半部の遺構実測作業を再開するとともに、Ⅱ-2-④(中層水田)層の掘り下げ精査を東半部から開始する。3月29日、A区西壁に積み上げていた土壌が倒壊した。終日かけて土壌を積み直す。

4月に入り、Ⅱ-2-④(中層水田)層下に堆積した砂礫層であるⅡ-2-⑤層を掘り下げ始める。4月7日にはⅡ-2-⑥(下層水田)層上面での遺構検出作業を開始。4月8日には愛媛大学歴史学研究会、14・21・26日には法文学部学生の遺跡見学がつづく(図3)。4月15日、A区東壁が部分的に倒壊したため、壁の削り直しを行うなど安全確保に努める。

4月20日にはA区全域でのⅡ-2-⑥(下層水田)



図3 法文学部考古学概論講義の遺跡見学

層上面の水田や溝の検出作業を終え、各水田面を覆う砂礫層であるⅡ-2-⑤層を掘り下げていった。その過程で、部分的に周辺よりも礫が多く混じる帯状の掘り込みがあることに気がついた。再度、遺構検出面を確認したところ、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層の水田区画や溝を切る遺構を検出できた。溝・土塹・小穴があり、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層を覆う砂礫層であるⅡ-2-⑤層を切り込んでいることを確認できた。つまり、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層の上面で、新旧2時期の遺構を同時に検出したことになる。そこで、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層の水田区画や溝に301から、これらを切り込む遺構には201からの連番の遺構番号を付して区分することとした。遺構の精査と実測作業を進め、5月11日、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層上面の水田や溝の全景写真を撮影した。その後、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層の掘り下げを進める。5月15日、現地説明会を開催し、150名の参加者があった。その後、Ⅱ-2層下層のSR-400を埋積する土層を掘り下げ始める。同時に、A区南半部の微高地上に営まれた掘立柱建物、土塹、

小穴の調査を開始する。これらの遺構については、401からの連番の遺構番号を付した。

このSR-400の河道上面まで調査した時点で、表土層から28mほどの深さとなっている。これ以上掘り下げを進めると調査壁が倒壊すると判断した。そこで、A区壁際に沿って河道内の砂礫堆（中州）に1.5m幅の深掘りトレンチを設定して掘り下げることとし、下層の調査は断念せざるをえなかった。6月5日、SR-400と微高地上の遺構の実測を終了し、A区北壁の土層断面を作成し、これをもってA区の調査を終了した。

6月10日、B区の発掘調査に着手する。5月に先行してB区の表土にあたるⅠ層を掘り下げていたので、Ⅱ層と攪乱部分を重機で除去する。6月12日、測量用の杭打ち。B区の南半部で東西にのびる溝が2条出土、北端部ではA区で出土したSR-400への落ち込みを確認した。また、B区南半部では、基本層序のⅢ層上面で遺物が点々と出土し始め、これ自体が遺構埋土であることが考えられた。そこで、Ⅲ層を薄く掘り下げながら、その都度遺構の検出作業を繰り返した。その結果、何重にも重複する遺構を検出することができた。これらのB区の遺構には、601からの連番の遺構番号を付している。

こうしたB区での遺構検出の困難さと、遺構の重複が激しいことから、その精査にはかなりの時間をかけることとなった。そのため、施設部と協議を行い、再度調査期間を変更せざるをえなかった。そのため、B区の調査を終えることができたのは7月30日であった。8月2日、発掘器材の撤収を行い、18次調査を完全に終了した。

2 整理作業と報告書刊行の体制と経過

発掘調査の終了後、2000（平成12）年度に出土遺物の洗浄・注記作業、遺物の分類・復元作業、2001（平成13）年度には遺構実測図および写真の整理、一部の遺構実測図の浄書を行った。しかし、1999年度以降も大面積の全面調査が引き続き実施されたため、整理作業を中断せざるをえず、出土遺物の実測作業に入ったのは2004（平成16）～2005（平成17）年度となった。また、報告書の刊行は当初、2005（平成17）年度を計画していたが、年度末まで実測作業が終わらず、やむ

をえず刊行を2006（平成18）年度に繰り越すこととなった。

この間の埋蔵文化財調査委員会、埋蔵文化財調査室の体制は、以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）

副学長 小松正幸（2000～2001年度）

理事 小林展章（2004年度）

理事 橋澤康信（2005年度）

副学長 林 和男 (2006年度)	経営企画部長 山田勝治 (2004～2005年度)
(委員)	山之内恵一 (2006年度)
副学長(総務・施設担当) 亀井 崇 (2006年度)	経理部長 野添文男 (2000年度)
法文学部長 藤川研策 (2000～2001年度)	高橋伸一 (2001年度)
今泉元司 (2004年度)	白石薫二 (2004年度)
湯浅良雄 (2005年度)	財務部長 八木修一 (2005～2006年度)
森 孝明 (2006年度)	施設部長 土居昌弘 (2000～2001年度)
法文学部教授 下條信行	山地久司 (2004年度)
松原弘宣	施設基盤部長 山地久司 (2005～2006年度)
教育学部長 金藤泰伸 (2000～2001年度)	(埋蔵文化財調査室)
渡邊弘純 (2004～2005年度)	(室長) 下條信行 (法文学部・教授)
曲田清維 (2006年度)	(調査員) 田崎博之 (法文学部・教授)
教育学部教授 川岡 勉	吉田 広 (法文学部・講師、2002年より
理学部長 真鍋 敬 (2000～2001年度)	助教)
柳澤康信 (2004年度)	三吉秀充 (法文学部・助手)
野倉嗣紀 (2005～2006年度)	(調査補助) 宮崎直栄 (施設部事務補佐員、2002年
医学部長 前田信治 (2000年度)	より教務補佐員)
小西正光 (2001・2004年度)	(庶務担当) 鈴木優子 (施設部事務補佐員、2000年度)
橋本公二 (2005～2006年度)	横本順子 (施設部事務補佐員、2001年度)
工学部長 清水 顯 (2000～2001年度)	渡邊おおる (施設部事務補佐員、2004
鈴木幸一 (2004～2005年度)	～2006年度)
高松雄三 (2006年度)	(整理作業担当) 丸岡美智子 (施設部技能補佐員)
農学部長 白石雅也 (2000～2001・2004年度)	井手野文江 (施設部技能補佐員)
泉 英二 (2005～2006年度)	門田 都 (施設部技能補佐員)
事務局長 久保庭伊佐男 (2000年度)	松本美和子 (施設部技能補佐員)
塩谷茂雄 (2001年度)	(遺物実測担当) 西澤昌平 (施設部技術補佐員、
田村幸男 (2004年度)	2005年度)
門山 勇 (2005年度)	濱田美加 (施設部技術補佐員、
庶務部長 久保芳廣 (2000年度)	2004～2006年度)
総務部長 大和田和平 (2001年度)	

3 調査・整理の方法と遺物・記録類の保管

(1) 調査区割りの設定と呼称

18次調査で発掘調査の対象となったのは、総合情報処理センター(現 総合情報メディアセンター南棟)建物本体部分と、これに接続する共同溝部分である。距離的にも離れており、文京遺跡の遺構分布も考慮し、建物本体部分をA区、共同溝部分をB区として調査を進めた(図4)。

A区は、城北団地西部の旧グラウンド北部に位置す

る南北23m、東西38.5mの調査区である。現在の総合情報メディアセンター建物の南棟部分にあたる。文京遺跡15次調査8トレンチはA区の南西部に含まれ、旧グラウンドに設けられた文京遺跡の保存地区(グリーンゾーン)の北側に接している。

B区は、城北団地のほぼ中央部、A区の南東側に位置し、旧グラウンド東側に沿った南北約40m、東西幅約6mの細長い調査区である。調査区の南端は文京遺跡14次調査区に接し、保存地区(グリーンゾーン)の

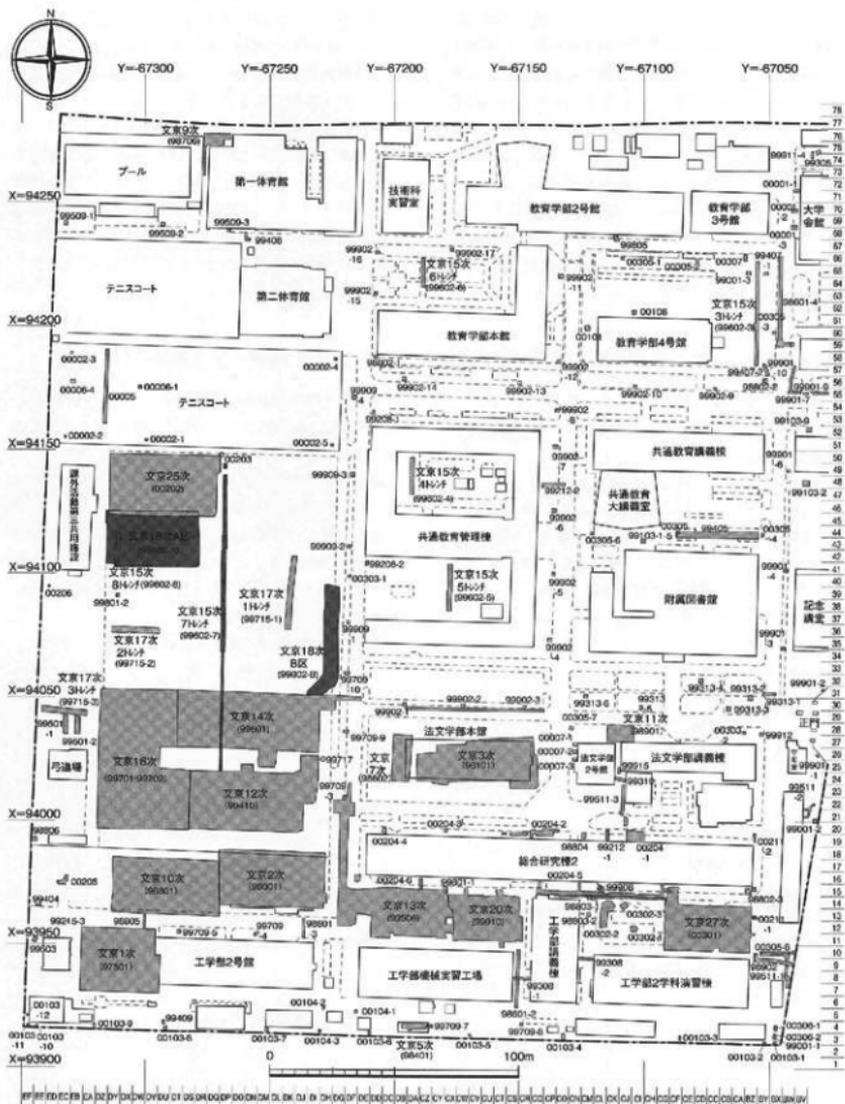


図4 城北キャンパス西半部の調査地点 (縮尺 1/2,000)

東側に隣接する。

以上のA・B区の調査区名に加えて、城北団地内に設置されている平面直角座標Ⅳ系基準点から、座標点を移動して、5m方眼の調査区割を設定した。この調査区割は、1998(平成10)年にX=93900、Y=66800を基点として設定した城北団地全域をカバーする調査区割である。A区はDR～DS-41～45区にあたる。B区はDG～DI-31～40区にあたる(図4)。さらに、必要に応じて、5m方眼を、南東隅から西に1～5、その北側を6～10と、北西隅の25にいたる1m方眼区画に細分している。この1m方眼を示す場合は、「DR-15-14区」などと呼称することとした。

(2) 遺構・遺物の登録番号と種別の表示

調査は、まず建物部分であるA区に着手し、次いでB区の調査を行った。出土した遺構は、以下の連番の遺構番号を付している。

A区Ⅱ-2-②(上層水田)層の遺構：1～42

A区Ⅱ-2-④(中層水田)層の遺構：101～123

A区Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑥層間の遺構：201～214

A区Ⅱ-2-⑥(下層水田)層の遺構：301～317

A区Ⅱ-2層下層出土の自然流路：400

A区南半部の微高地上の遺構：401～600

B区の遺構：601～741

以上の遺構番号に加えて、

SB：掘立柱建物

SC：竪穴式住居跡

SD：溝

SK：土塼

SP：柱穴・杭穴・小穴

SR：自然流路(旧河道)

SX：その他の遺構

の遺構の種別を示す略号を遺構番号に冠している。

出土した遺物には、以下のように、各層単ごとに遺物番号を付した。

A区Ⅱ-2-①・②層出土遺物：R-1～422

A区Ⅱ-2-③・④層出土遺物：R-501～985

A区Ⅱ-2-⑤・⑥層出土遺物：R-1001～1263

A区SR-400出土遺物：R-1301～1437

A区微高地上の遺構群出土遺物：R-1501～2517

B区出土遺物：R-2551～2653

さらに、同じ登録番号をもつ複数の遺物で実測および写真撮影した遺物には、R-3001～4582の遺物登録番号を付与した。遺物には、遺構、出土区・層位と遺物登録番号を注記し、遺物台帳を作成した。本書に掲載した遺物は、巻末の遺物観察表に遺物登録番号・コンテナ番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。

(3) 調査記録類・出土遺物の保管

発掘調査時の記録類には、遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。遺構の観察所見記録は、埋土の土質・色調やメモ類で、遺構台帳を作成し、個々の観察記録とした。調査区内のすべての遺構の全体図と、調査区壁の土層断面図を20分の1の縮尺で作成し、主要な遺構については20分の1、または10分の1の縮尺で個別図を作成した。これらの実測図には、0001からの4桁の連番の登録番号を付し、遺構実測図台帳に順次登録して整理・保管している。

遺物実測図には、001～3桁の連番の登録番号を与えて、順次、遺物台帳に記録した。また、遺物を収納したコンテナ箱には、001～の3桁の登録番号を付して、遺物台帳に記入している。

調査および整理の際には、35mmモノクロ・カラーズライド、6×7モノクロ・カラーズライドによる写真を撮影した。写真類は、カットごとに検索用のカードを作成し、写真登録番号を付して、台帳に記録している。各フィルムは、35mmモノクロに3桁+2桁(001-01～)、35mmカラーズライドには3桁(001～)、6×7モノクロ・カラーズライドには4桁(0001～)の通しの登録番号を付し、検索用カードと写真台帳に併記している。

I 位置と環境

1 文京遺跡の位置と環境

文京遺跡が所在する道後平野（松山平野）は、四国西南部に位置し、重信川や石手川などが造る東西20km、南北17kmの複合扇状地性平野である（図5）。平野の中で弥生時代の遺跡は、丘陵裾の段丘緑辺や扇状地上の微高地ごと、あるいは狭い谷を挟んだ丘陵上に、10グループほどの遺跡群を形成している。中でも、平野北部の石手川が造る標高20～50mの扇状地の北半部に展開しているのが道後城北遺跡群である。現在の道後温泉周辺から松山城のある勝山と御幸寺山に挟まれ、北側の祝谷を含め、東西2km、南北1～2kmほどの広がりをもつ。道後平野の他の遺跡群と比べて、弥生時代前期～終末期の遺跡が数多く確認され、遺跡密度も高く、道後今市遺跡・道後極又遺跡・祝谷六丁場遺跡・道後公園山麓遺跡では平形銅剣が出土するなど、道後平野の中でも青銅器が集中する中心的な遺跡群である。

こうした道後城北遺跡群が展開する石手川扇状地の北半部は、これまでの発掘調査によって、旧流路である谷状の窪地が網目状に発達すること、窪地間の微高地は窪地からの比高差が2～3mと1.5m前後の2つの地形面から構成されていること、集落遺跡は微高地でもより高い地形面を中心として営まれていることが明らかにされてきた（図6）。

この道後城北遺跡群のほぼ中央には、南北200m、東西700mの微高地が広がる。遺跡群の中でもっとも広い微高地である。西半部に松山大学構内遺跡や松山北高等学校構内遺跡、東半部に愛媛大学城北キャンパスの文京遺跡や日本赤十字病院遺跡が営まれている。現在、これらの遺跡を総称して「文京遺跡」と呼んでいる。

その文京遺跡でも東半部にあたる愛媛大学城北キャンパスでは、1947年の校舎建設中に弥生土器や石庭丁



図5 道後平野の地形概要と道後城北遺跡群・文京遺跡の位置(平井1989より作成)

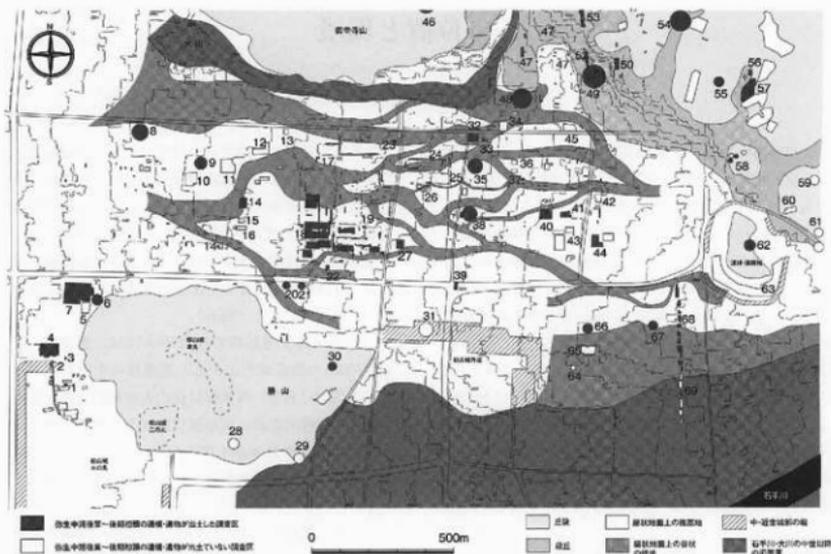


図6 道後城北遺跡群における地形と発掘調査地点

- 1: 松山城跡(旧国立病院四国がんセンター)、2: 堀之内遺跡、3: カキツバタ遺跡、4: 若草町遺跡2次、5: 若草町遺跡3次、6: 府中町遺跡、7: 若草町遺跡1次、8: 勝山中遺跡、9: 松山大学構内遺跡、10: 松山大学構内遺跡2次、11: 松山大学構内遺跡1次、12: 松山大学構内遺跡1次、13: 道後城北RNB遺跡、14: 松山北高遺跡4次、15: 松山北高遺跡1次、16: 松山北高遺跡2・3次、17: 文京遺跡9次、18: 文京遺跡1~3・5・7・10・12・14~17次、19: 文京遺跡11次、20: 速可遺跡、21: 水口遺跡、22: 平和通り遺跡、23: 道後種又遺跡2次、24: 文京遺跡8次、25: 文京遺跡21・24次、26: 文京遺跡4次、27: 日本赤十字病院遺跡、28: 城ノ内古墳、29: 城山遺跡、30: 東雲神社遺跡、31: 土器塚遺跡、32: 今市遺跡、33: 道後今市遺跡9次、34: 道後北代遺跡、35: (伝)種又銅剣出土推定地、36: 道後今市遺跡10次、37: 道後今市遺跡8次、38: 道後今市遺跡・道後今市遺跡6次、39: 道後一万遺跡、40: 道後今市遺跡2・11次、41: 道後今市遺跡1次、42: 道後今市遺跡5次、43: 道後今市遺跡3次、44: 道後今市遺跡4次、45: 緑台遺跡、46: 山崎遺跡、47: 緑台遺跡、48: 土居窪遺跡、49: 緑台遺跡、50: 土居窪遺跡1次、51: 土居窪遺跡2次1・2区、52: 土居窪遺跡2次3区、53: 祝谷畑中遺跡、54: 土居の段遺跡、55: 田高遺跡、56: 道後鷺谷遺跡、57: 道後鷺谷遺跡、58: 野山遺跡、59: 伊佐間波神社裏古墳、60: 道後姫塚遺跡、61: 善安寺遺跡、62: 道後公園山麓遺跡、63: 道後陸城跡、64: 持田遺跡、65: 持田町3丁目遺跡、66: 持田遺跡、67: 道後南町2丁目遺跡、68: 岩崎遺跡5・6区、69: 岩崎遺跡3・4区

が採集され、1962年に弥生時代の大量の遺物が出土したことが西田栄(1967)や名本二六雄(1967)によって報告されている。1975年の1次調査では、竪穴式住居が出土したことで弥生時代の集落遺跡であることが明らかにされ、その後は松山市教育委員会、愛媛大学法文学部考古学研究室や埋蔵文化財調査室によって28次の大規模調査が行われてきた。試掘・立会・確認調査の80ヶ所ほどの小規模調査を含めると、現在、約17,800㎡が調査されている。その結果、縄文時代前期

～後期の河川跡や野外炉、晩期終末の土器溜まり、弥生時代の竪穴式住居・掘立柱建物・貯蔵穴・土壘・方形や円形の円溝遺構・溝、古墳前期後半期の竪穴式住居・土壘、古墳後期の竪穴式住居・掘立柱建物・土壘・溝・鍛冶遺構、中世の掘立柱建物・溝などが出土し、さらに今回の調査では、古代後半期の水田跡・溝・貯水遺構・掘立柱建物が発見され、縄文時代から中世にわたって継続して営まれた複合遺跡としての性格が明らかになってきた。



図7 1974（昭和49）年頃の愛媛大学城北キャンパス周辺

2 周辺の既往調査

愛媛大学城北キャンパス南西部は、もともとグラウンドであったが（図7）、1980年以降、南側から旧グラウンドを縮小しながら、工学部3号館（1980年度、2次調査）、4号館（1988年度、10次調査）、本館（1994年度、12次調査）、1号館（1996年度、14次調査）、5号館（1997年度、16次調査）が建設されてきた（図4、表1）。これらの地点では、弥生時代中期後葉～後期の竪穴式住居・掘立柱建物・貯蔵穴・土塼・円形周溝遺構・溝、古墳時代後期の竪穴式住居・掘立柱建物・土塼・溝が、密集した状態で出土している。また、西側の法文学部本館（3・7次調査）周辺では、弥生時代中期後葉～後期前葉の竪穴式住居・掘立柱建物・土塼・方形周溝遺構に加えて、大型掘立柱建物が発見さ

れている。さらに、南西側の無細胞生命科学研究センター（13次調査）やサテライト・ベンチャー・ビジネスラボラトリー（20次調査）では、弥生時代中期後葉～後期前葉の竪穴式住居跡に加えて、古墳時代後期の竪穴式住居・掘立柱建物・溝・鍛冶遺構などが出土している。

こうした城北キャンパス南西部は、前述した文京遺跡が営まれる微高地のほぼ中央部にあたり、弥生時代中期後葉～後期前葉の大規模集落が展開し、古墳時代後期には工学部1号館（1996年度、14次調査）や5号館（1997年度、16次調査）周辺と、無細胞生命科学研究センター（13次調査）やサテライト・ベンチャー・ビジネスラボラトリー（20次調査）の2ヶ所に分かれ

表1 周辺の既往調査一覧

調査 番号	調査 回数	調査 種別	面積 (㎡)	調査概要	文献
97501	1次	本格	750	発生中期後葉～後期初期の契式住居跡4、土壌などが出土。	松山市報 11
99001	2次	本格	600	発生中期後葉～後期初期の契式住居跡3、竪立柱建物5、土壌5、円形溝遺構1、土器群1が出土。	松山市報 26
99101	3次	本格	800	発生中期後葉～後期初期の契式住居跡7、方形溝遺構1、土壌8、大型竪立柱建物の一部が出土。	松山市報 28
99401	5次	本格	16	発生中期後葉～後期初期の土壌(7)1、古墳後期の竪立柱建物1が出土。	松山市報 28
99801	6次	本格	99	未報告	未報告
99602	7次	本格	142	発生中期後葉～後期初期の契式住居跡、大型竪立柱建物などが出土。	未報告
99706	9次	本格	62	地表面85cmで土層を確認。厚さ5cm、下位の好層へ縄文後期の土器が出土。	調査報告書Ⅱ
99801	10次	本格	1075	発生中期後葉～後期前期の契式住居跡4、竪立柱建物2、溝10、円形溝遺構1、土壌6、土器群より12、土器群よりから中国製片・磁器類・鉄器・ガラス片が出土。	調査報告書Ⅱ
99802	事前		5	2トレンチ 土層を確認。 3トレンチ 建物基礎の発見部分。	調査報告書Ⅴ
99803	事前		2	1トレンチ 地表面40cmで土層を確認。 2トレンチ 地表面40cmで土層を確認。	調査報告書Ⅴ
99804	事前		1	建物基礎部分で、掘削を受けていた。	調査報告書Ⅴ
99805	立会		6	北側部で小穴3基を確認。中央部には埋込部分。	調査報告書Ⅴ
99806	立会		3.4	地表面70cmで土層を確認。土層を調査したが、遺物は出土していない。	調査報告書Ⅴ
99901	11次	本格	65	土層上部で古墳・中世の溝2が出土。土層中位～N層上部で発生中期後葉～後期初期の溝1・土壌2・小穴を確認。分銅形土製品・磁器類が出土。N層中位で縄文後期の野付石3が出土。縄文土器・石器・遊石が出土。	調査報告書Ⅱ
99902	立会		2	西岸は掘削が確認。中央部では地表面50cmでN層下部にN層があらわれる。東端部では地表面38cmで土層を確認。厚さ7cm、	調査報告書Ⅴ
99001	事前		3	1トレンチ 地表面70cmで、土層上位を確認。 2トレンチ 地表面38cmで、土層上位を確認。 3トレンチ 地表面50cmで、土層上位を確認。	調査報告書Ⅴ
99206	立会		2	1トレンチ 地表面75cmまで掘削がつづく。 2トレンチ 地表面70cmで自然流路遺構があらわれる。発生土器もしくは土器部と考えられる土器片が出土。	調査報告書Ⅴ
99212	立会		12	1トレンチ 地表面90cmで土層を確認。N層上部で円形の契式住居跡の一部が出土。 2トレンチ 地表面55～98cmは青褐色砂層が確認され、下位のN層上部で土壌1と小穴1を確認。小穴の上面からは縄文晩期葉～発生前期初期の土器片が出土。	調査報告書Ⅴ
99215	立会		2	3トレンチ 既設管路上で、掘削が続く。	調査報告書Ⅴ
99305	立会		2	地表面60cmで土層があらわれ、厚さ58cm以上を測る。	調査報告書Ⅴ
99308	立会		8	1トレンチ 地表面70cmまで掘削部分。 2トレンチ 地表面32cmで土層があらわれる。土層は厚さ615cm、出土遺物なし。	調査報告書Ⅴ
99310	事前		4	地表面62cmで土層があらわれる。土層の厚さは12cm前後。N層上部で発生1の遺構を確認。遺物は出土していない。 1トレンチ 地表面66cmで土層があらわれる。土層は厚さ25cm、遺物は出土していない。 2トレンチ 地表面95cmで土層があらわれる。土層中位から溝が掘り込まれていた。時期は不明。N層上部で落ち込みを確認。	調査報告書Ⅴ
99313	事前		15	1トレンチ 地表面70cmで土層を確認。土層からは土器片が出土。 4トレンチ 地表面92cmで土層を確認。土層からは遺物が出土していない。表土下120～210cmにはN層が埋積。N層中位から縄文晩期葉の土器片が出土。 5トレンチ 地表面95cmで土層があらわれる。土層の厚さは20～30cm、南に向かって次第に厚くなる。遺物は出土していない。土層以下にはN層が埋積。 6トレンチ 地表面70cmで、厚さ10cmほどの土層を確認。埋込部分から縄文土器の破片が出土。	調査報告書Ⅴ
99404	立会		1	地表面54cmで、厚さ20cmの土層を確認。土層中からは、発生中期後葉～後期初期の溝や分銅形土製品が出土。遺物の埋土である可能性あり。	調査報告書Ⅴ
99405	事前		81.3	地表面95cmまで掘り下げたが、土層が続く。	調査報告書Ⅴ
99407	事前		5.9	1トレンチ 地表面60cmまで配管敷設のための掘削がつづく。 2トレンチ 地表面63cmの土層重下で土層があらわれる。	調査報告書Ⅴ
99408	事前		3.2	地表面70cmまで掘削したが、掘削された土層がつづく。	調査報告書Ⅴ
99409	立会		1	地表面115cmで土層上位を確認。土層上部から発生土器片が出土。	調査報告書Ⅴ
99410	12次	本格	1183	発生中期後葉～後期初期の契式住居跡30、竪立柱建物5以上、貯蔵穴14、溝1、土壌60以上、古墳後期の溝1が出土。発生中期後葉～後期中期の遺物には、石倉丁・圓形刀石・打石磁器・土製鉄器・大量の炭化米などがある。古墳後期の溝からは馬の骨が出土。	調査報告書Ⅴ
99501	立会		48	1トレンチ 地表面60cmで土層を確認。 2トレンチ 地表面61cmで土層を確認。 3トレンチ 地表面95cmで土層があらわれ、120cmまでつづく。	調査報告書Ⅴ
99503	立会		3	地表面85cmで、厚さ13cmの土層を確認。さらに、地表面100cmで土層があらわれる。	調査報告書Ⅴ
99506	13次	本格	890	発生中期後葉～後期初期の契式住居跡11、大型竪立柱建物1、溝6、土壌13、土器群より2、宮場前期の契式住居跡1、古墳後期の契式住居跡14、竪立柱建物13、板石1、鍛冶石1、土壌17、焼土・灰ブロック12、古代～中世の溝2、土壌1などが出土。	調査報告書Ⅴ文Ⅱ
99509	立会		3	1トレンチ 地表面100cmで自然流路遺構があらわれる。厚さ50cm、その下位はN層。 2トレンチ 地表面60cmで土層を確認。厚さ6cm、下位の好層へ土層の変化は漸移的。 3トレンチ 地表面100cmで土層を確認。厚さ6cm、下位の好層へ土層の変化は漸移的。	調査報告書Ⅴ
99511	立会		34	1トレンチ 1/4分米単位では、地表面20cmで、N層上部があらわれ、中世～近世の溝1、土壌2が出土。掘削部では、地表面下26～30cmで、土層があらわれた。土層は南に向かって次第に厚くなり厚さ約60cmを越える。発生中期後葉の馬骨や銅台付石が出土。 2トレンチ 地表面63cmで自然流路遺構である灰色砂層があらわれる。 3トレンチ 地表面90cmで、厚さ23cmの土層を確認。	調査報告書Ⅴ

調査 番号	調査 次数	調査 種類	面積 (㎡)	調査概要	文献
99601	14次	本稿	1349	発生前後第一～後期中頃の壱次式住居跡40・竪立柱建物・溝・土壌が出土。石灰土・石片・打撃石類・土粒動体・隕石・銅製土器類が出土。また、古墳後期の壱次式住居跡が出土。 3トレンチ 地表面45～75cmで土層を確認。B層下層で、一辺5.5mの壱次式住居跡1・自然流路1などが出土。 4トレンチ 地表面70cmで土層があらわれ、厚層50cm前後。下部は本報告のⅡ・2層に対応するものと考えられる。 5トレンチ 地表面70～95cmで土層があらわれ、B層を切り込む自然流路3・溝1を確認。 6トレンチ 地表面130cmで土層を確認。厚層12～17cmで、粘性が高く、トレンチ北端では砂礫が多く混じる。 7トレンチ 本報告の15頁を参照。 8トレンチ 本報告の文庫18区A区の新断面。	調査報告文Ⅳ
99701	16次	本稿	1384	A区	調査報告文Ⅳ
99702	16次	本稿	627	B区	調査報告文Ⅳ
99700		立命	12.2	3トレンチ 地表面110cmで、厚825cmの厚層部分を部分的に確認。 4トレンチ 地表面130cmで、厚層部分を確認。B層上部で壱次式住居跡が部分的に出土。 5トレンチ 地表面130cmまで掘削を受け、1次調査範囲内。 6トレンチ 地表面130cmまで掘削を受け、1次調査範囲内。 7トレンチ 地表面100cmで、土層があらわれ、古墳後期の2基の壱次式住居跡の遺構を確認。 8トレンチ 地表面45cmで、土層があらわれ、発生前後第一の土層が確認。 9トレンチ 地表面80cmで土層を確認。 10トレンチ 地表面72～90cmまで、厚層55cm前後の厚層が確認。その裏下からは土層があらわれた。 11トレンチ 壱次式住居跡2+0、土層4・溝2・自然流路1などを確認。 12トレンチ 壱次式住居跡10、土層3・溝1などを確認。 13トレンチ 壱次式住居跡6、土層1・自然流路1などを確認。	調査報告文Ⅳ
99715	17次	確認	154	1トレンチ 壱次式住居跡2+0、土層4・溝2・自然流路1などを確認。 2トレンチ 壱次式住居跡10、土層3・溝1などを確認。 3トレンチ 壱次式住居跡6、土層1・自然流路1などを確認。	調査報告文Ⅳ
99717		確認別表		歴史文化財調査室「連絡のないまま工事に着手。遺構の一部を確認。地表面55cmで土層を確認。	調査報告文Ⅳ
99801		立命	1	1トレンチ 地表面120cmで、厚層上部を確認。 2トレンチ 地表面70cmまで土層がつつく。	調査報告文Ⅳ
99802	18次	本稿	1192	本報告を参照。	本報告書
99805		立命	3	建設の敷留路上で、地表面100cmまで掘削された1層がつつく。	調査報告文Ⅳ
99901	19次 Ⅰ区	本稿	31	1トレンチ 地表面70cmで、厚817cmの厚層を確認。遺物は出土していない。 2トレンチ 地表面45cmで、自然流路を確認。 3トレンチ 地表面75cmで土層を確認。厚層30cmで、粘性が高い。 4トレンチ 地表面80cmで土層を確認。厚層10cmで、粘りがある。 5トレンチ 地表面140cmまで土層が露き、産物層があらわれる。 7トレンチ 遺跡調査区から45cmで土層を確認。厚層は40cmで、砂礫や小石が多く混じる。 9トレンチ 地表面45cmで土層を確認。砂礫や小石が多く混じる。発生前後第一～後期の遺物が出土。 10トレンチ 地表面70cmで土層を確認。砂礫や小石が多く混じる。発生前後第一～後期の遺物が出土。 11トレンチ 地表面55cmで土層を確認。土層は発生前後第一～後期の壱次式住居跡1が出土。 12トレンチ 地表面70cmで、1層直下で土層があらわれ、土層は崩壊しているものと考えられる。 13トレンチ 地表面90cmで、1層直下で土層があらわれ、土層は崩壊しているものと考えられる。 14トレンチ 地表面40cmで土層を確認。発生前後第一～後期の壱次式住居跡7・土溝9・溝3などが出土。 4トレンチ 地表面58cmで土層を確認。厚層22cm、最下層の土層は反白色の砂礫層が露く確認。 5トレンチ 地表面50cmまで土層が露き、B層の直下で土層があらわれる。 6トレンチ 地表面65cmで土層があらわれ、その上面で断面台形の溝を確認。灰青色や赤褐色の砂礫土が混じる埋土で、古代～中世の溝と考えられる。 7トレンチ 地表面100cmまで掘り下げたが、掘削が続く。 8トレンチ 地表面100cmで、B層の直下で土層があらわれる。 9トレンチ 地表面40cmで土層を確認。厚層30cmで、下層で発生前後第一の土層と土穴が出土。 10トレンチ 地表面70cmで土層を確認。厚層30～40cmで、下層で発生前後第一の土層もしくは壱次式住居跡と考えられる落ち込みが出土。 11トレンチ 地表面80cmで土層を確認。B層には本表並じらない厚層の小塊があらわれるので、遺構の埋土と判断。発土器もしくは土動器と考えられる土器片が出土。 12トレンチ 地表面120cmまで掘り下げたが、掘削が続く。 13トレンチ 地表面80cmで、1層の直下で土層があらわれ、B層からは縄文中期前半と考えられる土層が出土。 14トレンチ 地表面90～170cmまで土層が露く、B層の直下で自然流路A区で出土した古代～中世の水田層に対応するものと考えられる。 15トレンチ 地表面140cmで土層を確認できたが、二次堆積の可能性が考えられる。下位のB層からは縄文土層と考えられる土器片が出土。 16トレンチ 地表面150cmで土層を確認できたが、二次堆積の可能性が考えられる。 17トレンチ 地表面145cmの厚層直下で土層があらわれ、B層上部で自然流路もしくは溝と考えられる落ち込みを確認。	調査報告文Ⅳ
99900		立命	8.4	地表面40～50cmで土層を確認。厚層は10～15cmの厚さを誇る。B層上部で壱次式住居跡1・土溝2・土穴などを平面検出。	調査報告文Ⅳ
99900		立命	8	1トレンチ 調査前に地表面80cmまで掘削。 2トレンチ 調査前に地表面80cmまで掘削。 3トレンチ 調査前に地表面80cmまで掘削されていたが、1層内にある。 4トレンチ 調査前に地表面80cmまで掘削。	調査報告文Ⅳ
99910	20次	本稿	500	発生前後第一～後期中頃の壱次式住居跡1・古墳後期の壱次式住居跡9・中世の溝群が出土。	調査報告文Ⅳ
99911		確認	9	4トレンチ 地表面70cmで土層を確認。厚層12～15cmで、粘性が高く、砂礫・小石が混じる。	調査報告文Ⅳ
99912		立命	0.5	地表面82cmで厚623cmの厚層を確認。裏層からは遺物は出土していない。	調査報告文Ⅳ

調査 番号	調査 次数	調査 種別	階 数 (m)	調 査 報 告	文 献	
99915		立倉	1	建物残りの埋戻し部分。	調査報告文	
00001	立倉	9	1トレンチ	地表面90cmまで攪乱された土層が見つづく。大学会館建物発掘区画内。	調査報告文 X	
			2トレンチ	地表面70cmで扉層を確認。厚さ15cm。		
			3トレンチ	地表面72cm前後で扉層を確認。上部は暗褐色砂質シルトであるが、下部は暗褐色の砂礫層となる。扉層の二次堆積か？		
00002	導坑	2.2	1トレンチ	地表面30cmまで調査したが、土層が見つづく。	調査報告文 X	
			2トレンチ	地表面50cmで扉層を確認。95cmまで土層が見つづく。		
			3トレンチ	地表面68cmで扉層を確認。104cmまで土層が見つづく。		
			4トレンチ	地表面10cmで扉層を確認。80-85cmまで土層が見つづく。直下に扉層があらわれる。		
			5トレンチ	地表面15cmで扉層を確認。95cmまで土層が見つづく。		
00005	22 次	確認	33	本層で報告する各状の遺物の北半部分にあたる。	調査報告文	
00006	立倉	1	1トレンチ	地表面25cmで扉層を確認。90cmまで土層が見つづく。	調査報告文	
			4トレンチ	地表面50cmで扉層を確認。95cmまで土層が見つづく。		
00007	立倉	5	1トレンチ	建物残りの部分にあたり、攪乱が続く。	調査報告文	
			2トレンチ	建物残りの部分にあたり、攪乱が続く。		
			3トレンチ	建物残りの部分にあたり、攪乱が続く。		
00101	導坑対応	3	埋蔵文化財調査に連絡がないまま、地表面70cmで掘削されていた。扉層内にあさまるものと推察。	調査報告文 X		
00103	23 次	本橋	17.3	1トレンチ	地表面70cmで、厚さ20cmの扉層を確認。扉層から発生土層片が出土。	調査報告文 X IV
				2トレンチ	地表面70cmで、厚さ60cmの扉層を確認。扉層から発生土層片が出土。	
				3トレンチ	地表面22cmで、自然流路上面を確認。	
				4トレンチ	地表面62cmで、土塊を確認。	
				5トレンチ	地表面100cmで、厚さ8cmの扉層を確認。扉層下面で小穴が出土。	
				6トレンチ	地表面70cmで、厚さ22cmの扉層を確認。扉層上面で土塊を確認。	
				7トレンチ	地表面75-80cmで扉層があらわれる。扉層上面で溝を確認。中核から発生と古溝の小穴が掘り込まれている。	
				8トレンチ	地表面100-105cmで、自然流路を確認。	
				9トレンチ	地表面82cmで扉層を確認。扉層下面で発生中期後葉の土層層片や柱穴を確認。	
				10トレンチ	地表面65cmで、厚さ22cmの扉層を確認。扉層から遺物は出土していない。	
				11トレンチ	地表面70cmで、厚さ20cmの扉層を確認。扉層下面で小穴が出土。	
				12トレンチ	地表面95cmまで攪乱が見つづく。	
00104	立倉	1	1トレンチ	地表面65cmまで攪乱が見つづく。	調査報告文 X I	
			2トレンチ	地表面60cmで、厚さ15cmの扉層を確認。		
			3トレンチ	地表面60cmまで土層が見つづく。		
00202	25 次	本橋	1022	本報告の文化遺跡18区画A区画の北端部分。扉層下層では古代-中世の水田跡。その下層には自然流路が出土。	調査報告文 X I	
00203	立倉			埋戻しの砂質シルトで、攪乱された土層が見つづく。	調査報告文 X I	
00204	26 次	本橋	144.7	1トレンチ	発土時代中期後葉-後期初葉の竪穴式住居跡1、竪柱柱跡1、土塊3などが出土。SK-27の原部からは炭化した根材が2枚出土。また、扉層中から銅製土製品が出土。	調査報告文 X I
				2トレンチ	発土時代の竪穴式住居跡1、土塊3、溝3などが出土。竪穴式住居跡からは腹を掘いたと考えられる総土器が出土。	
				3トレンチ	発土時代の土塊1などが出土。	
				4トレンチ	地表面80cmで扉層上面。120-125cmで扉層上面を確認。遺構・遺物は出土していない。	
				5トレンチ	発土時代の竪穴式住居跡1、土塊7、溝1などが出土。	
				6トレンチ	発土時代の土塊1などが出土。	
00205	立倉	3	地表面105cmで扉層を確認。扉層上面は砂礫が多く混じり、下部の砂質シルトへ漸移的に変化。	調査報告文 X I		
00206	導坑	0.5	地表面90cmで、褐色砂礫層を確認。115cmまで見つづく。	調査報告文 X I		
00211	立倉	1.9	1トレンチ	共同調査に伴う全面で破壊。	調査報告文 X I	
			2トレンチ	地表面40cmで扉層を確認。厚さ25cmで、砂礫が多く混じる。		
00301	27 次	本橋	703	近接の溝1、性格不明遺構3、中世の竪柱柱跡1、溝4、土塊2、発土時代中期後葉-後期の竪穴式住居跡6、竪柱柱跡1、溝1、土塊2、縄文時代の土塊1、性格不明遺構2などが出土。とくにSC-9からは分銅製土製品5、発土土製品1が出土。	調査報告文 X II	
00302	立倉	39	1トレンチ	地表面32cmで扉層が1層の直下にあられる。扉層上面で中世の遺物が出土。	調査報告文 X III	
			2トレンチ	地表面40cmまで調査したが、土層が見つづく。		
			3トレンチ	地表面40cmまで調査したが、土層が見つづく。		
00303	立倉	3.1	1トレンチ	地表面70cmまで調査したが、埋戻し部分が続く。	調査報告文 X III	
			2トレンチ	地表面60-65cmで扉層を確認。		
00305	立倉	12	1トレンチ	地表面70cmで扉層を確認。	調査報告文 X III	
			2トレンチ	地表面80cmで扉層を確認。		
			3トレンチ	地表面54cmで扉層を確認。扉層上面で竪穴式住居跡と考えられる落ち込みが出土。		
			4トレンチ	地表面95cmで扉層を確認。扉層は砂礫が多く混じる。		
			5トレンチ	地表面115cmでしまりのない砂礫層の上部に黄褐色シルト層があらわれる。		
			6トレンチ	地表面105cmで黄褐色粘質土層があらわれる。その下層には、しまりのない砂礫層の上部に黄褐色シルト層がみられる。		
			7トレンチ	地表面55cmで扉層を確認。		
00306	立倉	1.4	1トレンチ	地表面90cmで扉層を確認。厚さ18cm。下面から発生中期後葉の土層が出土。	調査報告文 X III	
			2トレンチ	地表面110cmで扉層を確認。厚さ22-40cm。発生中期後葉-後期の粘質土層を含む遺物が出土。		
			3トレンチ	埋戻しの黄褐色粘質土層部分にあたる。		
00307	立倉	2.6	埋戻しの黄褐色粘質土層部分にあたる。	調査報告文 X III		

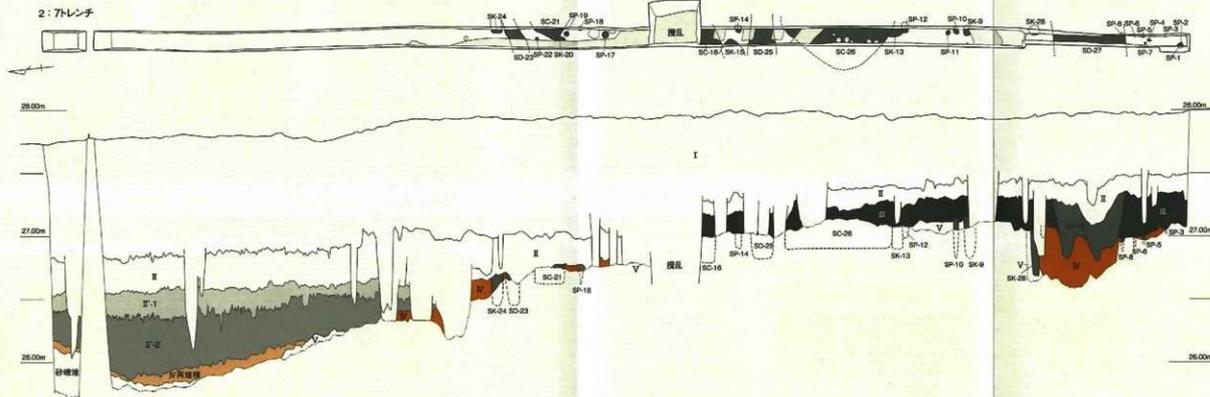
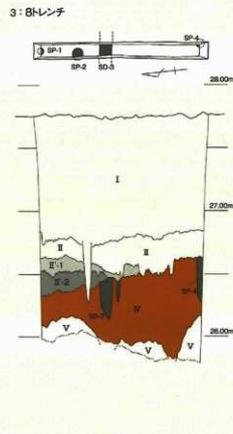
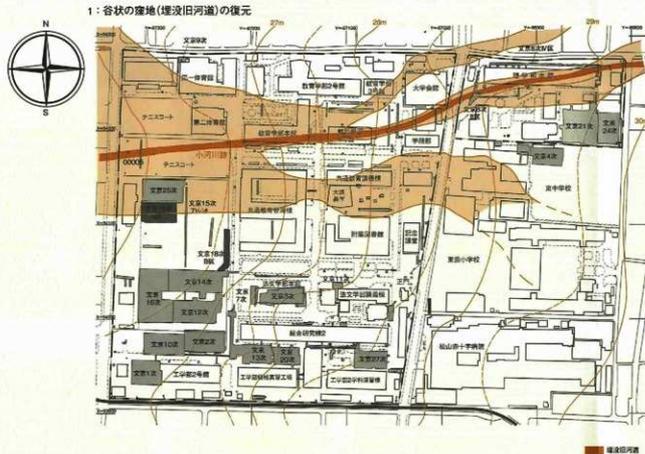


図8 旧地形の復元図(縮尺1/4,000)、文京遺跡15次調査7・8トレンチ実測図(縮尺1/300、1/30)

て集落が展開する。

これに対して、旧グラウンド中央部～北半部、そして北側のテニスコートや体育館が建てられているキャンパス北西部は、調査事例が少なく、遺跡の実態は把握できていなかった。そこで、1996年に15次調査、1997年に17次調査として、遺跡範囲確認調査を実施した。15次調査の7トレンチは、旧グラウンドの中央を南北にのびる散水管路を利用して設定され、南北90mを測る(図8)。7トレンチの南半部は、工学部本館(1994年度、12次調査)、1号館(1996年度、14次調査)、5号館(1997年度、16次調査)から続いて、堅穴式住居跡5棟、溝3条、土壌4基が確認された。また、翌年度の遺跡範囲確認調査である17次調査でも、弥生時代～古墳時代の遺構が重複し密集する状態で確認できた。旧グラウンドの中央部は、微高地がのび、弥生時代と古墳時代の遺構が密集する範囲が広がっていることを確認できた。調査にいたる経緯で述べたように、グリーンゾーンとして遺跡保存が図られている。

一方、7トレンチでも北半部では、基本層序のV層が急激に落ち込んで、谷状の地形をつくる。同じ谷状の地形は、西側の8トレンチや、東側の共通教育管理棟の北側中庭に設定された15次調査4トレンチでも確認されている。この谷状の地形を埋める堆積は、基本層序II層に対応するオリーブ褐色砂質シルト層で、そのほぼ中位で、薄い砂礫層を確認できた。砂礫層の下面とII層下部の層界は、小さな凹凸がある不整合面をなし、水路や畦畔と考えられる部分があり、洪水で堆積した砂礫層で水田層が覆われているものと判断した。そこで、調査時にはII層中位の砂礫層をII'-1層、

以下の水田層をII'-2層とした。また、砂礫層から土師器や須恵器の坏もしくは高坏の細片が出土したので、II'-2層は古墳時代後期～中世の水田層と考えた。II'-1層は今回の調査ではII-2-①層、II'-2層はII-2-②～⑥層として分層して調査を行った土層である。また、15次調査8トレンチでも、IV層の谷状の地形への落ち込み跡が確認され、同様のII'層の堆積を観察できた。

以上の調査成果から、旧グラウンド北半部には、谷状の窪地が東西にのび、古墳時代～中世の水田が営まれていることが予想された。また、9次調査地点が位置する城北キャンパス北西端付近では、基本層序IV層が再び高くなっていることから、この谷状の窪地は、南北幅120～140mと考えられる。さらに、キャンパス北東部の理学部構内で実施された8次調査II区で確認された自然流路、あるいは学生会館北側でもIV層の落ち込みが確認されている。こうした幅の狭い流路や谷状の窪地が、旧グラウンド北半部～テニスコート付近で合流しているものと考えた。

こうした既往の調査成果から、今回の18次調査で発掘調査の対象となった総合情報処理センター(現総合情報メディアセンター南棟)建物本体部分(A区)は、旧グラウンド北半部の微高地から谷状の窪地への変換点付近に位置し、古墳時代～中世の水田が営まれていることが予想された。また、共同溝部分のB区は、旧グラウンド中央部の東端にあたり、14次調査地点(工学部1号館)に隣接するので、弥生時代～古墳時代の遺構が営まれている可能性が高いと考え発掘調査にあたった。

II 調査の概要

1 層序の概要

現在、文京遺跡が所在する城北団地では、既往の調査成果から遺跡全体にわたる基本層序を、上位からI～V層に区分している。発掘調査にあたっては、個々の調査地点ごとに、基本層序を構成する土層群の細かな特徴や構成を記録している。

基本層序は、以下の通りである。

I層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。

II層：灰色系の砂礫混じりのシルト層からなる水田層

III層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。

IV層：縄文時代前期～後期中頃の遺構と遺物を包含する黄褐色系のシルトおよび砂質シルト層。

V層：IV層下の花崗岩の円礫・亜円礫を主体とする砂礫層ないしは礫層、砂層から構成される。

18次調査A区とB区の土層断面の概念図を作成してみた(図9)。B区中央部でV層が盛り上がり、その南側にあたるB区南端ではV層の直上にIII層がみられ、IV層は分布していない。V層の盛り上がりの北側であるB区北端付近でIV層があらわれ、これがA区南半で急激に落ち込む。この落ち込みは、前述した城北キャンパス北半部の東西にのびる谷状の窪地にあたる(図版1-2・3)。

この谷状の窪地には、自然流路SR-400が流れる。SR-400の埋積した窪地状の地形を中心としてII層が分布する。このII層は水田層で、17次調査8トレンチのII層中位の砂礫層を鍵層として、II-1・2層に分層できる。前述したように、17次調査8トレンチのII層は今次調査のII-1層、中位の砂礫層であるII-1層はII-2-①層、II-2層はII-2-②～⑥層と対応する。

(1) A区の層序

A区は、城北団地南部の弥生時代～古墳時代の集落遺跡が営まれる微高地が団地北部の東西にのびる谷状の窪地へ落ち込む自然地形の変換点付近に位置する。窪地は、基本層序のIV層を切り込む自然流路(SR-400)

で形成され、その上位をII層が覆う。

II層上部のII-1層では、凹凸のある耕作下底面が上下に連続して認められる。数枚の水田層が連続して営まれている。出土遺物から、近世から城北団地が造成される直前にわたる水田層と判断した。

II-2層は、II-1層と比べて硬めの土質で、土色もやや暗い。II-2-①～II-2-⑥層に分層でき、II-2-②・④・⑥層は水田層、II-2-①・③・⑤層は緩やかな泥蓋で形成された砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。調査時には、II-2-②層を上層水田、II-2-④層を中層水田、II-2-⑥層を下層水田と呼称した。

II-2-①層は、オリブ褐色砂質シルトで、非常に多くの砂礫が混じり、部分的に細砂が薄いレンズ状ブロックとなって堆積している。

II-2-②(上層水田)層は、径1mm前後の砂礫が混じるオリブ褐色砂質シルトで、調査区のはほぼ全域に広がる。上部に堆積したII-2-①層と比べて、砂礫が少なく、粘性が強く、土壌化が進んでいる。

II-2-③層は、黄褐色砂質シルト、オリブ褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトから構成される砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。

II-2-④(中層水田)層は、褐色シルトないし暗灰黄色砂質土が混じる土層で、径1～2mm前後の砂礫が多く混じる。

II-2-⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土で構成される堆積土層である。

II-2-⑥(下層水田)層は、暗黄褐色砂質シルトないし黄灰色砂質土の土層で、径1mm前後の礫が混じる。上半は粘性が強く土壌化が進んでいる。

調査区北半部では、II-2層の下層には自然流路(SR-400)を埋積する土層がみられる。最上層の砂礫混じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、拳～人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層に大別できる。

調査区の南半部では、II-2層直下でIV層があらわれる。基本層序のIII層にあたる土層は、II-2-②・

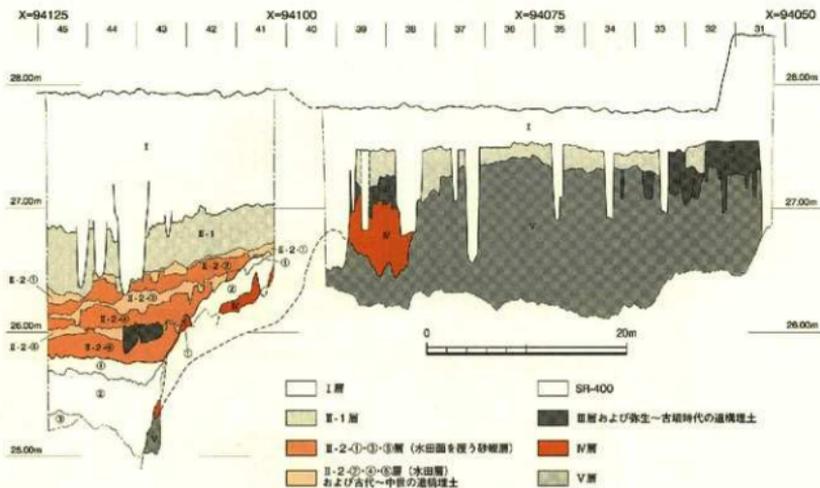


図9 文京遺跡18次調査の基本土層概念図(縮尺1/500, 1/40)

④層の水田耕作で削平されているものと考えられる。

基本層序IV層にあたる土層は、黄灰色の細砂混じりのシルト層で、南南部の微高地部分にしか分布していない。城北団地南南部に位置する12・14・16次調査地点のIV層でも下位にみられる堆積土層に対応する。A区北半部のIV層は、上半部を自然流路(SR-400)で削られているものと考えられる。

IV層の下層には灰色の粗砂層が堆積している。基本層序V層である。

(2) B区の層序

B区は、団地南部にひろがる微高地の北半にあたる地点に設定された調査区である。基本層序のI～V層

を確認できた。

造成土にあたるI層の下層には、灰色系の砂礫混じりのシルト層が堆積する。基本層序のII層で、A区のII-1層に対応する。

B区南端付近では、II層の下層に基本層序のIII層にあたる黒色～暗褐色系の土層が堆積する。弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含し、上面で掘り形ラインを検出できなかったが、炭化物や土器片を多く含んでいるので、遺構埋土である可能性が高い。

IV層は、黄褐色系のシルトおよび砂質シルト層で構成され、下部には礫が混じる。B区北端付近でV層上面に形成された窪地に部分的に堆積している。

V層にあたる土層は、花崗岩を主体とする砂礫あるいは礫層から構成され、B区全域に広がる。

2 遺構の概要

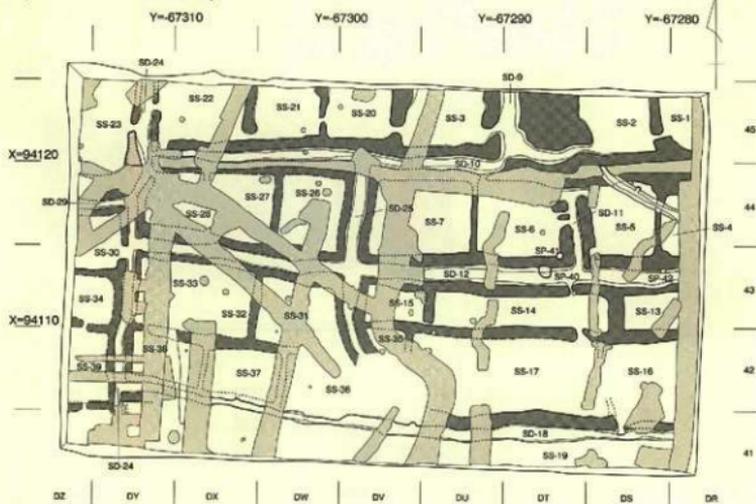
A区では、後述するように、第2次世界大戦中の重壕が縦横に掘り込まれていた。また、B区では、北端から南端まで幅約25mの攪乱溝が南北にのび、全域にわたって南北あるいは東西方向に網目状に幅約0.5mの攪乱溝が掘り込まれていた。運動場の排水溝およ

び水抜きのための暗渠の掘り形である。

(1) A区

A区で出土した遺構は、II-2層の水田層およびそ

【II-2-②(上層水田)層出土遺構】



【II-2-③(中層水田)層出土遺構】

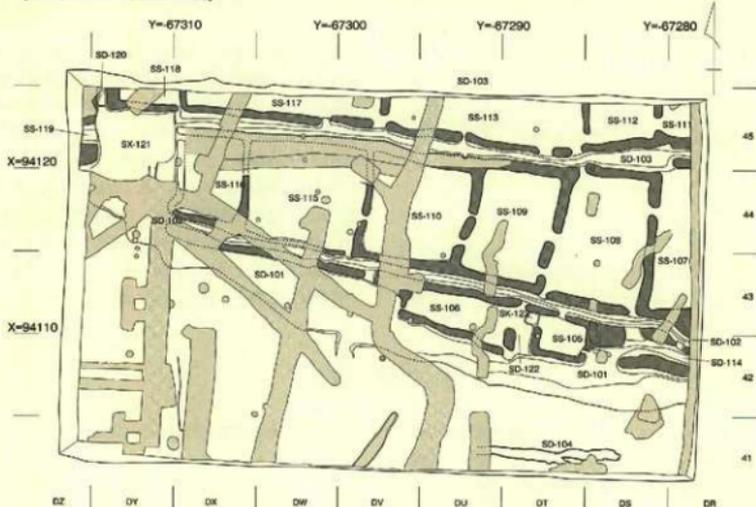


図10 文京遺跡18次調査A区の出土遺構配置図1(縮尺1/300)

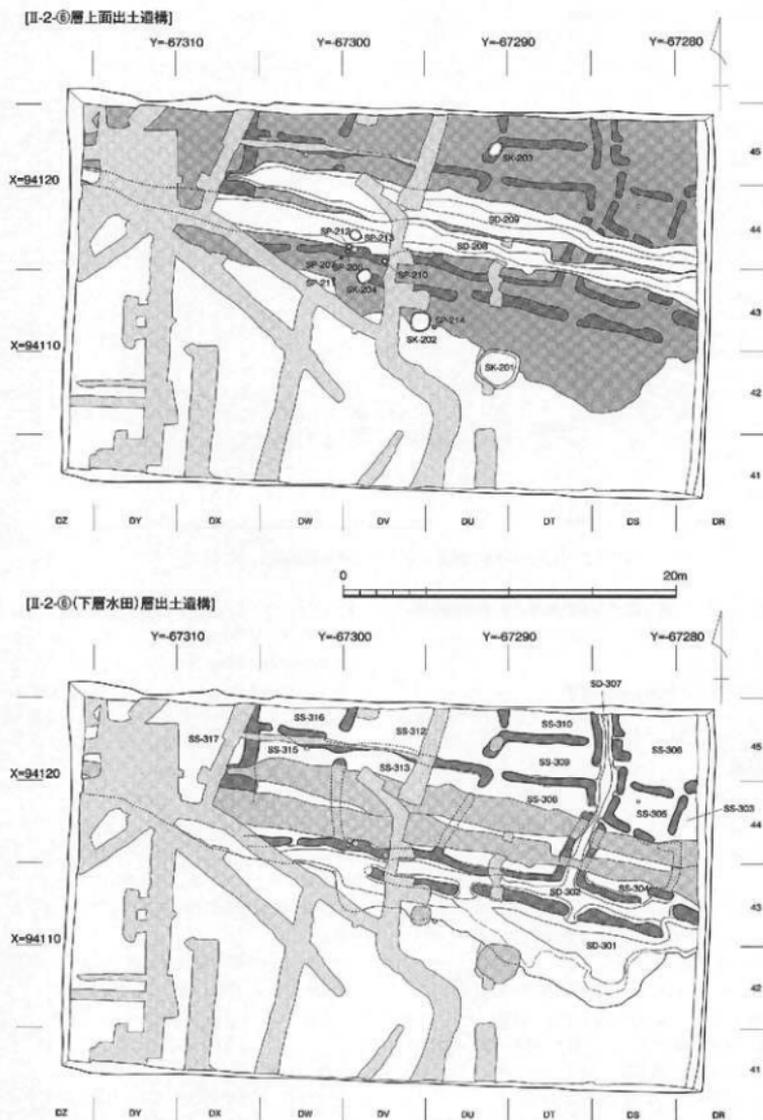


図11 文京遺跡18次調査A区の出土遺構配置図2(縮尺1/300)

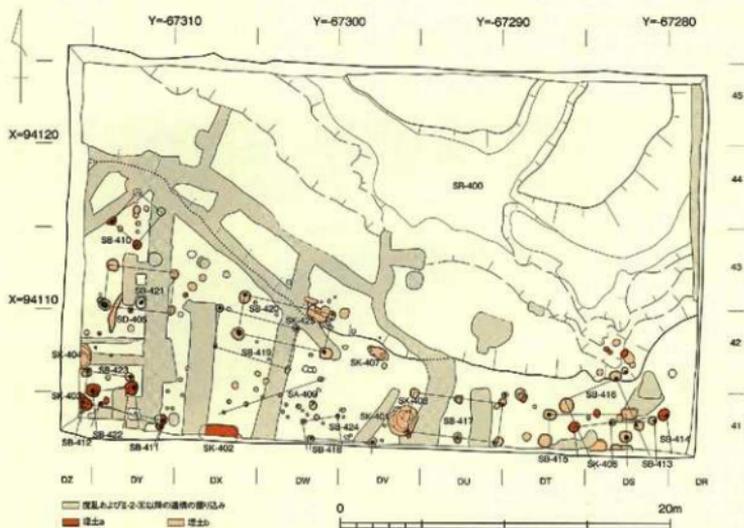


図12 文京遺跡18次調査A区の出土遺構配置図3 (縮尺1/300)

の下層の谷状の窪地を流れる自然流路と、南半部の微高地上の遺構に大別できる。

1) II-2層の水田層と自然流路

II-2層の水田層で、II-2-②(上層水田)層は調査区全域に広がるが、II-2-④⑥(中層・下層水田)層は調査区北半部の谷状の窪地に営まれている。

II-2-②(上層水田)層上面では、畦畔で区画された水田面が出土した(図10上段、図版3・4)。

水田: 32面 (SS-1~7・13~17・19~23・26~28・30~40)

溝: 9条 (SD-8~12・18・24・25・29)

その他、SP-40~42の3基の小穴が出土したが、II-2-②層に伴うものではない。

II-2-④(中層水田)層上面で検出した遺構は、

水田: 13面 (SS-105~113・115~118)

溝: 8条 (SD-101~104・114・119・120・122)

土壌: 1基 (SK-123)

その他の遺構: 1基 (SX-121)

である(図10下段、図版8・9)。また、調査区南西部のDV・DW-41・42区、DX~DZ-41~44区の微高

地上には、II-2-④層が部分的に残存し、犁による考えられる耕作痕跡を検出できた。II-2-④層に対応する層序の遺構と判断した。

II-2-⑤層を掘り下げてII-2-⑥(下層水田)層の上面で、II-2-⑥層を切り込む以下の遺構を検出した(図11上段、図版12・14)。

溝: 2条 (SD-208・209)

土壌: 4基 (SK-201~204)

小穴: 6基 (SP-205・207・210~214)

調査区東壁を再確認し、SD-208・209はII-2-⑤層上面から掘り込まれていることを確認できた。他の土壌・小穴も共通した特徴の埋土をもつので、同様と考えられる。

II-2-⑥(下層水田)層上面で出土した遺構は以下の通りである(図11下段、図版14・15)。

水田: 12面 (SS-303~306・308~312・314・316・317)

溝: 3条 (SD-301・302・307)

以上のII-2層出土の水田は、遺物の出土状況と種別から古代~中世のものである。

II-2層の下層にはSR-400の自然流路が埋没してい

た(図版17・18)。

最上層の砂礫泥じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、準一人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層に大別できる。出土遺物には弥生時代～古墳時代後期のものが含まれるが、古代の須恵器や土師器が少量混じる。古代前期に埋没したものとする。

2) 微高地上の遺構

A区調査区内でも南半部の微高地では、部分的に残るⅡ-2-④(中層水田)層で埋まる塚によると考えられる耕作痕跡が出土した。Ⅱ-2-④層の中層水田に伴う畝跡と考えた。

これを除去した後にⅣ層上面で以下の遺構を検出できた(図12、図版17・19)。

掘立柱建物: 15棟 (SB-410~424)

土壌: 8基 (SK-401~404・406~408・425)

溝: 1条 (SD-405)

楯列: 1条 (SA-409)

その他: 柱痕跡や杭痕跡が確認できた柱穴・杭穴を含む小穴

これらの遺構の埋土を観察すると、埋土a・b・cに大別できる。埋土aは黒褐色系の砂質シルト。埋土bは、黒褐色系の砂質シルトを主体とし、黄灰色・暗黄灰色砂質土・灰黄色等の砂質土や砂質シルトが若干混じる。埋土cは、黄灰色砂質土・黄灰色砂質シルト・暗黄灰色砂質土・暗黄灰色シルト・灰黄色砂質土などの灰色みをおびた堆積土を埋土の主体としたり、塊が混じったりする。埋土aの遺構は弥生時代～古墳時代、

埋土bの遺構は古代、埋土cの遺構は古代後半～中世の遺構である。以上の出土遺構の時代区分については表2を参照されたい。

(2) B区

B区では、Ⅳ層あるいはⅤ層上面で、弥生時代から近世の集落関連の遺構を検出した。遺構は、調査区の北端と南端に集中する。

出土した遺構は以下の通りである(図13、図版25-1)。

竪穴式住居跡: 13棟

(SC-605・606・670・689・729・730・738・741・747・748・750・751・752)

掘立柱建物: 5棟

(SB-740・743・744・746・749)

溝: 6条 (SD-601~604・610・627)

土壌: 18基

(SK-647・663・666・675・684・690・693・695・697・705・710・711・713・725・732・733・735・739)

土器溜り: 1基 (SX-669)

その他: 柱痕跡や杭痕跡が確認できた柱穴・杭穴を含む小穴

B区の遺構は、A区に対応させると、埋土a・cがある。埋土aの遺構は、弥生時代～古墳時代の遺構で、弥生時代の遺構は砂礫がほとんど混じらないが、古墳時代の遺構は砂礫が比較的多く混じるものが多い。埋土cは古代～近世の遺構である。時代ごとの出土遺構は表2を参照されたい。

表2 文京遺跡18次調査出土主要遺構一覧

遺構の種類	遺構番号	水田		溝	掘立柱建物	竪穴式住居跡	土壌	楯列	その他の遺構	自然発露	
		遺構番号	層								
A区	弥生時代	Ⅱ-2-①遺跡(上層水田)	32	SS-1~7・13~17・19~23・36~38・50~40	9	SD-9-12・18・24・25・29					
		Ⅱ-2-②遺跡(中層水田)	13	SS-105~113・115~118	8	SD-101~104・114・119・120・122	1	SK-123		1	SX-121(水田遺構)
		Ⅱ-2-③遺跡(畝跡)跡			2	SD-208・209	4	SK-201~204			
		Ⅱ-2-④遺跡(下層水田)	12	SS-303~306・309~312・314・318・317	3	SD-301・302・307					
B区	弥生時代	遺構の集積地								1	SB-400
		古代			10	SB-413・415~421・423・424	8	SK-401・404・406・407・408・425	1	SA-409	埋没耕作跡
		弥生時代			5	SB-410~412・414・422	2	SK-402・403			
B区	弥生時代	古代以降	4	SB-801・802・804・827	1	SB-743					
		古墳時代	2	SD-823・810	3	SB-740・744・746	6	SC-605・606・741・747・748	4	SK-647・662・663・667	
		弥生時代	1	SB-749	8	SC-670・689・729・730・738・750・751・752	15	SK-663・686・675・684・690・695・705・710・711・713・725・732・733・735・739	1	SX-669(土師器)	

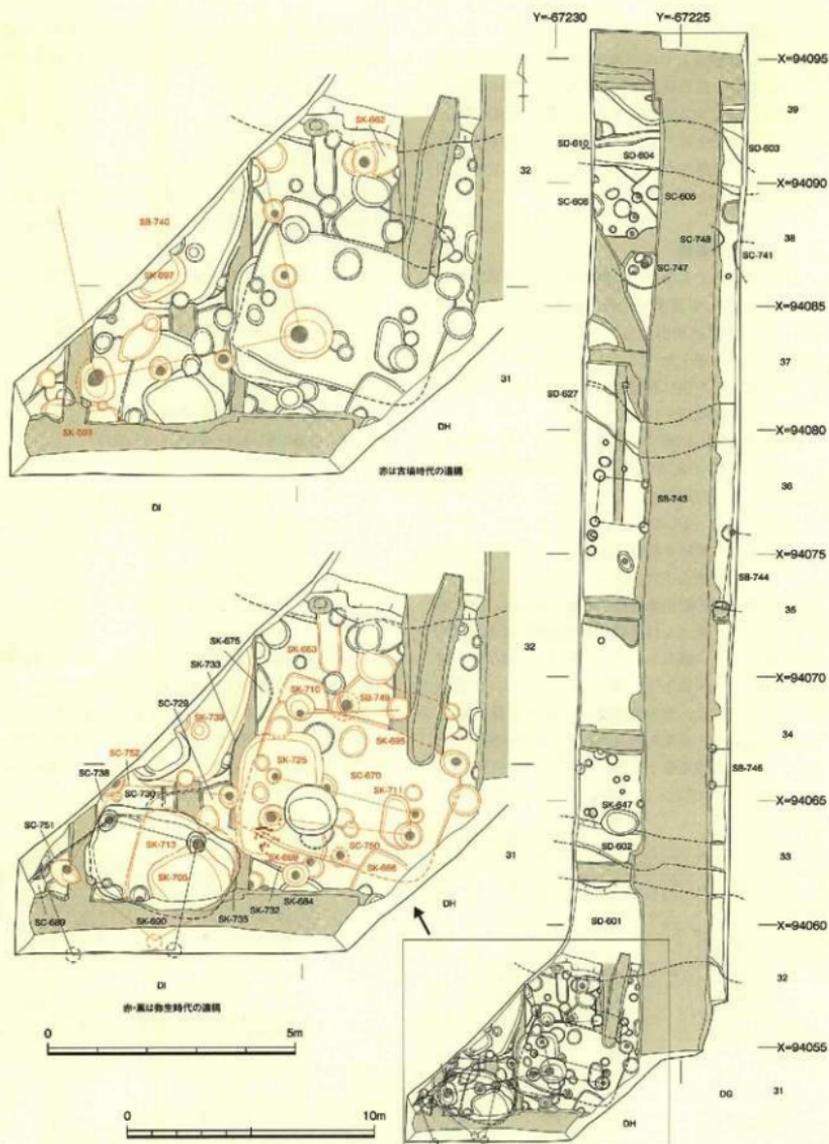


図13 文京遺跡18次調査B区の出土遺構配置図(縮尺1/100、1/200)

III A区の遺構・遺物の記録(その1)

- II-2層(水田層)と自然流路(SR-400)の調査 -

1 層序

表土の真砂土層を除去した後、A区南東隅で基本層序のII層を掘り下げ、地表下135cmで、15次調査7トレンチのII層を上下に分ける砂礫層に対応する堆積を確認した。基本層序で述べたように、この砂礫層より上位のII層をII-1層、砂礫層以下をII-2層とし、II-1層の最下面まで重機で掘り下げた。その時点で、縦横に掘り込まれている塹壕を確認できた。

塹壕からは、弥生時代~中世の遺物に混じり、青銅製の銃弾・薬莢、ベルト金具と考えられるものが出土している(図14-1~4)。1(図版40-⑧・⑨)は、青銅製の銃弾である。長さ31mm、先端は丸みをおび、基部で径7mm、先端部付近で径6mmを測る。重量は9.2g。基部には孔がみられるが、深さは不明。2・3(図版40-⑩~⑪)は青銅製の薬莢である。ともに、径10mmの短い円盤に薄い銅板を巻いてつくる。基部には、幅1mmの細い溝を刻み、基部底面には0.5mmの孔をあける。先端部は欠損する。2は、残存長5.05mm、先端部の径6.8mm、基部の径12mm、重量9.2gを測る。3は2片が接合し、残存長5.15mm、先端部の径7.3mm、基部の径12mm、残存重量7.8gを測る。4は、薄い鉄板の上に青銅板を重ね、青銅板の縁辺を折り曲げて接合する。ベルト金具の破片と考えた。残存重量1.2g。この他、撾乱からサヌカイト製の打製石鏃(図14-5、図版38-②)が出土している。平基式で、残存重量2.7gを測る。

調査では、塹壕を掘り上げるとともに、A区東崖沿いに深掘りトレンチを設定して、II-2層以下の土層の堆積状況を観察した。その結果、調査区南半部で基本層序のIV層が落ち込み、北半部に谷状の窪地が形成されていることを確認できた。その谷状の窪地の上部に堆積しているのがII-2層である。また、II-2層下層の谷状の窪地を埋める堆積土層は、自然流路SR-400の埋積過程で堆積した土層群である(図15)。

II-2層は、II-2-①~⑥層に分層できる。

個々の土層の特徴は以下の通りである。

II-2-①層は、オリーブ褐色砂質シルトで、非常に多くの砂礫が混じり、部分的に細砂が薄いレンズ状ブロックとなって堆積している。調査区中央部から北半部にかけての範囲に広がる。調査区北半部では、下部のII-2-②(上層水田)層が段差をもって深くなり、II-2-①層は急に厚くなる。

II-2-②(上層水田)層は、径1mm前後の砂礫が混じるオリーブ褐色砂質シルトで、A区のはほぼ全域に広がる。上部に堆積したII-2-①層と比べて、砂礫が少なく、粘性が強く、土壌化が進んでいる。薄い砂礫のレンズ状堆積もみられず、上半を中心として攪拌されているものと判断した。さらに、上面で水田区面の畦畔や溝を検出できたことから、水田層と判断した。

II-2-③層は、黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトから構成される砂礫

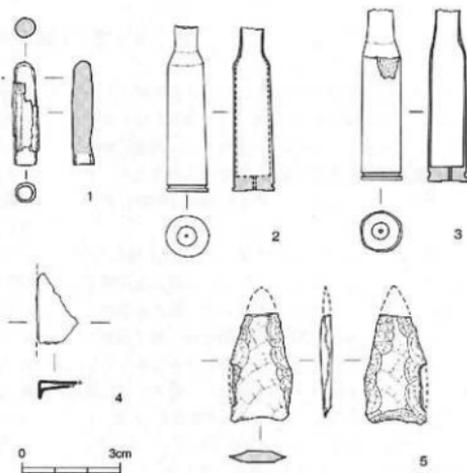


図14 塹壕出土遺物実測図(縮尺2/3)

が非常に多く混じる堆積土層である。調査区東半～中央ではDR～DV-42区以北、西半ではDW～DX-43区以北、DY～DZ-44区以北に分布する。部分的に細砂・粗砂・小礫のラミナを確認できる。

II-2-④(中層水田)層は、褐色シルトないし暗灰黄色砂質土が混じる土層で、径1～2mm前後の砂礫が多く混じる。DR～DV-42区以北、西半ではDW～DX-43区以北、DY～DZ-44区以北の調査区北東のやや低くなった部分を中心として広がる。上半は粘性が強く土壌化が進むこと、上面で水田区画の畦畔や溝を検出できたことから、水田層と判断した。

II-2-⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土で構成される堆積土、上下のII-2-④層やII-2-⑥層と比べて、砂礫が非常に多く混じる点特徴である。DS・DT-42区にやや張り出しを持ちながら、調査区北半部を中心として広がる。II-2-③層と同じく、部分的に細砂・粗砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられ、河川氾濫に伴う比較的緩やかな増水によって堆積したものと判断した。

II-2-⑥層(下層水田)は、暗黄褐色砂質シルトないし灰黄色砂質土の土層で、径1mm前後の砂礫が混

じる。上半は粘性が強く土壌化が進んでいる。調査区北東の低くほぼ平坦な部分を中心として広がる。上部に堆積する砂礫が多く混じるII-2-⑤層とは比較的容易に区分できた。上半部は粘性が強く、土壌化も進んでいること、上面で水田区画の畦畔や溝を検出できたことから、水田層と判断した。

II-2層の下層には、調査区北半部では自然流路(SR-400)を埋積する土層がみられ、南半部ではII-2層直下でIV層があらわれる。基本層序III層にあたる土層は、II-2-②・④層の水田耕作で削平されているものと考えられる。

このように、II-2-②・④・⑥層は水田層、II-2-①・③・⑤層は緩やかな氾濫で形成された砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。

II-2層の下部には、谷状の窪地を埋積する土層群がみられる。最上層の砂礫混じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、準～人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層に大別できる。これらの土層群は、谷状の窪地を流れるSR-400が埋没していく過程で堆積したものである。①～③層の堆積過程を示す細分層については、SR-400の項で報告する。

2 II-2-①層と出土遺物

II-2-①層は調査区東壁沿いに設けた深掘りトレンチ断面では南端部までみられるが、深掘りトレンチから西へ数m離れると確認できなくなる。調査区中央部から北半部にかけての範囲に広がるものである。下部のII-2-②(上層水田)層との層界は明確に区分できる。

調査区北半部では、下部のII-2-②(上層水田)層が段差をもって深くなり、II-2-①層は急に厚くなる。そのため、最初にII-2-①層の精査を始めた調査区東半部では、上部のII-1層を掘り残し結果となった。また、DS-41・42区では攪乱部を見逃してしまった。そのため、II-2-①層として取り上げた遺物には近世以降の遺物が含まれる。下層のII-2-②(上層水田)層の時期比定の問題とかかわってくるので、遺物整理の段階で出土地点の確認を進めた。

これらのII-2-①層として取り上げた近世以降の

遺物には、DS-45区出土の砥部焼染め付け4点(写真図版33-①-2・3)、調査区北東部出土の施軸陶器壺(図16-40)・砥部焼染め付け碗1点・白磁の口縁部破片1点、調査区南東部出土の砥部焼染め付け碗(写真図版33-①-1)がある。DR-DS-45区とDX-45区の段落ち部からは、白磁1点、近代の施軸陶器の胴部破片2点が出土している。また、II-2-②(上層水田)層の水田面を検出する際にも、DS-41・42区で施軸陶器蓋(図16-41)、DT-43区で砥部焼染め付け、DW-44区で近代陶器の胴部破片1点、SS-17やSS-22・30上面で近代の施軸陶器の胴部破片1点、砥部焼染め付け碗、白磁1点が出土している。以上の近世以降の遺物の出土地点は、調査区東半部のII-1層の掘り残し部分と、北半部のII-2-①・②層が落ち込む部分にあたり、本来はII-1層に伴う遺物と考えられる。

近世以降の遺物を除いて、II-2-①層から出土し

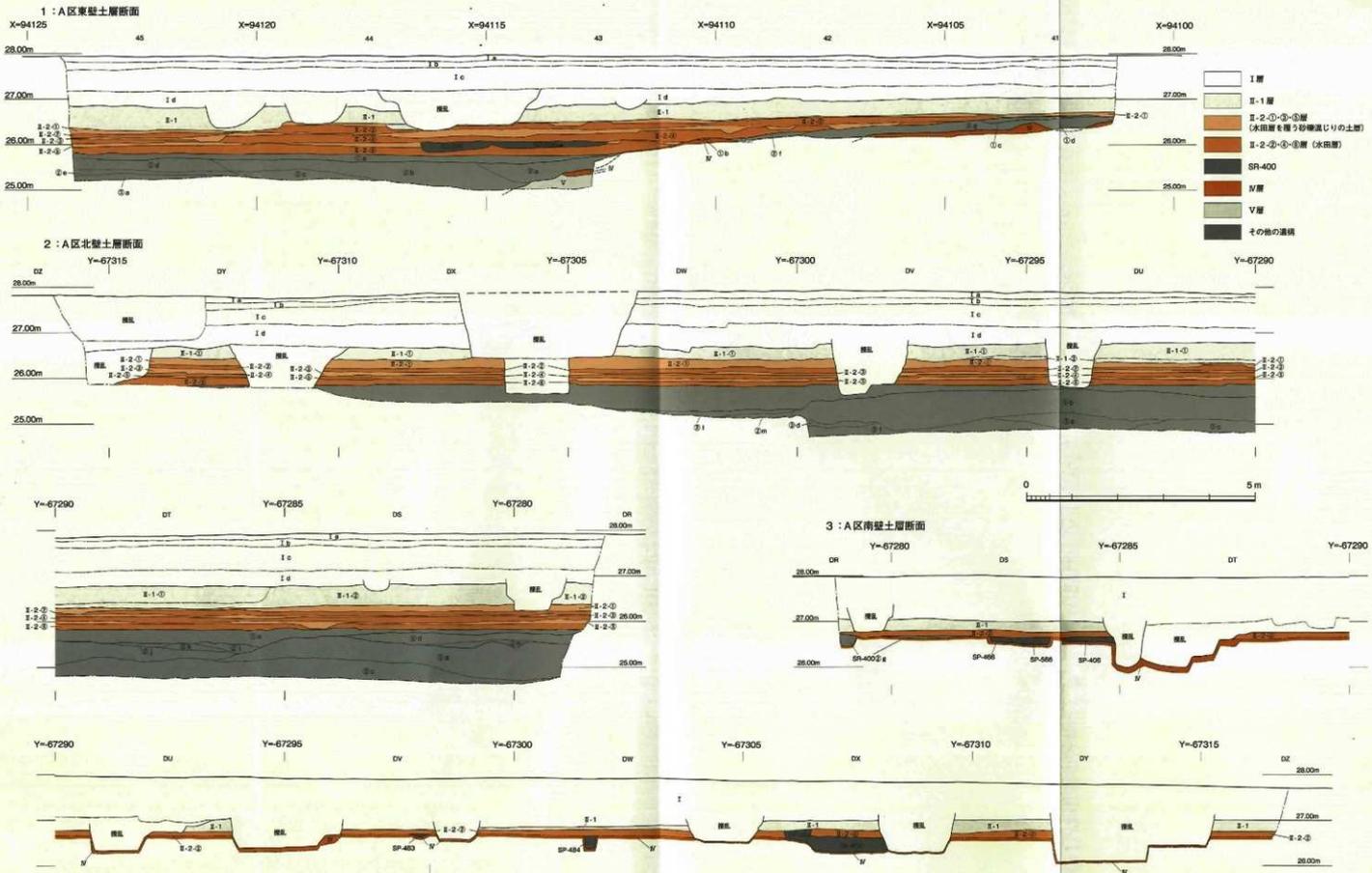


図15 A区土層断面図 (縮尺1/80)

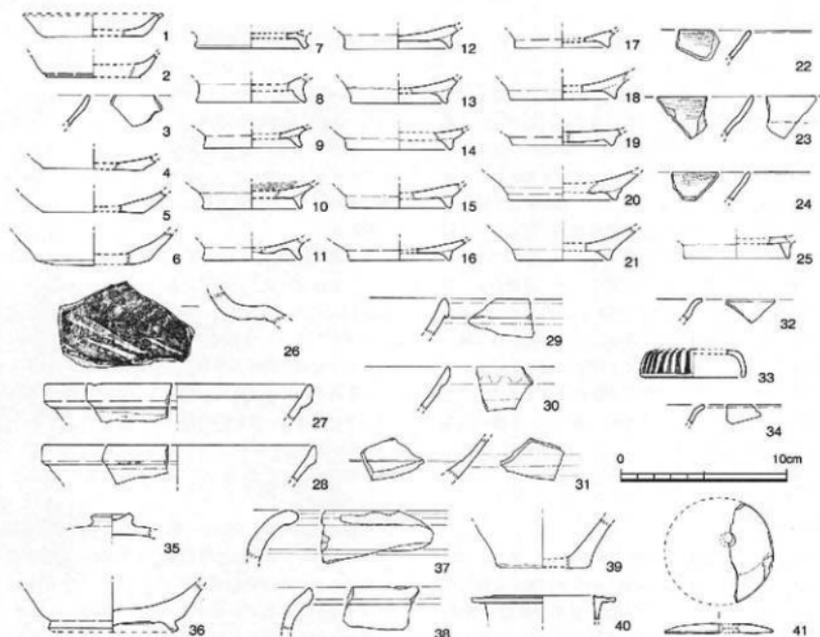


図16 A区Ⅱ-2-①層出土遺物実測図(縮尺1/3)

た遺物には、土師器(図16-1~21)・黒色土器(22~25)・須恵質土器(26)・白磁(27~32)・青白磁(33~34)の中世の遺物と、古墳時代後期~奈良時代の須恵器(35~38)、弥生土器(39)などがある。

土師器の中で、1・2は皿、3は埴もしくは埴の口縁部破片、4~6は埴の底部破片、7~21は高台付き埴の高台部破片である。1・2の皿の外底面には回転糸切り離し痕が残る。他は、外底面はナデ仕上げもしくは、器面の荒れが進み、切り離し方法は不明である。1・8・14・17は器壁の芯部に黒化層が残る、11は焼成不良のために内外ともに黒変部が残存する。また、接合しないが、11と同一個体と考えられる破片がDT-45区SD-8埋土からも出土している。もっとも多く出土している高台部破片をみると、高台部が長く外方に広がる7~11、先端がやや細くなり直立気味の12

~15、低い断面三角形の16~21に分類できる。

黒色土器の22~24は両黒土器の埴口縁部、25は内黒土器の高台部の破片。26は須恵質土器の壺の肩部破片で、内面に当て具痕と考えられる幅4mmの幅広の平行条線の圧痕が残る。27~30の白磁は玉縁口縁をもつ埴であるが、27~29は玉縁口縁が厚めで大きい。32は埴もしくは皿で、二次的な火熱を受けているためか、釉色がくすむ。33は合子の蓋、34は皿か。35は奈良時代の坏蓋の摘み部破片。36は高台部が外方に「ハ」字形に広がる。器壁の厚さから壺と考えた。39は弥生時代中期後葉の甕の平底破片である。

以上の図示した遺物の他、SS-35水田面直上のⅡ-2-①層から中国白磁碗の胴部破片が1点出土している。

3 II-2-②(上層水田)層の遺構と遺物

II-2-②(上層水田)層は、砂礫混じりのオリブ褐色砂質シルトで、A区のほぼ全域に広がる。上部に堆積したII-2-①層と比べて、砂礫が少なく、粘性が強く、土壌化が進んでいる。薄い砂礫のレンズ状堆積もみられず、上半を中心として攪拌されているものと判断した。下半にはやや砂礫が多く混じり、土質もしまり、上半と比べて土壌化も弱い。そこで、上半のシルトで構成される部分を耕作土層、砂礫が混じる下半部を床土層として調査を進めた。ただし、上半から下半へ変化は漸移的で、明確に分層することは難しかった。そこで、上半部をやや深めに掘り下げることとした。そのために、上半部の耕作土層で取り上げた遺物の一部には、本来は床土層にあたる下半部に含まれたものが含まれる。

(1) 遺構

II-2-②層上面では、畦畔で区画されたSS-1~7・13~17・19~23・26~28・30~40の水田面、これに伴うSD-8~12・18・24・25・29を検出できた(図17、図版3~5)。ただし、A区南半部のDR~DZ41・42区では、II-2-②層上半のシルト層(耕作土層)はみられず、下半の砂礫が多く混じるシルト層(床土層)が残存するのみであった。とは言っても、土質と土色がわずかに違う部分が帯状にのびるので、疑似畦畔と考え水田区画を推定した。また、A区北半部のDR~DZ44区周辺では、上部に堆積するII-2-①層を明確に区分できず掘り下げてしまい、一部II-2-②層上半を削り取ってしまったため、下半の疑似畦畔で水田区画を復元している。

1) 水田

出土した水田面は、北東に向かって緩やかに傾斜するが、東西に走るDR~DZ43区のSD-12と、DR~DZ44・45区のSD-10を境として15~25cmほどの段差が設けられている。水田を区画する基軸となる畦畔は、南北方向に走るSD-10・12・18の両側に設けられた畦畔で、南北方向にのびるSD-11・24・25の両側の畦畔を造り出し、さらに幅が40cm前後の畦畔で小区画の水田を造成している。基軸となる畦畔は、II-2-②層

下半の砂礫が混じるオリブ褐色砂質シルトを削り出しているが、水田を小区画に分ける幅40cm前後の畦畔は、砂礫が少なくシルト質が強いII-2-②層上半、つまり耕作土を盛り土したものである。以下、各水田面を単位として報告を行う。

SS-1

A区北東端のDR・DS45区に位置する。南北3.28m以上、東西2m以上の方形の水田面を検出した。水田面の標高は26.17~26.21mを測る。水田面には、上部に堆積したII-2-①層で埋まった凹凸がみられたが、耕起痕や足跡と確実に判断できるものはない。SS-1と西隣のSS-2を区画する畦畔は、幅60~78cm、高さ4cmほどである。南側の畦畔は幅2.6mと広く、II-2-②層下半を削り出している(図版7・3)。畦畔北半部を削り取ってしまったが、本来は22cmほどの段差を復元できる。

西側の畦畔には、SS-2へ配水するための水口が設けられている。水口部の埋土上半の①層は、砂礫が多く混じるオリブ褐色砂質シルトで、II-2-①層に対応する。下部の②層はオリブ褐色粘質シルトで、砂礫はほとんど混じらない(図18-1)。後述するSS-2とはほとんど標高差がないので、水配りの際でも、強い水流は考えられない。水口部埋土②層から、土師器壺の高台部破片(図21-25)と、獣骨片が出土している。

SS-2

A区北東端のDS・DT45区、SS-1の西側で出土した。水田面は調査区北側にのび、南北3.45m以上、3.5~4.2mの不整形を呈する。水田面の標高は26.17~26.21mを測る。水田面に残る凹凸は多い。3ヶ所で人間の足跡と考えられる窪みを確認できたが、歩行の方向性は認められない。

SS-2を区画する南側畦畔は、SS-1と同じく、幅2.6mと広く、II-2-②層下半を削り出している。西側では3.6~3.9m、高さ7cmほどの広がりを持つII-2-②層下半を検出し、西側を区画する畦畔を考えた。その南端を切って、SD-8が西に向かってのびる(図版7・3)。SS-2からの流出部の埋土を土層断面で観察した。上部の①層は暗灰黄色粘質土と黄褐色粘質シルトが混じりあう堆積土で、下部の②層は砂礫が非常に



图17 A区II-2-②(上层水田)层叠构配置图(总尺1/100)

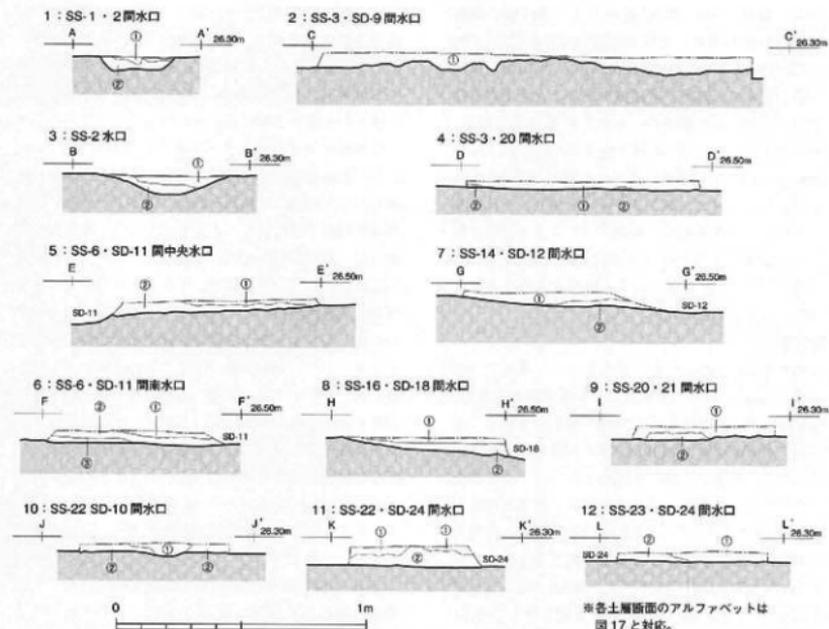


図18 A区Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴う水口部分の土層断面図(縮尺1/20)

多く混じる暗灰黄色砂質土である(図18-3)。②層の観察から、前述したSS-1・2間の水口埋土と比べて、旺盛な流水があったと考えられる。

SS-2耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)から、須恵器の口縁部片(図2231)などが出土している。

SS-3

A区北端中央よりのDU・DV45区で出土した。水田面は調査区北側にのび、南北3.45m以上、東西4.0～5.3mの不整形を呈する。水田面の標高は26.20～26.23mを測る。水田面には凹凸が多く残り、人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが判然としない。東側のSD-9とを区画する畦畔は、幅1.0～1.28m、高さ5cm前後。南側のSD-10とを区画する畦畔は、幅0.71～0.97m、高さ5～6cm。西側のSS-20とを区画する畦畔は、幅0.9～1.54m、高さ2～6cmを測る。これらの畦畔は、いずれもⅡ-2-②層下半を削り出している。

東西の畦畔を切って設けられた水口を検出した。配

水の方向を確認するために、水口を縦断する土層断面を観察した。SS-3・SD-9間の水口部は、SD-9溝底と比べて2～4cm高い。埋土は、暗灰黄色粘質シルトで、灰白色細砂のレンズ状ブロックがみられる。SD-9から取水するための水口と判断した(図18-2)。ただし、取水するための堰と考えられる杭痕跡は検出できなかった。SS-3・20間の水口部は、ほとんど高低差がない。埋土は、細砂混じりのオリープ褐色砂質シルトの①層を主体とし、下底面に貼りつくようにSS-20に向かって灰白色細砂のレンズ状ブロックの②層が堆積する(図18-4)。SS-3からSS-20への配水が考えられる。

SS-3・20間の畦畔部から、龍泉窯系青磁碗の破片(図2330)などが出土している。

SS-4

A区東端中央よりのDR・DS43・44区に位置する。水田面は調査区東側にのび、不整形の水田面と考え

られる。南北3.68m、東西1.08m以上、水田面の標高は26.40m前後を測る。北側の幅広の畦畔を境として、SS-1より20cmほど高い水田面である。水田面には凹凸が多く残るが、確実に耕起痕や足跡と判断できる窪みはない。SS-4北側のSS-1とを区画する畦畔は、幅2.6mと広く、Ⅱ-2-②層下半を削り出している。水田面から高さ3cmほどを測る。南側のSD-12とを区画する畦畔は、94cm、高さ3~4cmを測り、やはりⅡ-2-①層下半を削り出す。西側のSS-5とを区画する畦畔は、幅35~50cm、高さ2cm前後。畦畔本体はⅡ-2-②層上半と共通する土層で、耕作土を盛り上げて造られていると判断した。

SS-5

A区北東部のDS-43・44区で出土した。攪乱で一部を破壊されているが、水田面のほぼ全体を検出できた。南北4.5m、東西3.75mを測る方形の水田面である。水田面は、標高26.39~26.40mとほぼ平坦である。水田面には凹凸が残るが、他の水田面と比べて小さく少ない。北隣のSS-2とを区画する畦畔は、前述したように2.5m前後の幅広で、高さ2cmほどを測る。南側のSD-12とを区画する畦畔も幅90cm、高さ4cm前後。西側のSD-11とを区画する畦畔も80~90cm、高さ2~3cmを測る。いずれもⅡ-2-②層下半を削り出している。

西側畦畔の北端には水口が設けられる。埋土は上部に堆積するⅡ-2-①層と共通して砂礫が多く混じる。水口底面がわずかに窪み、SS-5水田面と比べてSD-11溝底が低いことから、排水のための水口と考えた。この畦畔の南端は、実測図では窪みように表示されているが、これは上層の攪乱部によって破壊された部分である。

耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)から白磁破片(図22-23)、SD-12とを区画する畦畔部から土師器塊の高台部の破片(図23-21)などが出土している。

SS-6

A区北東部のDT・DU-43・44区に位置する。北側が攪乱で破壊されているが、方形の水田面と考えられる。東西5mを測り、南北は4.2mほどと推定される。水田面の標高は26.42m前後で、東側のSS-5と比べてわずかに高い。水田面には凹凸が多く残る。北西部で人間の足跡の可能性を持つ窪みがいくつかあるが、全体に小さな窪み状のものが多い。北側のSD-10とを区画する畦畔は、攪乱で破壊され、詳細は不明。西側のSD-11とを区画する畦畔は、幅72~88cm、高さ2~

4cm。南側のSD-12とを区画する畦畔は幅85~92cm、高さ3cm前後を測る。ともにⅡ-2-②層下半を削り出している。これらに対して、東隣のSS-7とを区画する畦畔は、幅33~39cm、高さ2cm以下で、Ⅱ-2-②層上半を盛り上げて造られている。

東側畦畔北端には3ヶ所の水口が設けられていた。北側の水口は幅72cm、畦畔上面からの深さ5cm前後を測る。中央の水口は幅23~26cm、深さ3~4cm。配水状況を把握するために、水口を縦断する土層断面を観察した。上部のSD-11側には細砂・小礫が多く混じる灰色粘質シルトである①層、下部には灰色粘質シルトである②層が堆積する(図18-5)。南側の水口は幅33~47cm、深さ4~5cmを測る。埋土は灰色粘質シルトを主体として、SD-11側から最上層の砂礫が多く混じる①層、砂礫が少ない②層、砂礫をほとんど含まない③層が堆積する(図18-6)。SD-11とは4cmほどの緩やかな段差があり、堰などを想定して精査したが、杭痕などは確認できなかった。しかし、水口埋土の観察から、SD-11からSS-6への給水が考えられる。なお、これら3ヶ所の水口が同時に機能していたかは不明である。

SS-6・SD-10間とSS-6・SD-12間の畦畔から、土師器塊の高台部の破片(図23-16・17)などが出土している。

SS-7

A区北部中央よりのDU・DV-43・44区で出土した。北辺部は攪乱で破壊されている。東西5.8~6.2m、南北は4.3m前後と考えられ、やや台形に近い水田面と推定される。水田面の標高は26.39~26.42mで、東隣のSS-6とほぼ同じである。水田面には凹凸が多く残り、人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが判然としない。東隣のSS-6とを区画する畦畔は、前述したように幅33~39cmのⅡ-2-②層上半を盛り上げて造られている。南側のSD-12とを区画する畦畔は、幅83~95cm、高さ2cm前後を測る。西側のSD-25とを区画する畦畔は、平面検出に失敗して高まりを確認できていない。ただし、床土にあたるⅡ-2-②層下半の広がりから幅50cm前後の畦畔を復元できる。

SS-7の耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)から須恵質土師の壺底部片(図22-29)、SS-7・SD-12間畦畔から土師器塊の高台部破片(図23-22)などが出土している。

SS-13

A区東端の中央DR・DS-42・43区で出土した長方

形の水田面である。東側は調査区外にのびる。南北2.1~2.24mを測る。水田面は標高26.43~26.47mで、北側のSS-4・5と比べて数cm高い。水田面には凹凸が多いが、他の水田面と比べて凹凸は小さく少ない。北側のSD-12とを区画する畦畔は、58~77cm、高さ2~4cm。南隣のSS-16とを区画する畦畔は、62~88cm、高さ4~6cm。西隣のSS-14とを区画する畦畔は、幅95~97cm、高さ2cm前後を測る。いずれもII-2-②層下半を削り出している。

耕作土層(II-2-②層上半)から土師器杯の底部破片(図22-4)などが出土している。

SS-14

A区中央の東よりのDS~DU43区で出土した東西に細長い長方形の水田面である。南北1.75~2.18m、東西10.5mを測る。水田面の標高は26.41~26.46mで、ごくわずかに北西側に低くなっていく。水田面の標高差が5cm以内におさまることから1枚の水田面と考えたが、西隣のSS-15と比べて広く、西半部で水田面の傾斜が若干変化するので、中央のDT43区西半に、耕作土(II-2-②層上半)を盛り上げた畦畔を想定することも可能である。しかし、調査時には確定できなかった。水田面には凹凸が多く残されているが、耕起痕や足跡と判断できるものは見あたらず、しかも小さな窪みが多い。東隣のSS-13とを区画する畦畔は、前述したようにII-2-②層下半を削り出した幅95~97cmで、高さ2~4cm前後を測る。北側のSD-12とを区画する畦畔は、幅75~86cm、高さ1~2cm。南隣のSS-17とを区画する畦畔は、幅56~80cm、高さ1~2cmを測るが、畦畔南側のSS-17とは、検出時に上面を削りすぎて、高まりをほとんど検出できていない。西隣のSS-15とを区画する畦畔は、幅62~67cm、高さ1cm前後。これらの畦畔もII-2-②層下半を削り出している。

SS-14を区画する畦畔では3ヶ所で水口を確認できた。北東部のSD-12とをつなぐ水口(図18-7)は、幅20cm、深さ5cm前後で、上半にII-2-①層と考えられる砂礫が非常に多く混じる灰褐色~オリーブ褐色の砂質シルトである①層、下面にSD-12に向かってレンズ状に細砂が堆積する灰褐色砂質シルトの②層を観察できた。SD-12への排水を目的とした水口である。SS-17とを区画する畦畔の東端近くに設けられた水口は、幅40cm前後、畦畔検出面からの深さ4cmほど。西隣のSS-15とを区画する畦畔に設けられた水口は、幅

15cm、深さ4cmを測る。ともに、II-2-①層と考えられる砂礫が非常に多く混じるシルトで埋まっている。埋土の状況と水田面の標高差から、SS-17からSS-14、そしてSS-15への配水が考えられる。

耕作土層(II-2-②層上半)から土師器碗の高台部破片(図22-14・16)、SS-14・17間畦畔部から土師器杯の底部破片(図23-1・3)、土師器碗の高台部破片(図23-8~10)、SS-14・SD-12間畦畔から白磁碗の破片(図23-28)、SD-12とをつなぐ水口埋土から須恵器壺の底部破片(図21-13)などが出土している。13は九底で、胴部との境に細い沈線を1条巡らす。

SS-15

A区のはほぼ中央のDU・DV43区で出土した長方形の水田面である。南北1.8~1.85m、東西3.53~3.56mを測る。水田面の標高は26.43~26.49mで、ごくわずかに北側に向かって低くなる。水田面の南東部に凹凸が集中するが、耕起痕や足跡と判断できるものは見あたらぬ。北側・東側・南側を区画する畦畔は、いずれも幅50cm前後、高さ1~2cmを測り、II-2-②層下半を削り出している。西隣のSD-25とを区画する畦畔は検出に失敗したが、帯状にII-2-②層下半がのびることから、幅45~65cmの畦畔を復元した。

耕作土層(II-2-②層上半)から須恵器杯身の破片(図22-30)、SS-15・SD-12間畦畔部から土師器碗の高台部破片(図23-20)などが出土している。

SS-16

A区の南東部のDR・DS41・42区に位置する水田面である。北辺で耕作土層にあたるII-2-②層上半がわずかに残るが、他は削平され、床土層にあたる下半を検出したのみである。検出面は標高26.51~26.62mで、北に向かって低くなり、多くの凹凸を検出した。北隣のSD-13と南側のSD-18とを区画する畦畔としてII-2-②層下半の高まりを確認できたが、1cm以下しかなく、判然としない。西側を区画する畦畔は検出できなかった。しかし、残されたII-2-②層上半の上面の傾斜から、DS42区の掘削部周辺に南北方向の畦畔を想定しておきたい。

北側のSD-18とを区画する畦畔に水口が設けられている。幅42~60cmで、SD-18に向かって次第に深くなる。縦断面の埋土堆積を観察すると、上層にはII-2-①層に対応する砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトがたまり、下底面にはSD-18から流れ込むように暗灰黄色砂質シルトと細砂の互層堆積する②層がみられ

る(図18-8)。SD-18からSS-16へ給水するための水口と考えられる。

SS-16では、床土層にあたるⅡ-2-②層下半から土師器塊の高台部破片(図24-2・5)などが出土している。

SS-17

A区南東部のDS~DV-41・42区に位置する水田面である。SS-16と同様に、北辺に耕作土層にあたるⅡ-2-②層上半がわずかに残るが、ほとんど削平され、床土層にあたる下半を検出したのみである。検出面は標高26.45~26.58mで、DT・DU-42北半に向かって緩やかに低くなる。検出面では多くの凹凸を検出したが、確実に耕起痕や足跡と判断できる窪みはない。前述したように東側のSS-16とを区画する畦畔は不明であるが、北側のSS-14、南側のSD-18とを区画する南北の畦畔痕跡を確認できた。北側の畦畔は幅55~75cm、南側は幅80~109と推定される。また、西側の畦畔は、DV-42区北東部で南側に向かってのびる幅45cmの畦畔痕跡を検出できた。しかし、DV-42区南半部では確認できなかった。以上の畦畔痕跡から、南北4.3~4.7m、東西11m前後の水田面を復元した。ただし、他の水田面と比べて面積が広いので、さらに小さく区画されている可能性が高い。

わずかに残る耕作土層(Ⅱ-2-③層上半)~床土層(Ⅱ-2-②層下半)から、土師器の塊の破片(図22-1、図24-4)、須恵器瓶の頸部片(図22-26)などが出土。また、SS-17・SD-18間畦畔部からは、土師器杯の底部片(図23-2)や須恵器甕の口縁部破片(図23-31)などが出土している。

SS-19

A区東壁沿いに設けた深掘りトレンチ断面では、調査区南端のSD-18以南にもⅡ-2-②層下半が残存していることを確認できた。また、調査区南壁に沿ってDS~DY区でもⅡ-2-②層下半を確認できた。しかし、北側のSD-18とを区画する畦畔は検出できておらず、水田面の規模は不明である。数枚の水田面が含まれると考えられるが、SS-19として報告しておく。検出面の標高は26.59~26.67mである。

耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)から土師器の柱状高台土器(図22-20)などが出土した。

SS-20

A区北端中央部のDV・DW-45区に位置する。水田面は調査区北側へのび、南北3.0~3.05m以上、東西3.85

~3.95mの不整形を呈する。水田面の標高は26.20m前後で、東隣のSS-3と比べてわずかに低い。水田面には凹凸が多く残り、人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが、規則的な配列は認められない。東側のSD-3とを区画する畦畔は、Ⅱ-2-②層下半を削り出した幅0.9~1.54mで、高さ3cm前後。南側のSD-10とを区画する畦畔は、幅73~100cm、高さ1~2cm。Ⅱ-2-②層下半を削り出す。西側のSS-21とを区画する畦畔は、幅35~95cmで、南半を幅狭に造って、水口を設けている。高さ3cm前後。

東西の畦畔の南端に水口が設けられている。東側の水口についてはSS-3で報告した。西側の水口は、縦断する土層断面を観察すると、上部に砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトである①層が堆積し、底面にはSS-21に向かって灰黄色砂質シルトの小塊が混じる黄褐色砂質シルトのレンズ状ブロックの②層が堆積する(図18-9)。水田面の標高差からも、SS-3からSS-20へ、SS-20からSS-21への配水が考えられる。

耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)からは、土師器塊の破片(図22-2・9・15)や、黒色土器塊の高台部破片(図46-20)が出土。図46-20は内黒土器で、下層のSD-209から出土した破片と接合する。また、SS-20・21間畦畔部からの遺物として土師器塊の破片(図23-15)がある。

SS-21

A区北端中央よりのDW・DX-45区に位置する。水田面は調査区北側へのび、南北3.25m以上、東西3.44~3.95mの不整形を呈する。水田面の標高は26.20m前後で、東隣のSS-20とはほぼ同じである。水田面には凹凸が残るが、他の水田面と比べて少ない。東側のSS-22とを区画する畦畔は、前述したようにⅡ-2-②層下半を削り出したもので、高さ3cm前後。南側のSD-10とを区画する畦畔は幅77~86cm、高さ3cmで、西側のSS-22とを区画する畦畔は幅61~95cm、高さ6~8cmで、ともにⅡ-2-②層下半を削り出す。

東側畦畔の水口についてはSS-20で報告した。西側のSD-22とを区画する畦畔の南端で、水口と考えられる畦畔部の途切れを平面的に検出できた。しかし、縦断する土層断面を確認したが、Ⅱ-2-②層下半と同じ砂礫が多く混じるシルト層で、確実に水口が切られているのかは確定できなかった。

耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)から白磁皿(図22-24・25)や須恵器甕(図22-32)、SS-21・SD-10間畦

畔からは土師器塚(図23-19)や土師質土器片(図23-32)などが出土している。

SS-22

A区北西部のDX・DY-44・45区で出土した。水田面は調査区北側のび、南北3.5m以上、東西4.95~5.3mを測る方形を呈する。水田面の標高は26.18~26.22mを測る。水田面には比較的多くの凹凸が残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みはない。東側のSS-21とを区画する畦畔はSS-21で報告した。南側のSD-10とを区画する畦畔は、幅59~76cm、高さ3~4cm。西側のSD-24とを区画する畦畔は、幅46~64cm、高さ4~6cmを測る。ともにⅡ-2-②層下半を削り出している。

SD-10とを区画する南側畦畔の西端と、SD-24とを区画する西側畦畔の2ヶ所で水口を確認した。おのおの配水状況を確認するために、SD-10との水口を縦断する土層断面を観察した。南側畦畔に設けられたSD-10との水口では、上部に砂礫が少量混じる黄褐色シルトの①層が、下部には細砂のレンズ状ブロックが混じる黄褐色シルトが堆積する(図18-10)。西側のSD-24との水口でも、上部に砂礫が少量混じる黄褐色シルトの①層が、下部には細砂のレンズ状ブロックが混じる黄褐色シルトが堆積する(図18-11)。ともに、下部に細砂のレンズ状ブロックがみられることから、SD-10・24への排水を目的とする水口と判断した。

耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)からは、黒色土器塚(図22-21)や須恵質土器壺(図22-27)、耕作土層下部~床土層からは土師器塚(図22-3)や塚(図22-6)、床土層(Ⅱ-2-②層下半)からは土師器塚(図24-7)や白磁碗などが出土している。この中で、白磁碗は、耕作土層出土の破片と接合する。また、SS-22・SD-10間畦畔からは土師器塚(図23-6・11)や内黒の黒色土器塚(図23-26)などが出土。図示していないが、SS-22・SD-24間畦畔から出土した須恵器破片は、中層水田上を覆う砂礫層であるⅡ-2-③層出土の破片と接合する。

SS-23

A区北西側のDY・DZ-44・45区に位置する。水田面は、調査区の北側と西側にのびる。ただし、南側のSD-29とを区画する畦畔は、ごく一部しか確認できていない。検出した水田面は、南北3m以上、東西6m以上、標高は26.17~26.21mを測る。水田面には多くの凹凸が残るが、耕起痕や足跡と確実に判断できる窪みはみられない。東側のSD-24とを区画する畦畔の南

半部は上部を部分的に削平されている。残存状態がよい北半部では、幅47~60cm、高さ3cm前後を測る。南側のSD-29とを区画する畦畔は、DY-44区のSD-29沿いで部分的に確認できただけである。ともにⅡ-2-②層下半を削り出している。

東側のSD-24とを区画する畦畔には、幅40cmほどの水口が切られていた。水口を縦断する土層断面を観察すると、SD-24からSS-23水田面に向かって細砂のレンズ状ブロックが混じる黄褐色砂質シルトである②層がみられ、その上部にSS-23から砂礫がまばらに混じる黄褐色砂質シルトの①層が堆積する(図18-12)。SS-23水田面はSD-24溝底よりも4cmほど高いが、埋土の堆積状況からSD-24からSS-23への給水を目的とする水口と考えた。

SS-23の耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)下部~床土層(Ⅱ-2-②層下半)から土師器塚の高台部破片(図22-10・13・17)、皿の底部破片(図22-18)、須恵質土器壺(図22-28)、弥生土器(図22-33)、東側畦畔に設けられた水口の埋土下部から土師器塚の高台部破片(図21-26)などが出土している。

SS-26

A区中央の北西よりのDV・DW-43・44に位置する。検出時に畦畔を削りすぎたが、帯状に残るⅡ-2-②層下半を検出して畦畔を復元した。推定できた水田面は、南北4.43m、東西3.33~3.65mを測る方形を呈する。水田面の標高は26.29~26.34m。水田面には比較的多くの凹凸が残されている。人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが判然としない。畦畔は、前述したように検出時に削りすぎたために、高さは不明。幅は48~60cmを測る。

耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)から土師器塚(図22-12・19)が出土。12は輪高台、19は厚い円盤高台のもの。SS-26東側のSD-25とを区画する畦畔から土師器の柱状高台土器(図23-5)、SS-26・27間畦畔からは両黒の黒色土器塚(図23-25)などの破片が出土。

SS-27・28

A区北西部のDW~DY-43・44区で、南北3.5~4.15m、東西7.6~7.7mの範囲が、畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-2-②層下半で区画されている。水田面と考えた。水田面は西側に向かって緩やかに高くなり、東北端では標高26.29m、西南端では26.42mと10cm以上の比高差がある。耕作土層にあたるⅡ-2-②層上半を盛り上げた畦畔を想定して、東半部のSS-27と西

半部のSS-28の2枚の水田面を復元した。水田面には、比較的多くの凹凸が残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できていない。

SS-27耕作土層下部～床土層から土師器塊(図22-8)、SS-27・SD-12間畦畔からも土師器塊の高台部破片(図23-14)が出土している。

SS-30

A区東端中央のDY・DZ-43・44区に位置する。水田面は調査区西側にのび、南北3.2m、2.7m以上の方形である。上部にⅡ-2-①層がごく薄くしか堆積しておらず、北側のSD-29と東側のSD-24とを区画する畦畔を削りすぎてしまい、帯状に残るⅡ-2-②層下半で畦畔を復元した。北側の畦畔幅は44～55cm、東側は40～55cmと推定される。南隣のSS-34とを区画する畦畔は、SS-30側では2cm前後の高まりを検出したが、SS-34側では畦畔上部を削ってしまい帯状に残るⅡ-2-②層下半で畦畔を復元している。水田面の標高は26.38～26.48m。水田面には多くの凹凸がみられるが、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。東側のSD-24とを区画する畦畔には幅80cmの水口が設けられ、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトで埋まっている。

床土層(Ⅱ-2-②層下半)から白磁碗(図24-11)、SS-30・34間畦畔から土師器塊(図23-18)、SS-30・SD-29間畦畔から土師器塊(図23-7)や白磁碗(図23-27)などが出土している。

SS-31

A区中央部のやや西よりのDV～DX-42・43に位置する不整形形状の水田面である。ただし、上部にⅡ-2-①層がごく薄くしか堆積しておらず、水田面の検出時に削りすぎてしまい、SS-31を区画する畦畔は、いずれも帯状に残るⅡ-2-②層下半で復元した。また、南東側の畦畔は確認できなかった。検出面は、南北3.9m、東西4.5～5.6m、標高26.40～26.52mを測る。畦畔の幅は43～60cm。Ⅱ-2-②層上半の検出面には凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。

床土層(Ⅱ-2-②層下半)から土師器塊の高台部破片(図24-1)、SS-31・32・SD-12間畦畔から両黒の黒色土器皿の口縁部破片(図23-24)などが出土している。

SS-32・33

A区中央から西よりのDX・DY-42・43区では、上

部にⅡ-2-①層がごくわずしか堆積しておらず、水田面の検出時に削りすぎ、畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-2-②層下半に囲まれたⅡ-2-②層上半の広がりを検出できた。確認できた畦畔の幅は45～95cm。Ⅱ-2-②層上半の標高は26.38～26.58mで、20cmもの比高差があることと、水田面の規模から考えて、ほぼ中央に南北方向の耕作土層のⅡ-2-②層上半を盛り上げて造る畦畔を想定し、東半部をSS-32、西半部をSS-33として2枚の水田面を復元した。Ⅱ-2-②層上半の検出面には凹凸が多く残る。しかし、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。

SS-32・33の耕作土層(Ⅱ-2-②層上半)～床土層(Ⅱ-2-②層下半)から土師器塊の高台部破片(図22-7・11)や両黒の黒色土器皿の口縁部破片(図22-22)などが出土している。

SS-34

A区西辺のほぼ中央のDY・DZ-42・43区で出土した方形の水田面である。上部にⅡ-2-①層がほとんど堆積しておらず、畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-2-②層下半に囲まれたⅡ-2-②層上半の広がりから復元した。水田面は、調査区西側にのび、南北2.9m、東西2.5m以上と考えられ、Ⅱ-2-②層上半の検出面標高は26.50m前後である。畦畔の幅は45～60cmと推定される。検出面には足跡と考えられる凹凸が多く残るが、確実に足跡と判断できるものはない。

南隣のSS-39とを区画する畦畔が幅26cmほど途切れる部分があり、水口と考えた。埋土は耕作土層であるⅡ-2-②層上半と共通する。

床土層(Ⅱ-2-②層下半)から土師器塊(図24-9)などが出土している。

SS-35

A区のほぼ中央のDV-42・43区に位置する。上部にⅡ-2-①層が部分的にしか堆積しておらず、DV-42北東部で北東隅周辺の畦畔を検出できた。西側の畦畔は帯状に残るⅡ-2-②層下半で復元できたが、南側を区画する畦畔はⅡ-2-②層上半が残存していないため不明である。しかし、西側が緩やかにカーブしてのびるSD-25に沿う三角形の水田面と推定され、北辺2.45m、南辺3m、東辺2.5m前後の規模が考えられる。検出面の標高は26.48～26.50mを測る。西隣のSS-17とを区画する畦畔は幅42cm前後、北隣のSS-15とを区画する畦畔は幅55cm、東側のSD-25とを区画する畦畔は幅58～62cmである。検出面には耕起痕や足跡と考えら

れる凹凸が残るが、判然としない。

SS-35床土層(Ⅱ-2-②層下半)から土師器坑(図24-3)、SS-34・SD-25間畦畔から土師器坑(図23-23)の高台部破片などが出土している。

SS-36

A区中央南よりのDV・DW-41・42区にあたるSD-18とSS-31・35、SS-17とSS-37に挟まれた部分では、Ⅱ-2-①層やⅡ-2-②層上半が残存しておらず、Ⅱ-1層直下からⅡ-2-②層下半があらわれた。明確に畦畔に区画された水田面を確認できなかったが、床土層にあたるⅡ-2-②層下半が残ることから、もともと水田面が造成されていたものと考え、SS-36とした。検出面には耕起痕や足跡の可能性をもつ凹凸もあるが、確定できなかった。

SS-37・38

A区南西部のDW・DY-42区で推定した水田面である。この地点では、Ⅱ-2-①層やⅡ-2-②層上半が残存しておらず、Ⅱ-1層直下からⅡ-2-②層下半があらわれた。北隣のSS-31・32・33、西側のSD-24とを区画する畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-2-②層下半を確認できたが、南側のSD-18とを区画する畦畔は検出できなかった。検出面は標高26.52~26.58mで、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。推定される水田面の規模は、南北3.1m、東西9m前後であるが、この範囲を1枚の水田面とするには面積が広すぎるので、DX-42区の南北にのびる攪乱溝を挟んで、東半部をSS-37、西半部をSS-38とする2枚の水田面を復元した。検出面では、SS-38東端部を中心として、耕起痕や足跡と考えられる凹凸が残る。しかし確実に足跡などと判断できるものはない。

SS-37床土層(Ⅱ-2-②層下半)から土師器坑底部破片(図24-6)などが出土している。

SS-39

A区南西部のDY・DZ-42区に位置する。この地点では、Ⅱ-2-①層は残存しておらず、Ⅱ-1層を除去後に精査して、畦畔と考えられる帯状にのびるⅡ-2-②層下半に囲まれたⅡ-2-②層上半の広がりを見出した。推定される水田面は、調査区西側にのび、南北4.15~4.4m、東西2.25m以上の方形を呈する。標高は26.50m前後。検出面では、耕起痕や足跡と考えられる凹凸も残るが、確実に足跡などと判断できるものは検出できなかった。北隣のSS-34とを区画する畦畔は幅47~56cm、南隣のSS-40とを区画する畦畔は幅45

~50cmを測る。南北の畦畔には途切れる箇所があり、水口と考えた。埋土はいずれも耕作土層であるⅡ-2-②層上半と共通する。SS-39・SD-24間畦畔から同安窯系青磁の破片(図23-29)などが出土している。

SS-40

A区南西部のDY・DZ-41・42区に位置する。周辺ではⅡ-2-①層は残存しておらず、Ⅱ-1層直下でⅡ-2-②層があらわれた。北隣のSS-39と東側のSD-24の一部で畦畔と考えられる帯状にのびるⅡ-2-②層下半の変色部を検出でき、調査区西側と南側にのびる方形の水田面を推定した。Ⅱ-2-②層の検出面の標高は26.55~26.59mで、水田面は南北2m以上、東西2.5m以上である。検出面では、いくつかの不整形の凹凸を検出したが、耕起痕や足跡と考えられるものはない。北隣のSS-39とを区画する畦畔には、水口と考えられる途切れ部がある。

2) 溝

Ⅱ-2-②層上面では、SD-8~12・18・24・25・29の9条の溝が出土した。いずれも水田面に伴う水路で、東西にのびるSD-8・10・12・18・29を基幹とし、これらを繋ぐように、北から南へ向かってのびるSD-9・24・25を配置する。さらに、補助的にSD-11などを設けている。

SD-8

A区北東部のDT-45区で、SS-2から西へ向かってのびる水路で、SD-9・10が分岐する地点までをSD-8とした。SS-2からの流出部で幅50cm、深さ5cm、SD-9・10が分岐する地点で幅1.2m、深さ6cmを測る。SS-2側がSD-9・10分岐点よりも2~4cmほど高い。SS-2で報告したように、埋土下部に砂礫が非常に多く混じる暗灰黄色砂質土が堆積し(図18-1)、SS-2からの流水があったことを確認できた。土師器坑の高台部破片(図21-1)などが出土している。

SD-9

A区北東部のDT-45区でSD-8から分岐して北側へ向かって流れる水路である。SD-10と分岐する付近で、溝底の標高は26.15~26.18mで、北へ向かってわずかに低くなる。

SD-8から分岐する地点の埋土を観察すると、上半部に径1~1.5mmの砂礫が多く混じる暗灰黄色シルトの①層、下半部に砂礫が少なくやや粘性をおびる暗灰黄色シルトの②層、溝底に親指先大小の小円礫が少量混

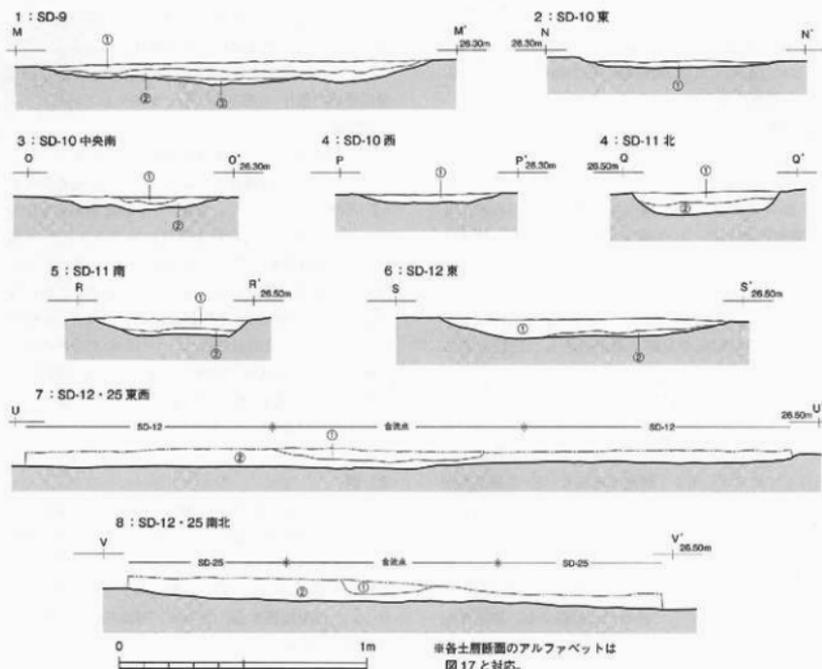


図19 A区II-2-②(上層水田)層に伴う溝の土層断面図1(縮尺1/20)

じる暗灰黄色砂質土の③層が堆積する(図19-1)。また、①層には、北に向かって流れるように、灰黄色砂質土のレンズ状ブロックがみられる。

埋土①層から小指先大の不定形の炭化物片が少量、②層から両黒の黒色土器塊の口縁部破片(図21-2)などが出土している。

SD-10

A区東北部のDT-45区南西端で、SD-8・9から分岐して西へのび、DY-45区南東端付近でSD-24と合流する水路である(図版6・1)。総延長21.5mほどを測る。溝底にはこまかな凹凸があるが、標高26.14~26.20mとほぼ平坦である。東端のSD-8からの分岐点では溝幅47cm、深さ5~6cm、その西側のDU-45区では溝幅82~93cm、深さ6cm、中央部のDW-45区では溝幅60~80cm、深さ3~6cm、東端のDX-45区では幅43cm前後、深さ4cmを測る。

SD-8からの分岐点近く、DV・DW区の境界部、DW・DX区の境界部の計3ヶ所で、埋土の堆積状況を観察した。SD-8からの分岐点近くの埋土は、小円礫が少量混じるオリーブ褐色砂質シルトの①層で、灰白色細砂のレンズ状ブロックがみられる(図19-2)。DV・DW区の境界部では、最上部に径1mmほどの礫が少量混じる暗灰黄色粘質シルトの①層、中位~溝底には砂質が強い灰黄色砂質シルトの②層が堆積し、②層では細砂のレンズ状ブロックがみられる(図19-3)。DW・DX区の境界部は、砂礫混じりの灰黄褐色シルトの①層で埋まっていた(図19-4)。埋土下半~溝底近くで、細砂のレンズ状ブロックがみられることから、溝底に凹凸があるとしても、東から西へ向かって流水があったことを把握できる。

埋土中から土師器塊(図21-3・4)の高台部破片、炭化物小片が少量出土している。4は溝底から出土。

3は内面が黒色を呈するが、器壁の厚さなどから土師器と判断した。この他、DV-45区西端では、溝底から土師器小片や獣歯などが出土している(図版7-4)。

SD-11

A区東半部のDT-43・44区に位置する。DT-43区北東端でSD-12から北に向かって分岐する水路である。北端はSS-5・6とSD-10を区画する畦畔で途切れている。総延長5m、溝幅56~63cm、深さ6~8cmを測る。溝底は、SD-12との分岐点近くで26.38m、北端部で26.34mと、ごくわずかであるが北に向かって低くなる。

南北2ヶ所で土層観察用ベルトを設定し、堆積土層を観察した。北側の土層観察用ベルトでは、上部に径1~2mmの礫が多く混じる灰色粘質土の①層、下部に灰色粘質土に細砂の薄いレンズ状ブロックが互層状態で縮状に堆積する②層を確認した(図19-4)。南側の土層観察用ベルトでは、上部~中部に径1~2mmの角礫が多く混じる灰色粘質シルトの①層、溝底には灰褐色粘質土に細砂・微細砂の薄いレンズ状ブロックが縮状にみられる②層が堆積する(図19-5)。溝底の高低と埋土から、SD-11はSS-6・7に給水を行うための補助的水路と考えた。

埋土から土師器皿の底部破片(図21-5)や、炭化物小片などが出土している。5の外底面には回転糸切り離し痕が残る。

SD-12

A区のはほぼ中央DR-43区からDY-42・43区へ向かって東西にびる水路である(図版6-2)。東側は調査区外へのび、西端は南北方向にはするSD-24と合流す

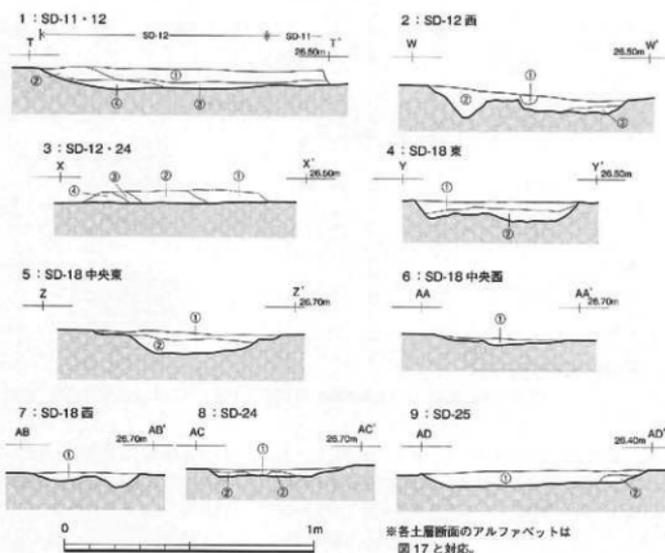


図20 A区II-2-②(上層水田)層に伴う溝の土層断面図2(縮尺1/20)

る。西側がわずかに北にカーブするが、総延長34m以上を確認できた。溝幅は、東端のDS-43区では85~115cm、東半部のDU・DV-43区では95~105cm、西半部のDW・DX-43区では68~80cm、西端のDY-43・44区では67cm前後を測る。溝底は凹凸が多く、東端で標高26.36m、中央部で26.28m、西端で26.34mと、部分的に低く窪む部分もある

SD-12では、6ヶ所に土層観察用ベルトを残して埋土の堆積状況を確認した。東端近くのDS-43区西半部では、上部~中部に小礫が非常に多く混じる灰褐色砂質シルトの①層、溝底近くに灰褐色シルトと細砂・微細砂の薄いレンズ状ブロックが縮状に互層堆積する②層を確認できた(図19-6)。DS・DT-43区境界部のSD-11との分岐点では、上部に、径1~2mmの角礫や細砂が多く混じる灰褐色砂質シルト①層と、細砂が非常に多く混じる灰褐色砂質シルトである②層がみられる。下部には、細砂および微細砂の薄いレンズ状ブロックを縮状に互層状態で含む灰褐色シルトの③層、灰褐色粘質シルトを主体とする④層が堆積する(図20-1)。調査区中央のDV-43区のSD-25との合流点では、十

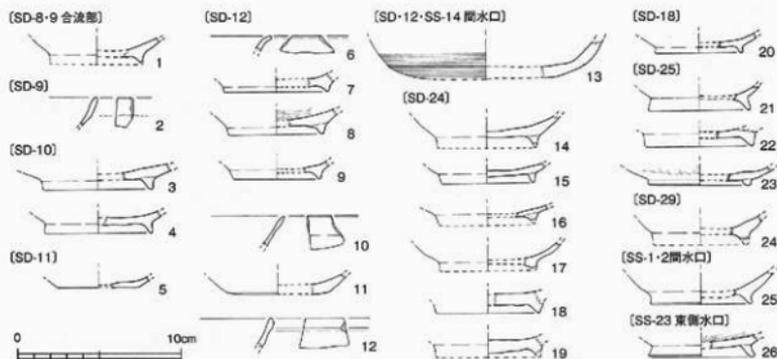


図21 A区Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴う水路・水口出土遺物実測図(縮尺1/3)

字に上層観察用ベルトを残して、埋土を観察した。上部には径1mmの砂礫が少量混じる暗灰黄色シルトの①層がレンズ状に堆積し、下部は溝底まで径1~2mmの砂礫や小指先~親指先大の円礫、多量に混じる暗灰黄色砂質土で埋まる(図19・7・8)。

DW・DX-43区境界部に設定した土層観察用ベルトでは、最上部にぶい黄褐色粘質シルトブロックの①層、上部~中部に灰白色砂や小指先大の円礫、明黄褐色シルト小塊が混じり合うぶい黄褐色砂質シルトの②層、溝底の一部に貼り付くように径0.5mmの砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質土がレンズ状に堆積する(図20・2)。西端のDY-43・44区のSD-24との合流地点では、溝底の標高がほとんど同じなので、配水の方向を確認するため、溝方向に平行する土層観察用ベルトを設定した。その結果、SD-12からSD-24へ向かって押し出されるように、明黄褐色シルト小塊が混じる黄褐色シルトの①層、径1mm~小指先大の砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの②層、砂礫が多く混じるが粘性がある黄褐色砂質シルトの③層、径1mm~小指先大の砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの④層が堆積している状況を観察できた(図20・3)。以上のSD-12を埋積する土層から、SD-12は東から西に向かって給水を行うことを主目的とする水路と考えた。

SD-12埋土からは土師器の塊(図21・6~9)などが出土している。また、SD-12・25の合流地点では土師器環の底部片(図21-11)、土師器塊(図21-10)や白磁碗(図21-12)などが出土した。8は、高台を貼り

付けるために、接合部に幅広の沈線を1条巡らす。焼成が不良で、器壁の芯部に灰黒色の黒化が残る。9は、内外面ともに黒色に焼き上がっているが、芯部から黒色が染み出しており、焼成不良の土師器と判断した。11の環の外底面には、回転糸切り難し痕が残る。12は、小さな玉緑口縁の白磁碗で、内外面とも全面施釉。細かな貫入がみられる。13はSD-12・SS-14間水口から出土した底部破片。

SD-18

A区南部のDR-41~DX-42区で東西にのびる水路である(図版6・3)。DX-42区以西では検出できなかった。しかし、DY-42区南西部のSS-38の南側で、畦畔と考えられる東西に帯状に残るⅡ-2-②層下半と、その北側の窪みを確認できたので、この地点でSD-24と合流すると考えられる。また、DV-41区東端では、北側に小さく張り出す部分がある。この地点は、北からのびるSD-25の延長線上にあり、SD-18・25の分岐点である可能性が高い。このように総延長は34m以上となる。溝底の標高は26.52~26.58mであるが、かなりの凹凸があり、一定していない。溝幅は、DS-41区で55~65cm、DT・DU-41区で65~106cm、DV-41区では74cm前後を測る。ただし、DW-41・42区では30~60cmと細く浅くなる。SS-18が位置する付近は、水田面の報告でもふれたように、Ⅱ-2-①層がみられず、Ⅱ-1層の直下でⅡ-2-②層上半もしくは下半があらわれる。そのため、溝の上部はⅡ-1層の耕作によって削られているものと考えられる。

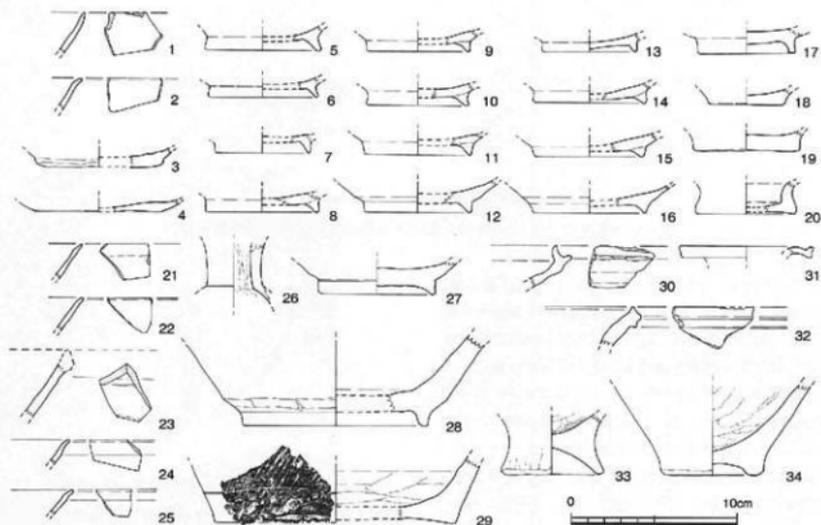


図22 A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の耕作土出土遺物実測図（縮尺1/3）

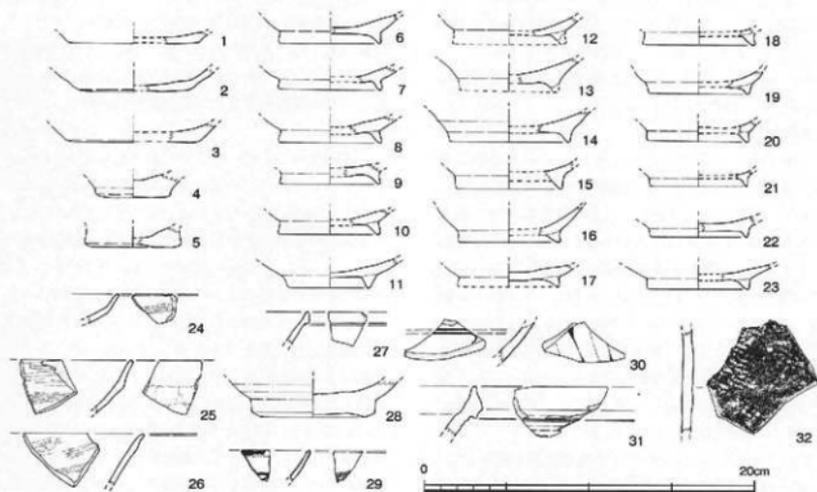


図23 A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の畦畔部出土遺物実測図1（縮尺1/3）

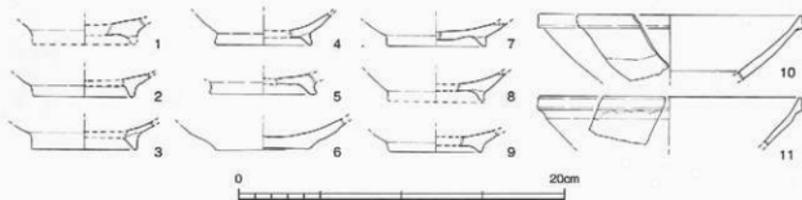


図24 A区II-2-②(上層水田)層の床土層出土遺物実測図(縮尺1/3)

DT-41区東端、DV-41区中央、DV・DW-41区境界部、DW-41・42区西端部の計4ヶ所で埋土の土層断面を観察した。DT-41区東端では、上部に径1mmほどの砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトの①層が堆積し、下部の②層には暗灰黄色砂質シルトと基本層IV層の明黄褐色砂質シルトが混じり合い、灰色細砂がレンズ状ブロックでみられる(図20・4)。

DV-41区中央では、上部はオリーブ褐色シルトの①層で埋まり、中部～下部の②層はオリーブ褐色シルト・黄灰色シルト・明黄褐色砂質シルトが混じり合うとともに、径1mm前後の砂礫のレンズ状ブロックがみられる(図20・5)。DV・DW-41区境界部は黄灰色砂質シルトの①層(図20・6)、DW-41・42区西端部はオリーブ褐色シルト・黄灰色シルト・明黄褐色砂質シルトが混じり合う①層(図20・7)で埋積されている。

埋土中からは両黒の黒色土器の高台部破片(図21-20)などが出土している。

SD-24

A区西部のDY-41～45区で南北にのびる水路である。前述したようにDY-45区でSD-10、DY-42区でSD-18と合流する。南北端とも調査区外にのび、出土したSD-24の総延長は19mである。溝底はかなりの凹凸があるが、南端で標高26.49m、北端で26.14mと、北に向かって次第に低くなる。北端のDY-45区では幅83～91cm、深さ8～10cm、中央のDW-43・44区では幅52～58cm、深さ6～8cmを測る。しかし、南半部のDY-42区では、水田面の報告でも述べたように、上面がII-1層の耕作によって削られて、溝幅60～77cm、深さ8cmしか残存していない。

DY-42区北端でSD-24の埋土の堆積状況を観察した。上部～中部は径0.1mmほどの砂粒が多く混じり砂っぽい黄褐色砂質シルトの①層で埋まり、溝底には黄灰色砂質土がレンズ状に堆積する。流水の痕跡である(図

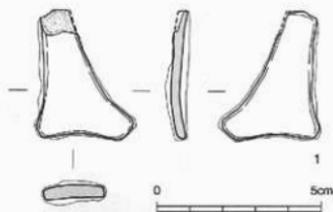


図25 A区II-2-②(上層水田)層の畦畔部出土遺物実測図2(縮尺2/3)

20・8)。

埋土中からは、土師器坑(図21-14～17)や黒色土器坑(図21-18・19)の高台部破片などが出土している。18は内黒土器である。19は、黒色土器としてはかなり厚いが、内面が黒色であり内黒土器に分類した。土師器坑の15の器壁の芯部には灰色の黒化が残る。

SD-25

A区中央のDV-42～44区で、南半部が緩やかに東にカーブしながらのびる南北方向の水路である(図版6・4)。北端部はSD-10と合流すると考えられるが、合流部は攪乱で削れている。南端部のDV-42区以南は途切れているが、水田面の報告でもふれたように、上部のII-1層の耕作によって削られたものと考えられる。ただし、延長線上に位置するSD-18のDV-41区東端で確認された小さな張り出し部分は、SD-25との合流点である可能性が高い。検出できたSD-24の総延長は11mほどである。溝底は、他の水路と同様に多くの凹凸があるが、南端での標高は26.46m、北端で26.24mを測り、北に向かって次第に低くなる。比較的遺存状態がよいDV-43区では、溝幅77～109cm、深さ5cm、DV-44区では幅89～97cm、深さ6～7cmを測る。

DV-43区のSD-12との合流点と、DV-44区南半部で

埋土を確認した。前者はSD-10で報告している(図19・7・8)。DV-44区南半部では、砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトの①層が堆積し、溝底に粘性が強い暗灰黄色砂質シルトの②層がレンズ状に堆積する。他の水路の埋土と比べて、それほど旺盛な流水は考えられない(図20・9)。

埋土下部から土師器壺(図21-21)や瓦器壺(図21-23)、溝底から土師器壺(図21-22)などが出土している。

SD-29

A区北西部のDY-44区で部分的に1.9mほど検出できた東西方向にのびる水路である。溝底の標高は26.32m前後で、溝幅50~57cm、深さ7cm前後で遺存する。埋土の特徴は、調査時に観察を怠ってしまった。

溝底から土師器の壺の高台部破片(図21-24)などが出土している。

3) 小穴

この他、Ⅱ-2-②層上面では、砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトを埋土とする小穴SP-40~42を確認した。これらの埋土はⅡ-1層と共通するので、Ⅱ-2-②(上層水田)層に伴うものではない。巻末の遺構一覧表を参照されたい。

(2) 水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物

Ⅱ-2-②(上層水田)層から出土した遺物を報告するが、その中には、SS-4の耕作土層から灰部焼染め付け碗・白磁の口縁部破片が各1点、SS-38の床土層から近代の施軸陶器の胴部破片1点が含まれている。このことに遺物整理作業中に気がつき、出土位置などを再確認した。まず、SS-4は調査区東端の壁際近くに位置し、調査区壁からの落ち込みが考えられる。また、SS-38の遺物は床土層として取り上げていたが、この部分は本来耕作土層・床土層はなく、Ⅳ層上面に残された疑似畦畔で復元した水田区画であり、Ⅱ-1層の掘り残し部分からの出土である可能性が高い。以上から、上層水田の耕作土・床土層には近世~近代の遺物は包含されていないものとする。

1) 耕作土層出土の遺物

Ⅱ-2-②(上層水田)層の調査では、耕作土と床土部分を面的に区分できず、耕作土層~床土層として

取り上げた遺物が含まれる(図22-1~34)。1~20は土師器。1・2は壺の口縁部片。3・4は壺の底部片で、3の外底面には回転糸切り難し痕が部分的に残る。5~17は壺の輪高台周辺の破片。7・13の底部の芯部には灰黒色ないし灰色の黒化層が部分的に残る。18は皿か。19は厚めの円盤高台をもつ壺で、外底面の切り難しは回転糸切りと考えられるが、判然としない。20は柱状高台土器である。21・22は両黒の黒色土器壺。23~25は白磁。23は碗の胴部破片で、玉縁口縁をもつと考えられる。胴部下半は露胎のまま。また、SS-14・17・20の耕作土層からも、白磁碗の胴部破片が各1点出土している。24・25は、傾きと器壁の薄さから、皿と考えた。26は須恵器の瓶の頸部~肩部の破片。27~29は須恵土器の壺の底部片。29の外底面には、回転糸切り難し痕らしき痕跡がみられるが、判然としない。30~32は古墳後期の須恵器で、30は坏身、31は長頸壺、32は甕の口縁部片である。33・34は弥生土器の甕の底部片。34の器壁の芯部には、黒灰色の厚い黒化層が残る。30~34は混入品である。

2) 畦畔部出土の遺物

土師器・黒色土器・白磁・青磁・須恵器・土師質土器・鉄器がある(図23・25)。図23-1~4は土師器坏。1の外底面には板状瓦痕の痕跡がわずかに残り、4の外底面は回転糸切り難し。5は柱状高台土器の底部片。6~23は輪高台の壺の破片。15の内面は黒色であるが、黒変がそのまま残った土師器と判断。12・22の外底面には回転糸切り難し痕がみられる。20の内面は、二次的な火熱を受けて赤変。6の底部の芯部には淡い明灰色、22の器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。

24は両黒の黒色土器皿、25は両黒、26は内黒の黒色土器壺である。27・28は白磁碗。図示した以外に、この他、SS-14・17間、SS-16・SD-18、SD-29・SS-30間の畦畔部から、白磁碗の胴部片が各1点出土。29は、同安系青磁の壺で、内外に黄緑色の釉を施すが、口縁部内面は重ね焼きのため、釉が一部剥げたり釉溜まりができています。胴部外面には樹文、内面には沈線が一部残る。30は、龍泉窯系青磁の壺で、内外面にともにやや黄色みを帯びる緑色の釉を施す。外面には連弁文を削り出す。内面には1条の沈線文と、草花文の一部と考えられる文様をへら描きで施す。31は、須恵器の甕の口縁部片で、混入品。32は、土師質土器の胴部片で、外面に格子文のタタキ目が残る。

図25-1は、3.9×2.9cmの三角形の鉄片で、厚さ4mmを測り、片面がわずかにくぼむ。鉄器素材あるいは鉄器製作残滓の可能性を考えた。残存重量11.0gを測る。

3) 床土層出土の遺物

出土した遺物は少ない(図24-1~11)。1~9は土師器塚。1の内面は黒変。6は底部側面に幅8mmほどの灰色の黒化層が輪状に巡る。高台部が接合面で見

れたものである。7は高台部を接合する際に沈線を2条巡らし、接合しやすいように工夫している。底部には淡灰色の黒化層が部分的に残る。8も、胴部の器壁の一部に灰色の黒化層が残る。10-11は白磁碗である。10は、内面と外面胴部上半までは施釉。胴部下半外面は露胎のまま、11の玉縁口縁部には釉垂れがみられる。

4 II-2-③層と出土遺物

II-2-③層は、部分的に黄褐色砂質シルト、オリブ褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトとなるが、砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。A区東半~中央ではDR~DV-42区以北、西半ではDW~DX-43区以北、DY~DZ-44区以北に堆積し、検出面は調査区北東部に向かって緩やかに低くなる。SS-110の覆土部分などでは、粗砂や小礫からなる薄いラミナ層がみられる。しかし、こうしたラミナ層が多く見られるのは、SD-102沿いの南半部で、中央部や北半部へ向かうほどラミナの発達は見られない。また、SS-105の覆土は小石や礫・砂がとくに多く混じる。一旦SD-101から流水が流れ込んだ後、水田域全体に比較的緩やかに増水した結果、II-2-③層が堆積したものとする。上部のII-2-②層下半(上層水田の床土層部分)と漸移的な部分があり、区分が曖昧になったこともあるが、下部のII-2-④(中層水田)層との層界は明確に区分できた。

II-2-③層からは比較的多くの遺物が出土している。鉄器(図26-1・2)、土師器(図27-1~72)・黒色土器(図27-73~88)・白磁(図28-1~9)・緑釉陶器(図28-10)・須恵質土器(図28-11~16)・丸瓦(図28-22)の古代後半~中世の遺物と、古墳後期~奈良時代の須恵器(図28-17~21)、弥生土器(図28-23・24)、石器(図40-1)などがある。奈良時代以前の遺物は混入品である。

図26-1は、鉄刀子の破片。背骨が部分的に残る。残存長3.2cm、幅1.3cm、厚さ3mmを測る。刃部の断面は細長い二等辺三角形である。残存重量3.2gを測る。2は、先端部を欠くが、残存長4.8cmの鉄釘である。上端を0.7cmほど直角に折り曲げて釘頭とする。体部の断面は長方形で、最大幅1.2cm、最大厚5mmを測る。

先端に向けて幅が次第に狭く細くなる。残存重量9.9gを測る。

図27-1は土師器の皿、2~5も底径から皿と考えた。1の器壁の芯部には淡黒色の黒化層が残り、外底面は黒変したままである。2・3の外底面には回転糸切り離し痕が残る。6~18は碗の口縁部片。8は砂粒を含まない精選粘土を用い、内面に黒変が生じている。9・11・12は、胎土は砂礫がほとんど混じらない精選粘土を用いている。9は比較的厚でのつくりであるが、11・12は薄でのつくりである。11の内面には、明赤褐色の肌理の細かい化粧土が部分的に残る。15は、内外面とも二次的な火熱を受けて赤変する。19~26は底径から坏の底部片と考えた。21の外底面には回転糸切り離し痕が残る。23・24は、外底面を糸切り離ししていると考えられるが、判然としない。26の底部の芯部には淡黒色の黒化層が残る。27~65は輪高台をもつ碗の破片である。50は、SS-109・110間北側水口の埋土か

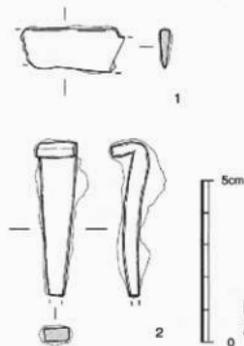


図26 A区II-2-③層出土遺物実測図1(縮尺2/3)

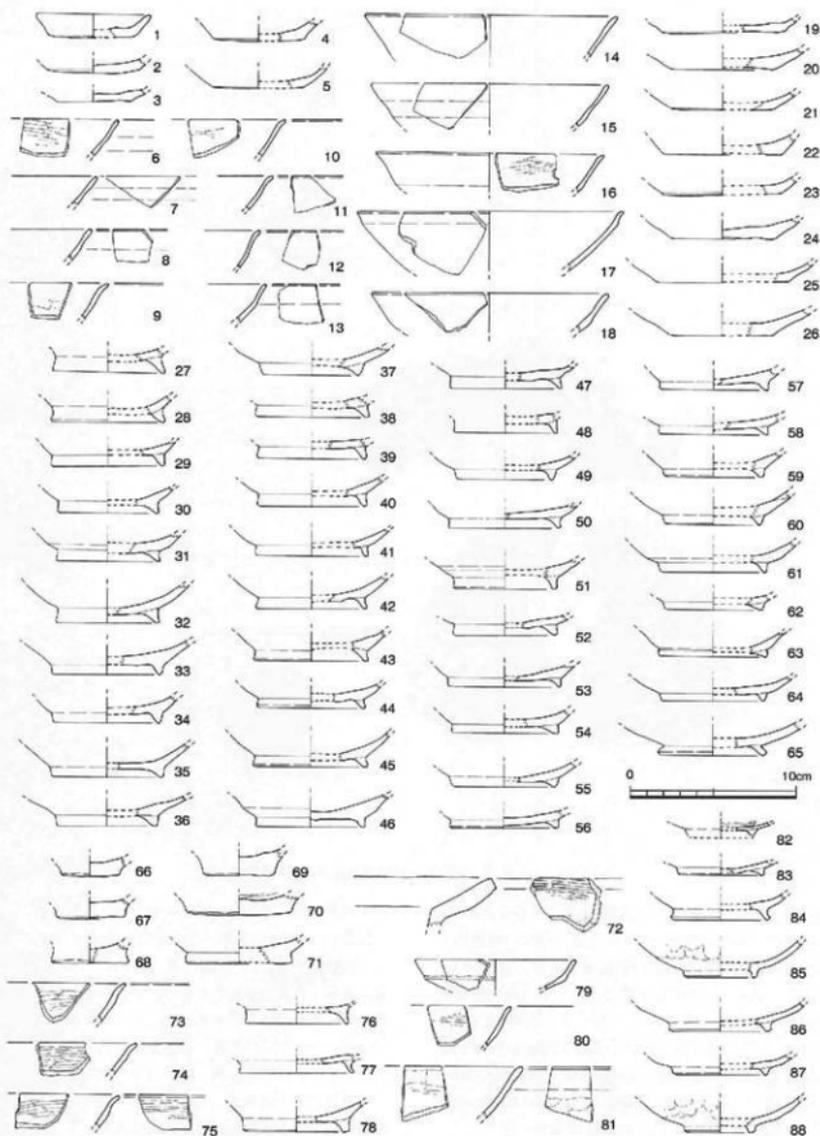


図27 A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図2(縮尺1/3)

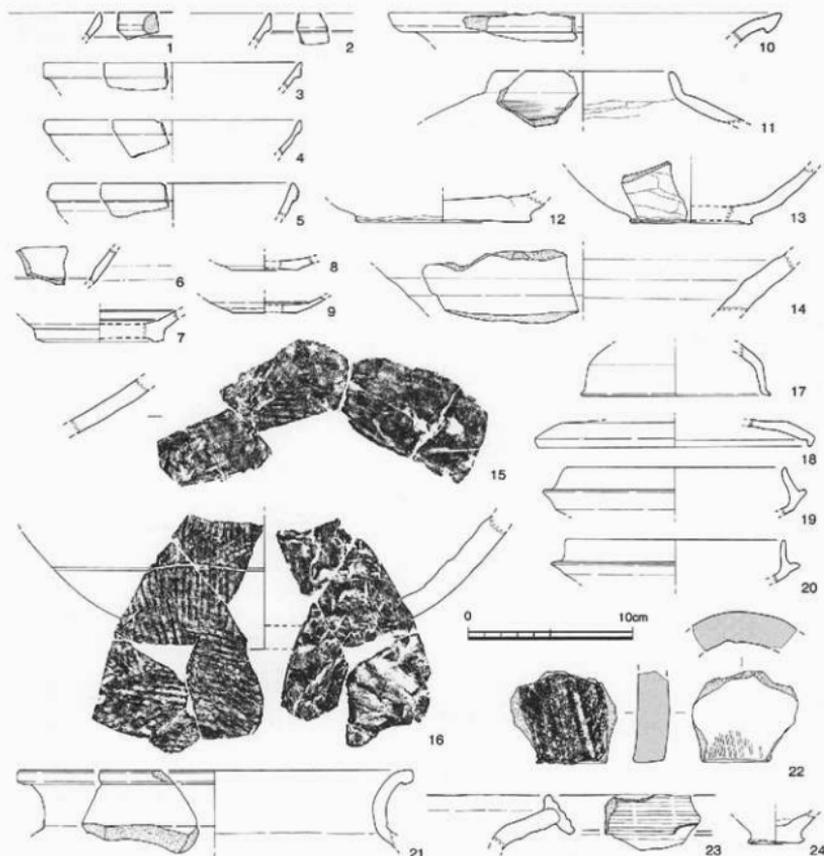


図28 A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図3 (縮尺1/3)

ら出土した破片と接合する。27の内面は黒変したまま。34・50は、胎土に砂粒がほとんど混じらない精選粘土を用いる。46の外底面には回転糸切り痕し痕が残る。39・55・56は、二次的な火熱を受け、器表面が赤変する。40・48・54・57・60・61の高台部や器壁の芯部に、淡黒色、灰色の黒化層が残る。66~71は厚い円盤状の高台をもつ。66の外底面には回転糸切り痕し痕が残る。72は土鍋の口縁部片で、口縁端面~外面は刷毛目調整の後に横ナデを施す。内面は乱雑な横ナデ。

73~88は黒色土器で、73~75・77・78は内黒の碗、

79は両黒の皿、76・80~88は両黒の碗である。

図28-1~7は白磁碗。6の外面は回転ヘラケズリで、露胎のまま。7の見込み部分に幅が一定しない沈線が巡る。外面は露胎のまま、内面は施釉。1は、二次的な火熱を受けているためか、くすんだ釉色となっている。8・9は白磁皿。8の胎は白色。外底面は露胎のまま、以外は施釉。胎の質から攪乱による混入の可能性を考えておく。9の外面は回転ヘラケズリ。内面は横ナデ。外底面周辺は露胎のまま。

10は緑釉陶器。釉色は濃青緑色。11~16は須恵質土

器。14~16は壺の底部片で、同一個体の可能性が高い。15の破片には、DT-41区 SS-17・SD-16間 畦畔部、DW-44区 SS-26耕作土層から出土した破片が接合する。また、16には、DV-43区や上層水田の SS-22西側畦畔部から出土した破片が接合する。

17~19は須恵器で、17は短頸壺の蓋、18は坏蓋、19・20は坏身である。22は丸瓦の端部の破片。凸面の

端部近くには平行条線のタタキ目が部分的に残る。凹面には平織りの布の圧痕が残る。

23・24は弥生土器。23は口縁端に粘土を貼り付けて上下に拡張し、端面に4条の沈線状の凹線文を巡らす。24は手捏ねの小型鉢と考えた。

図40-1は、サヌカイトの打製石鏃で、基部を欠損する。現存重量1.2gを測る。

5 II-2-④(中層水田)層の遺構と遺物

II-2-④(中層水田)層は褐色シルトないし暗灰黄色砂質土が混じる土層で、DR~DV-42区以北、西半ではDW~DX-43区以北、DY~DZ-44区以北の調査区北東のやや低くなった部分を中心として広がる。上部に堆積する、砂礫が多く混じるII-2-③層とは比較的容易に区分できた。

また、II-2-④層の上半は、粘性が強く土壌化が進んでいる。下半には砂が混じり、やや粘性が弱くなる。上半を耕作土層、下半を床土層として調査したが、平面的に区分することは困難で、調査区東壁沿いに設けた深掘りトレンチや攪乱溝の壁面で確認できた上半と下半の区分を参考としながら、上半の耕作土層と下半の床土層を掘り分けながら、精査に努めた。しかし、区分が混乱した時もあり、耕作土層下部~床土層として取り上げた出土遺物も多くなった。

(1) 遺構

II-2-④層上面では、畦畔で区画されたSS-105~113・115~118の水田面、これに伴うSD-101~104・114・119・120・122が出土した(図版9、10-1)。SX-121は埋積土層の観察から水溜遺構と考えた。SK-123はSS-105の水口底面からSD-122溝底に接するように掘り込まれている。SS-105の水口に関連する土壌である。また、調査区南西部のDV・DW-41・42区、DX~DZ-41~44区の微高地上では草によると考えられる耕作痕跡が検出できた。

1) 水田

SS-105~113・115~118の計13枚の水田面が出土した。水田面は北東に向かって緩やかに傾斜し、東西に走るSD-102・103を境として8cmほどの段差が設けら

れている。水田を区画する基軸となる畦畔は、南北方向に走るSD-101~103沿いに設けられた畦畔で、南北方向にのびる畦畔で小さく区画される。畦畔はいずれもII-2-④層下半の砂混じりでやや粘性が弱い褐色シルトを削り出して造られている。

SS-105

A区南東のDT-42・43に位置する。南北2.0~2.15m、東西2.25mの方形を呈し、水田面の標高は26.28m前後を測る。水田面にはII-2-③層で埋まった凹凸がみられるが、耕起痕や足跡と確実に判断できるものはない。SS-105は、南北1.8m、東西2.35mほどの不整形方形を呈する。北側のSD-102とを区画する畦畔は、幅50~56cm、高さ2cm。南側のSD-101とを区画する畦畔は、幅58~68cm、高さ6~8cm。西側のSD-122とを区画する畦畔は、幅55cm前後、高さ2~4cmを測る。いずれもII-2-④層下半を削り出して造られている。

南東部・北部・北西部の3ヶ所で畦畔が途切れる部分があり、水口と考えた。南東部の水口は、東側からのびてきたSD-114がSD-101と合流する地点に設けられている。幅37cm、深さ14cmを測り、底面はSD-101・114合流点に向かって低くなる。SD-101埋土上半部と同じく、径1mm~小指先大の砂礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトで埋まっている。北側のSD-102とを区画する畦畔に設けられた水口は、幅48cm前後、深さ2~6cmと、底面はSD-102に向かって低くなる。砂礫が混じるにぶい黄褐色~黄褐色の砂質シルトで埋まる。直径0.1~3mm前後の白色砂粒を多く含む。北東隅のSD-122とを区画する畦畔に設けられた水口は、幅75cm、深さ2cmを測り、水口西半からSD-122にかかる場所にSK-123が掘り込まれている。埋土はきめの細かい細砂が多く混じる灰白色砂質土である。以上の3ヶ所の水口では、埋土の観察から配水方向を確認

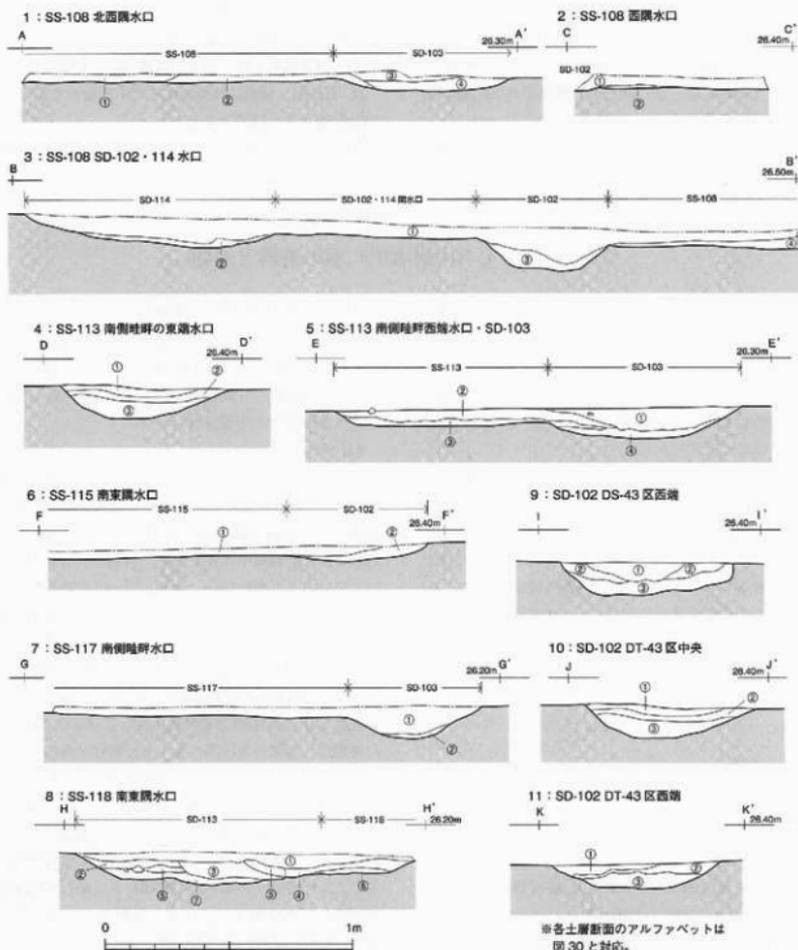


図29 A区II-2-④(中層水田)層に伴う水口部分の土層断面図1(縮尺1/20)

できなかった。しかし、後述するように、SS-105南側のSD-101でもDT-42区付近に堰を想定することができれば、南東側の水口から給水して、北部の水口からSD-102へ、北西部の水口からSD-122を介してSS-106へ配水することが考えられる。

SS-105・SD-101間畦畔から土師器坏(図38-8)、床

土層から土師器碗(図39-20)などが出土している。床土層から出土した土師器皿の破片の中には、接合できないが、SS-108床土層下部出土の破片(図39-4)と同一個体と考えられるものが含まれる。

SS-106

A区中央東よりのDT~DV-42・43区で出土した。

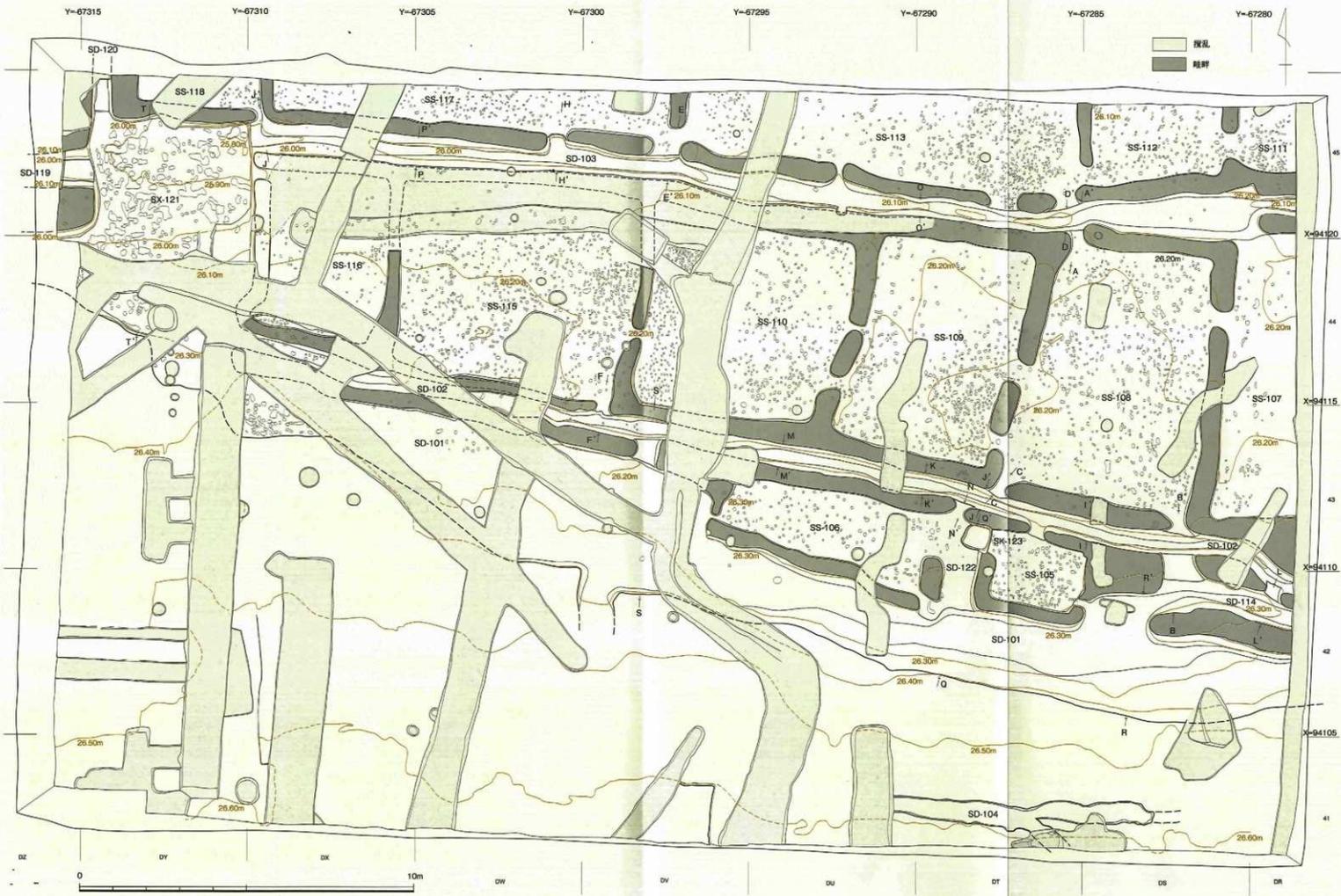


圖30 A区Ⅱ-2-②(中層水田)層遺構配置圖(縮尺1/100)

南北1.6~2.5m、東西6.3mの東西に細長い不整形な水田面である。北西部の畦畔が一部破壊されている。水田面の標高は26.26~26.28mで、東側のSS-105の水田面とはほぼ共通する。水田面には凹凸があり、人間の足跡と考えられる窪みも含まれる。畦畔は、いずれもⅡ-2-④層下半を削り出して造られている。東側のSD-122とを区画する畦畔は、幅69~74cm、高さ5cm前後。北側のSD-102とを区画する畦畔は、幅65~68cm、高さ2cm前後。南側のSD-101とを区画する畦畔は、幅52~75cm、高さ6~8cm。西側畦畔は、鳥状にⅡ-2-④層下半を削り出して、南端をわずかに張り出させる。高さ4cm前後を測る。

SD-122とを区画する畦畔の南北端2ヶ所と、西南端のSD-101との接続部に1ヶ所、計3ヶ所の水口を確認した。SD-122とを区画する畦畔の南端の水口は幅25cmを測る。これに対して、北端の水口は幅1.37mと、幅が広い。何度か水口が切り直されていることが考えられる。水口部の底面は、SD-122の溝底と同じか、2~4cm高いだけである。ともに、水口を埋める堆積土層は、SD-101埋土上半部と同じく、径1mm~小指先大の砂礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトである。西南端の水口は、幅18cmで、SD-101に向かって4cmほど低くなる。埋土は細砂や小礫が多く混じる灰色シルトである。

SD-122とを区画する畦畔南端に設けられた水口から、土師器の柱状高台土器(図35-19)が出土。耕作土層からは土師器坑(図37-21)、SS-106・SD-101間畦畔から土師器坑(図38-18)や内黒の黒色土器坑(図38-32)、SS-106とSD-102・122間の畦畔から土師器坑(図38-14・15・19・29)、弥生土器の壺の底部片(図38-37)、床土層から土師器皿(図39-2)など、比較的多くの遺物が出土している。

SS-107

A区東端のDR・DS-43~45区で出土した。水田面は南北8.5mを測り、東側は調査区外にのび、東西2.75m以上を抽出した。水田面の標高は26.20~26.25mで、北に向かってわずかに低くなる。水田面には凹凸が残るが、確実に耕起痕や足跡と考えられる窪みはみられない。北側のSD-103とを区画する畦畔は、幅75cm前後、高さ2cm前後を測る。南側のSD-102とを区画する畦畔は、西端で幅63cmと狭いが、東側は鳥状に広くなり、2mほどの幅を持つ。水田面からの高さ2cmほどが遺在する。西隣のSS-108とを区画する畦畔は、幅50~

70cm、高さ2~4cmを測る。いずれもⅡ-2-④層下半を削り出している。

北西隅と西側のSS-108とを区画する畦畔で水口を検出した。北西隅の水口は、幅90cmで、SD-102に向かって6cmほど急に低くなる。埋積状況を観察しなかったが、SD-102への排水を目的とする畦畔と考ええる。SS-108とを区画する畦畔に設けられている水口は、上層に堆積したⅡ-2-③層の砂礫層で埋まっていた。幅50cm前後で、SS-107・108の水田面と同じ高さである。耕作土層から土師器坑(図37-35)、SS-107・108間畦畔から土師器皿(図38-1)、SD-103・SS-107間畦畔から土師器坑(図38-9)や土鍋片(図38-31)、床土層から土師器坑(図39-17)、両黒の黒色土器坑(図39-40)、須臾器の短頸壺の蓋(図39-45)などが出土している。

SS-108

A区東半部のDS・DT-43・44区に位置する。水田面は不整形な台形で、南北7.4~7.75m、東西4.3~5.7mを測る。水田面は南から北へ向かってわずかに低くなり、標高は26.18~26.24mを測る。南側のSS-105水田面と比べると6cmほど低く、東隣のSS-107とはほぼ同じである。水田面には凹凸が多く残るが、耕作痕や足跡と考えられる窪みはみあたらない。東側のSS-107とを区画する畦畔は幅50~70cm。北側のSD-103とを区画する畦畔は、幅49~60cm、高さ2~3cm。南側のSD-102とを区画する畦畔は、幅60~70cm、高さ4cm前後。西隣のSS-109とを区画する畦畔は、幅66~70cm、高さ3~4cmを測る。

東側畦畔、北西隅で各1ヶ所、西側畦畔の南半部で2ヶ所、南側畦畔の東西端で2ヶ所、の計6ヶ所で水口を確認した。東側畦畔の水口は、SS-107で報告した。北西隅の水口は、幅38~40cmで、底面は水田面とはほぼ同じ高さである。SD-103との関係を把握するために、水口の縦断方向の土層断面を観察した(図29-1)。水田面には、微細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックが多くみられる砂礫混じり粘質シルトの①層が堆積する。Ⅱ-2-④層上面を覆うⅡ-2-③層に対応する。水口部分には、微細砂が混じる粘質シルトの②層がみられ、これがSD-103の下底面に落ち込む。SD-103部分は、上半部にⅡ-2-③層に対応する微細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられる砂礫混じり粘質シルトの③層、下部~溝底には細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる灰色シルトの④層が堆積する。以上

の埋積状況から、SS-108の溝底面に④層が堆積する以前に、一時的に畦畔を切って設けられた水口と考えた。

西側畦畔南半部の2ヶ所の内、ほぼ中央部に位置する水口は幅65cmで、南よりの水口は幅50cmを測る。ともに、水田面であるⅡ-2-④層上面を覆うⅡ-2-③層で埋もれ、水口底面はSS-108・109の水田面と同じである。SS-109の水田面がわずかであるが、SS-108よりも低いことから、SS-108からSS-109への配水が考えられる。

南側畦畔の東端の水口は、水田面南東隅に設けられたもので、幅45cm、深さ4～5cmを測り、Ⅱ-2-③層にあたる砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトで埋まっていた(図29-3)。西端の水田面西隅に設けられた水口は、幅40cm、深さ5cmで、Ⅱ-2-③層にあたる灰白色の砂礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質シルトの①層で埋まるが、SD-102側からSS-108に向かって流れ込んだようにレンズ状に堆積する褐色砂質土の②層を確認できた。SD-102からSS-108への給水を目的とする水口と考えた(図29-2)。

耕作土層から土師器の土鍋片(図37-45)、両黒の黒色土器壺(図37-48・49)、白磁碗(図37-52)、須恵器の壺(図37-54)、丸瓦片(図37-55)、磨製石庖丁(図40-3)、SD-102・SS-108・109間畦畔から土師器壺の高台部破片(図38-16)、SS-108・109間畦畔から土師器壺の高台部破片(図38-26)、瓦器壺(図38-35)、床土層から土師器皿(図39-1・4)、坏の底部破片(図39-12)、土師器壺の高台部片(図39-14・22・24・27)、須恵土器の壺(図39-42)、須恵器の胴部破片(図39-46)、弥生土器の脚付き鉢(図39-47)や壺(図39-49)の破片など、比較的多くの遺物が出土している。

SS-109

A区北東部のDT・DU-43・44区に位置する。南北6.2～6.55m、東西4.45～4.65mを測る不整長方形の水田区画である。水田面の標高は26.20m前後とはほぼ平坦で、南側のSS-106の水田面より6cmほど低く、西隣のSS-110よりも2cmほど高いが、東隣のSS-108とはほぼ同じ水田面の標高である。水田面には、南半部を中心として、凹凸が多く残るが、確実に耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。東隣のSS-109とを区画する畦畔は幅66～70cm。北側のSD-103とを区画する畦畔は、幅65～85cm、高さ2cm。南側のSD-102とを区画する畦畔は、幅70cm前後、高さ4cm。西隣のSS-110とを区画する畦畔は、幅60～

72cm、高さ2～3cmを測る。いずれも床土層にあたるⅡ-2-④層下半を削り出した畦畔である。

東西の畦畔には、それぞれ2ヶ所で途切れ部分を確認した。水口である。東側畦畔に設けられた水口についてはSS-108で報告したように、上部に堆積したⅡ-2-③層で埋積され、水口底面はSS-108・109の水田面と同じである。西側のSS-110とを区画する畦畔のほぼ中央を切った水口は幅20cm、南部に設けられた水口は幅40cmで、水口部底面とSS-109・110水田面とはほとんどかわらず、Ⅱ-2-③層で埋積されている。わずかであるが水田面の標高差があることから、SS-109からSS-110への配水を考えておきたい。

SS-109・110間中央水口埋土からSS-115上面砂礫層出土の土師器壺(図27-50)と接合する破片が出土している。また、耕作土層からは、土師器皿(図37-3)、坏(図37-7・8)、壺(図37-12・13・36・41・43)、両黒の黒色土器壺(図37-50)、須恵器(図37-53)の破片、SD-102・SS-109間畦畔からは土師器皿(図38-7)、床土層からは土師器皿(図39-3)、壺(図39-6・8・9・11・23・28・30・33)、土師器の高坏(図39-43)、弥生土器の壺(図39-48)が出土している。

SS-110

A区中央北よりのDU・DV-43～45区に位置する。北西隣の畦畔が上部からの削平で失われているが、南北5.6～5.7m、東西5.55～6.0mの不整形を呈する。水田面の標高は26.18～26.20mで、西半部がわずかに低くなる。水田面には、西半部を中心として凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と確定できる窪みはない。東隣のSS-109とを区画する畦畔は幅60～72cm、北側のSD-103とを区画する畦畔は幅1.0～1.04m、南側のSD-102とを区画する畦畔は幅55～93cm、西隣のSS-115とを区画する畦畔は幅40～57cmを測り、水田面から2～5cmの高まりである。

東側のSS-109とを区画する畦畔で2ヶ所、西隣のSS-115とを区画する畦畔で1ヶ所、計3ヶ所の水口を確認した。東側畦畔の水口はSS-109で報告したが、西側畦畔の水口は幅30cm前後で、水口底面の高さはSS-110・115の水田面とかわらず、上部に堆積したⅡ-2-③層で埋積されている。

SD-103・SS-110間畦畔から土師器壺の高台部破片(図38-24・27)、SS-110・115間畦畔から土師器壺の高台部破片(図38-25)が出土。また、耕作土～床土層から出土した土師器壺の破片が、SD-103、SS-117間畦畔

出土の破片(図38-28)と接合する。また、床土層からは、土師器の皿(図39-16)、埴(図39-5・25)、瓦器埴(図39-41)の破片や、円柱状の砂岩塊を利用した麻打具(図40-4)が出土している。

SS-111

A区北東隅のDR・DS-45区に位置する。東側と北側の水田面は調査区外にのびるが、正方形または長方形の水田面と考えられる。検出した水田面は南北2.05m、東西2.3mで、標高26.12m前後と平坦で、南側のSS-107よりも8cmほど低い。水田面には多くの凹凸が残る。耕起痕や足跡と考えられる窪みもあるようだが、判然としなない。南側のSD-103とを区画する畦畔は幅80cm前後で、上半は上層のⅡ-2-②(上層水田)層で割れているが、もともとは8~10cm近い高まりであったと推測される。西隣のSS-112とを区画する畦畔は、幅50~53cm、高さ2cmほどを測る。

西側畦畔の南端で幅80cmの水口部を確認できた。水口底面はSS-111・112の水田面とほとんど同じ高さで、上部に堆積するⅡ-2-③層で埋積されている。

SS-112

A区北東部のDS-45区に位置する。北側は調査区外にのび、東西3.9m、南北2.5m以上の長方形もしくは方形の水田面である。水田面の標高は26.10~26.14mで、北西に向けてわずかに低くなる。水田面には多くの凹凸が残る。人間の足跡と考えられる窪みがあるが、歩行の方向性は認められない。東隣のSS-111とを区画する畦畔は幅50~53cm、南側のSD-103とを区画する畦畔は幅52~74cm、東側のSS-113とを区画する畦畔は幅32~45cmを測り、水田面から2~4cmの高まりである。

東西2ヶ所で水口を確認した。東側畦畔の水口はSS-111で報告した。西側畦畔の水口は幅57cmほどで、東側畦畔の水口と同じく、底面は水田面の標高とほとんど変わらず、Ⅱ-2-③層で埋積されている。

耕作土層から土師器皿の底部片(図37-6)や埴の高台部の破片(図37-25)、床土層から弥生土器の壺の破片(図39-51)などが出土している。

SS-113

A区北壁沿いの西よりのDT~DV-45区に位置する。北側は調査区外にのび、東西11.8m、南北2.78m以上の長方形の水田面である。水田面の標高は26.09~26.15mで、西側に向かって緩やかに傾斜する。水田面に残された凹凸は、東半部のDT-45区に偏ってみ

られ、後述するようにDU-45区で南側畦畔に水口が切られていることから、簡易な小畦畔で小さく区画された可能性もある。しかし、そうした痕跡は、調査時には確認できなかった。東側のSS-112とを区画する畦畔は幅48~76cm、西隣のSS-117とを区画する畦畔は幅55~60cmを測り、水田面から2cmほどの高まりである。

東隣のSS-112とを区画する東側畦畔で1ヶ所、南側のSD-103とを区画する南側畦畔で4ヶ所の水口を確認した。東側畦畔の水口についてはSS-112で報告している。南側畦畔の東端に設けられた水口は、幅62cmで、底面はSS-113水田面と同じ高さである。SS-113の水田面を覆う微細砂の塊状ブロックが多く混じる灰色砂質土の②層で埋まっている(図29-4)。南側のSD-103最上部に堆積する①層とほぼ同じ土質・土色であり、Ⅱ-2-③層に対応する。

東端水口から1.2m西へ離れて設けられた水口は、幅83cmで、底面はSS-113とかわらず、Ⅱ-2-③層で埋積されている。

DU-45区に設けられた水口は、幅30cm前後、底面はSD-103へ向かって5cmほど急に深くなる。他の水口とおなじく、Ⅱ-2-③層で埋積されている。

南側畦畔の西端に設けられた水口は、SS-113・117とSD-103を繋ぐ。幅85cm。底面はSS-117、そしてSD-103へ向かって緩やかに低くなる。南北方向の土層断面を観察すると、上半には、Ⅱ-2-③層に対応するにぶい黄褐色シルト小塊や砂礫が多く混じる褐灰色粗砂質土の①層や、砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトの②層が堆積する。下半でも水口部底面近くには、部分的に黄褐色シルトが混じる褐灰色シルトの③層、SD-103溝底にはにぶい黄褐色シルトと褐灰色砂質土が薄い輪状に互層堆積する④層がみられる。③・④層は中層水田が利用されている過程で堆積した土層と考えられ、③層がSS-113からSD-103へ、さらにSD-103からSS-117へ向かって広がることから、SS-113からSS-117へ、そしてSD-103からSS-117への給水を目的とする水口と考えた(図29-5)。

耕作土層から土師器埴(図37-27・31・38・40)や両黒の黒色土器埴(図37-51)、SD-103・SS-113間畦畔からは土師器坏(図38-6)、床土層からは土師器埴(図39-7・29・32)や内黒の黒色土器埴(図39-38)などが出土している。

SS-115

A区北西部のDV～DX-43～45区で出土した。水田面の北半部は、上部のⅡ-2-③(上層水田)層の耕作で割れている。また、南側畦畔のDW-44区西半の一部を誤って掘り下げてしまった。東西6.6～7.2mを測り、南北は6m前後の不整形の水田面と推定される。水田面の標高は26.18～26.20mで、西隣のSS-110水田面とはほぼ共通し、南半部がわずかに低くなる。水田面には、東半部を中心として多くの凹凸が残されているが、耕起痕や足跡と確実に判断できた窪みはない。東隣のSS-110とを区画する畦畔は幅40～57cm、南側のSD-102とを区画する畦畔は幅43～50cm、西隣のSS-116とを区画する畦畔は幅39～80cmを測り、3～4cmの高まりをもつ。

東隣のSS-110とを区画する東側畦畔で水口を確認した。これについてはSS-110で報告している。加えて、南東隣の東側と南側の畦畔が接する部分でも水口を検出した。土層断面を観察すると、SD-102の溝底には灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが縦状に互層堆積する②層がみられるが、その上面から水口部、そしてSS-115水田面は細砂の薄いブロックが多く混じる灰色砂質シルトの①層で埋まっている。土質の共通性から、①層は中層水田を覆うⅡ-2-③層に対応する堆積土層と判断した(図29.6)。

耕作土層や床土層から土師器の皿(図37.5)、坏(図37.9～11)や埴(図37.14・15・20・23・28・30・32・33・37・39・42・44)、内黒の黒色土器埴(図37.46)、SS-115・116間畦畔から土師器埴(図38.20・22・23)、床土層からは土師器坏(図39.13)や埴(図39.19・21・26・31・34)、皿(図39.15)、そして内黒の黒色土器埴(図39.37・39)などの比較的多くの破片が出土している。また、耕作土層から弥生土器の壺の破片は、DT-43区中層水田上砂礫層や、SD-122・SS-106間畦畔出土の破片と接合する(図38.37)。

SS-116

A区北西部のDX-44・45区では、壟塹である攪乱溝や、上部のⅡ-2-③(上層水田)層の耕作の削平が著しいが、東隣のSS-115とを区画する南北方向のびる畦畔の一部と、南側のSD-102とを区画する畦畔の一部を確認できた。さらに、西側でも床土層のⅡ-2-④層下半が帯状に残ることを確認できたので、SS-116とした。水田面の東西は3.55m、南北は4.5～5.0mと推定される。南北方向の不整形長方形と考えられる。

水田面の北半部は削り取られている。検出面の標高は26.16～26.26mを測り、南に向かって緩やかに低くなる。検出面には凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みはみられない。東隣のSS-115とを区画する東側畦畔は幅39～80cm、南側のSD-102とを区画する畦畔は幅44～62cmを測り、2～4cmの高まりを持つ。西側畦畔と考えた帯状に残る床土層のⅡ-2-④層下半の幅は50cm前後である。

東西隣のSX-121と接する部分で、幅35cmほどでSX-121へ向かって落ち込み痕跡を確認できた。この落ち込み部分は、中層水田を覆うⅡ-2-③層で埋積されている。SS-116からSX-121へ排水する水口と考えられる。

耕作土層から土師器埴(図37.24)や内黒の黒色土器埴(図37.47)、耕作土層下部～床土層から土師器埴(図39.35)、SD-102・SS-116間畦畔から土師器の皿(図38.3)や坏(図38.5)や埴(図38.30)、内黒の黒色土器埴(図38.34)弥生土器の壺(図38.38)などの破片が出土している。

SS-117

A区北壁沿いの西よりのDV～DX-45区で出土した。水田面の北側は調査区外にのび、東西11.85m、南北1.35m以上の長方形の水田面と考えられる。水田面の標高は26.04～26.06mとほぼ平坦で、東隣のSS-113水田面と比べてわずかに低くなる。また南側のSS-115・1116と比べると10cm以上低い。水田面には凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と確実に判断できる窪みはみられなかった。東隣のSS-113とを区画する東側畦畔は幅55～60cm、南側のSD-103とを区画する畦畔は幅60～75cm、西隣のSS-118とを区画する畦畔は幅42cm前後を測り、水田面から2～4cmの高まりをもつ。

南側畦畔のDW-45区東端近くで、SD-103とをつなぐ幅58cmの水口を確認した。SD-103の溝底に灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが互層状態で堆積する②層がみられるが、その上部および水口部、そしてSS-117水田面は、細砂・小礫が多く混じる灰褐色シルトの①層で埋まる。①層は中層水田層上を覆うⅡ-2-③層に対応する(図29.7)。

耕作土層から土師器の皿(図37.1)や埴(図37.26)、SD-103・SS-117間畦畔から土師器埴(図38.12・28)、床土層から土師器埴(図39.10)、などの破片が出土している。また、SS-117耕作土層出土の黒

色土器の破片は、DU-44区SS-308を覆う砂礫層であるⅡ-2-⑤層から出土した破片(図118-48)と接合する。SD-301・SS-117間畦畔出土の黒色土器壺も、SD-209埋土やDU-45区SS-308覆土砂礫層出土の破片(図118-52)と接合する。

SS-118

A区北西隅のDX・DY-45区で検出した水田面である。北側は調査区外にのびる。東西幅は3.5m、南北幅0.98m以上である。水田面は26.05m前後で、東隣のSS-117とほぼ同じである。水田面には凹凸が多いが、耕起痕や足跡と確実に判断できる窪みはみられない。東隣のSS-117とを区画する畦畔は幅42cm前後、南側のSX-121とを区画する畦畔は幅50~65cm、西側のSD-24とを区画する畦畔は幅90cm前後と広く、水田面から4cmほどの高まりをもつ。

南側畦畔の東端でSD-103とをつなぐ水口を確認できた。SD-103部分を含めて、上部には砂礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土の①層が堆積する。①層はSS-118水田面を覆うⅡ-2-③層である。中位には、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の②層、砂礫が多く混じる黄褐色砂質土の③層、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の④層、砂礫ブロックの⑤層が互層状態で堆積する。水口底面にはやや粘性のある明黄褐色砂質シルト⑥層、SD-103溝底には砂礫が混じり砂質が強い黄褐色砂質シルトの⑦層がみられる。中位に堆積する②~⑤層の堆積方向から考えれば、SD-103からSS-118への給水を目的とする水口である。(図29-8)。

2) 溝

Ⅱ-2-④層上面でSD-101~104・114・119・120・122の8条の溝が出土した。いずれも水田面に伴う水路で、東西にのびるSD-101を基幹とし、これに平行するSD-102・103・114を配置し、さらにSD-122など補助的水路を設けている。SD-119・120はSX-121から西と北へ向かってのびる水路である。

SD-101

A区DR-42区~DY-44区で南東から北西へ横断する東西方向の水路である。東側は調査区外にのび、DS-42区でSD-114と合流し、DT-42区北西部ではSD-122と分岐し、DV-43区では畦畔を切った水口でSD-102と連結される。DV-42区中央では、南側から幅1.1mの溝が合流する。西端部は壟塚によって破壊されているが、DY-44区でSD-102と合流した後に、

SX-121に連結すると考える。溝底の標高は、東端DR-42区で26.32mを測るが、DS-42区以西では26.22~26.26mである。西端のSX-121と連結する付近では26.25mである。溝幅は場所によって大きく異なる。東端のDR-42区では1.6mであるが、DS-DT-42区で2.3~2.6mと広くなり、DU-42区では1.8mと狭く、DV-DW-42・43区では再び3.6~3.8mと広くなる。西端付近は、壟塚で破壊されて南側の肩部しか残存していないが、1.1~2.0mほどの溝幅を復元できる。

SD-101では、土層断面をDS-42区・DT-42区・DV-42・43区、そしてDY-44区でSX-121の南北土層断面とともに観察した。

DS-42区では、SD-114が流れ込む連結部を含めて観察した(図31-2)。上半を厚く埋積する①層は、にぶい橙色砂質土が混じる褐灰色砂質シルトで、径0.1~3mmの砂礫を非常に多く含む。中層水田を覆う砂礫層のⅡ-2-③層である。下半に堆積する②層は、褐灰色シルトに黄褐色が少量混じり、砂礫混じりを多く含む。底面とSD-114が流れ込む連結部を中心として、砂礫が混じる褐灰色砂質シルトの③層がレンズ状に堆積する。③層はSD-101が機能していた時期の堆積土と考えられ、旺盛な流水があったことがわかる。

DT-42区では、SD-122縦断面とあわせて観察した(図31-1)。上部は、Ⅱ-2-③層に対応する砂礫が多く混じる灰白色砂質土の①層や、砂礫が混じりにぶい黄褐色砂質シルトの②層で埋積されている。SD-101の底面には、粘性をおびる灰黄褐色砂質シルトの④層が堆積する。含まれる砂はきめが細かく、灰白色砂質土や明黄褐色砂質土の小塊が混じる。DS-42区の堆積土層と比べて、それほど旺盛な流水は考えられず、水が停滞した環境を復元できる。この地点はSD-122が分岐する場所であり、埋積土層の観察結果ともあわせ、西側のDU-42区部分に堰を想定できる。ただし、堰を構成する杭跡は確認できていない。

DV-42・43区では、SD-102・SS-110も含めた土層断面を確認した(図31-3)。最上層には灰色~灰褐色のシルトである①層、中には細砂・小礫が小さな塊となって多く混じる灰色シルトの②層が堆積する。②層は、SD-102上部やSS-110を覆う⑤層と同質の堆積土層で、①・②・⑤層は中層水田を覆うⅡ-2-③層と対応すると判断した。SD-101底面でも北側には灰色細砂がレンズ状ブロックで堆積した④層を確認できた。流水を示す堆積で、SD-101が機能していた時期

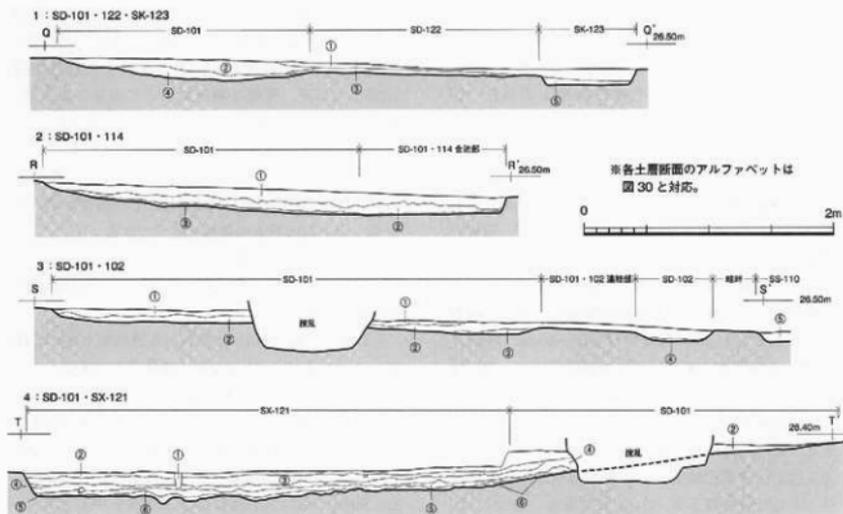


図31 AII-2-4 (中層水田) 層に伴う水口部分の土層断面図2 (縮尺1/20)

の堆積土層と考える。

DY-44区では、SX-121の南北断面とあわせて、堆積土層の観察を行った(図31・4)。SD-101の南側の肩部が残存する部分は、黄褐色粗砂に浅灰色や褐色の砂質土がまだらに混じる②層で埋積されている。②層は砂礫が多く混じり、北側のSX-121の最上部を覆っている。中層水田を覆うⅡ-2-③層である。SX-121と連絡するDY-44・45区境界部では、部分的に褐色砂質土が混じる褐色粘質土の④層や、黄褐色砂質シルトのレンズ状や丸い小塊がみられる褐色砂質土の⑤層がSX-121側へ流れ込むように堆積している。④・⑤層は、SD-101からSX-121へ流れ込んだ堆積土層と考える。

SD-101からは比較的多くの遺物が出土している。土師器の壺(図32-1~7・18~21・27・29~37・40~45・47・48・54~57)・皿(8・9・15~17・22・25・28・46・53)・坏(10・26・49)、白磁碗(11)、黒色土器の碗(12~14・23・24・38・39・58~61)、土鍋(50)、瓦器碗(51)、丸瓦(52)などがある。図32-1~3はDY-44区、4~24は溝幅が広がるDV-43区西半部~DX-43区、25~58は堰を想定したDU-42区以東、59・60はSD-114との合流部から出土

している。DV-43区西半部~DX-43区とDU-42区以東に出土遺物が多い。DV-43区西半部~DX-43区では、上半部に堆積するⅡ-2-③層との区分ができなかった。これに対して、DU-42区以東では、埋土下半から出土した遺物と比べて、図32-25~39の埋土上半出土遺物は遺存状況が非常によい。この地点の埋土上半の土層はⅡ-2-③層にあたる洪水堆積物であり、洪水時に流れ込んだ遺物と考える。一方、図32-43・53~58の溝底出土の遺物はSD-101が機能していた時期に埋積したものである。

SD-101から出土した遺物の中でも土師器碗の図32-29の外底面には×印のヘラ記号がみられる。34・57・58の外底面には板目瓦痕が残る。42の外底面はナデ仕上げであるが、わずかに回転糸切り離し痕を観察できる。2の外底面は二次的な火熱を受けて赤変。48は破片の状態で二次的な火熱を受けて部分的に黒斑が生じている。3の器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る、一部が器表面に染み出したような黒変部となっている。また、29・31・32の器壁の芯部にも、灰色や淡黒色の黒化層が残る。土師器皿の図32-8・16・22・28の外底面には回転糸切り離し痕が残る。図32-12・38は阿黒、13・14・23・24・39・58~61は内黒の碗で

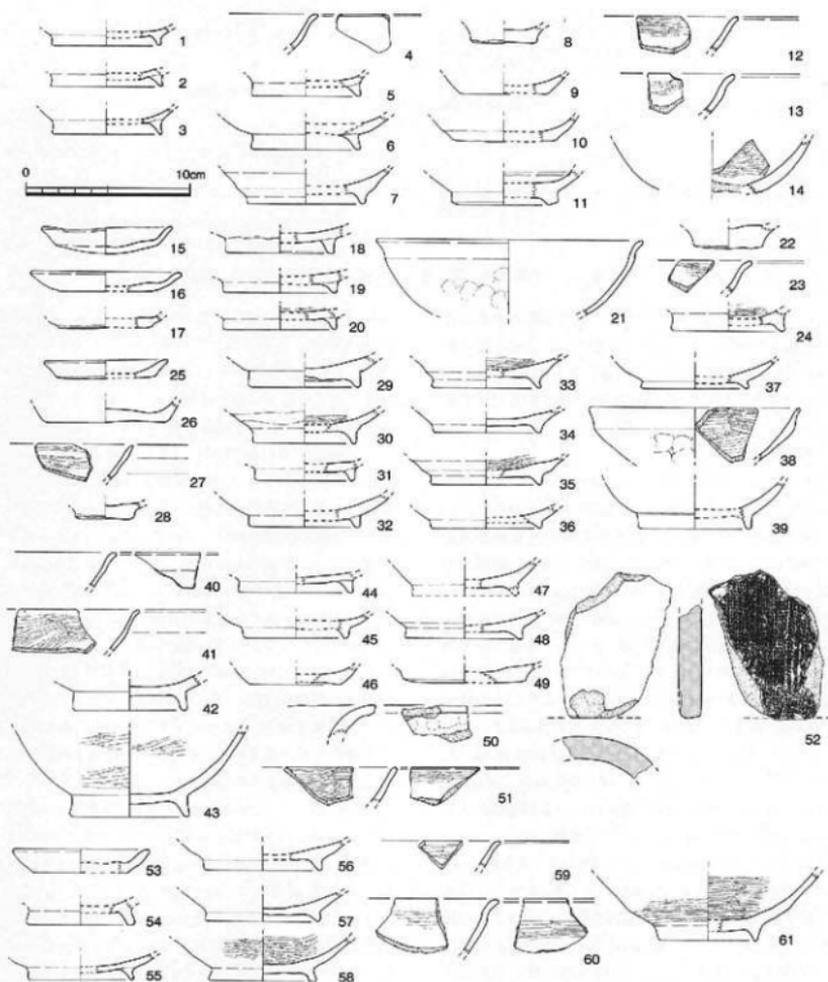


図32 A区II-2-④(中層水田)層SD-101出土遺物実測図(縮尺1/3)

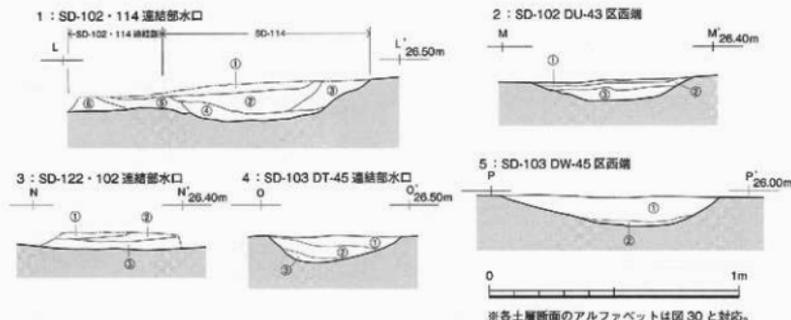


図33 A区Ⅱ-2-④(中層水田)層に伴う水口部分の土層断面図3(縮尺1/20)

ある。14は高台部の接合のため、接合面にヘラ状工具で沈線を3条巡らす。11は、白磁甎で、内面の見込み部に段状の沈線を巡らす。52は、丸瓦の端面破片で、凸面は荒れが著しいが、凹面には平織りの布目圧痕が残る。

SD-102

A区中央のDR-43区からDX-44区に向かって流れる東西方向の水路である。西端部は置壊で破壊されているが、SD-101へ連結すると考えられる。東側は調査区外にのび、検出した総延長は33mである。溝幅は東端のDR-42区では55～65cm、DS-43区では60～68cm、DT・DU-43区では56～70cm、DV・DW-43区では45～73cm、西端のDX-44区では53～60cmと、ほぼ一定した溝幅である。溝の横断面は浅いU字形である。溝底の標高は東端のDR-42区で26.20cm、西端のDX-44区で26.22mであるが、底面にはかなりの凹凸がある。

DS-42・43区SS-108水口からSD-114の連結部、DS-43区西端、DT-43区中央、DT-43区西端、DU-43区西端、DV-44区SS-115南東隅水口との連結部の計6ヶ所で、SD-102を埋める堆積土層を観察した。

DS-42・43区SS-108水口からSD-114の連結部では、上半は中層水田を覆う砂礫層(Ⅱ-2-③層)に対応する砂礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトの①層で埋まり、溝底にはふい黄色砂質シルトの③層がレンズ状に堆積する(図29-3)。DS-43区西端では、上半にⅡ-2-③層である径0.1～3mmの大小の砂礫が多く混じるにふい黄色砂質シルトの①層や、径0.1mm前後の砂礫が多く混じるにふい黄色砂質シルトの②層がみられ、溝底には細砂を若干混じえるが粘性をややもつ

ぶい黄色シルトの③層が堆積する(図29-9)。DT-43区中央では、上半はⅡ-2-③層である大小の砂礫が混じる黄褐色砂質シルトの①層や、径1mm前後の小礫が多く混じるにふい橙色砂質シルトで埋まる。溝底には、砂礫を若干含むが粘性が強いオリブ褐色砂質シルトが堆積する(図29-10)。DT-43区西端では、上半には、やはりⅡ-2-③層に対応する径2～3mmの砂礫が多く混じる灰黄色砂質シルトの①層と、灰黄色砂質シルトに明黄褐色砂質シルトが斑状に混じる②層が堆積する。下半は灰黄色砂質シルトの③層で埋積される(図29-11)。DU-43区西端では、上半に径1mm～小指先大の砂礫が混じる灰黄色砂質シルトの①層、礫がほとんど混じらないにふい橙色砂質シルトの②層がみられる。下半には、径0.1mm前後の砂粒が混じるが、粘性をおびた灰黄色シルトの③層が堆積している(図33-2)。以上のSD-102の埋土下半～溝底に堆積したやや粘性をおびる土層は、流水が停滞ぎみの環境で堆積したものと考えられる。

これに対して、DV-44区SS-115南東隅水口との連結部では、SS-115水田面および水口部、そしてSD-102の埋土上部には、細砂の薄いレンズ状ブロックが多く混じる灰色砂質シルトの①層が堆積する。①層はSS-115などの中層水田を覆うⅡ-2-③層である。ところが、SD-102下半～溝底には灰色砂の薄いレンズ状ブロックが輪状に互層堆積する②層がみられる(図29-6)。流水の痕跡である。

以上、SD-102埋土下半～溝底の土層は、中層水田を覆う砂礫層であるⅡ-2-③層とは異なり、SD-102が機能していた段階に堆積したものと考えられる。

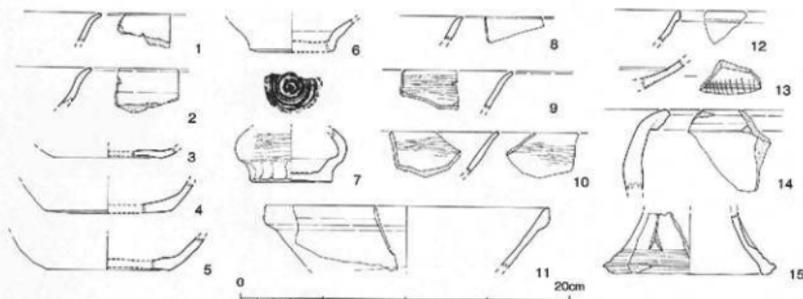


図34 A区Ⅱ-2・④(中層水田)層SD-102出土遺物実測図(縮尺1/3)

DV-44区SS-115南東隅水口との連結部で流水の痕跡もあるが、多くの土層断面で観察できた埋土下半～溝底に堆積したやや粘性をおびる土層と、溝底の標高が東西で大きな差がないことも考慮すれば、SD-102は水路とは言っても、かなり停滞ぎみで、常時流水があったとは考えられない。

SD-102埋土からは、土師器壺(図34・2・6)や坏(3～5)、土師質土器の壺(7)、黒色土器壺(8～10)、白磁の碗(11・12)や皿(13)、須恵器の甕(14)や弥生土器片(15)などが出土している。偏った出土分布はみせない。確実にSD-102が機能していた段階に堆積した埋土下半から出土した遺物は、図34・3の土師器坏と14の須恵器甕であるが、14は古墳後期の遺物で混入品である。

SD-102から出土した遺物の中で、図34・7は、土師質土器の小壺で、胴部外面は上半をミガキ、下半を指頭による成形の後に横ナデ。外底面はケズリ調整を施す。内面は横ナデ、内底面には同心円文をもつ当て具を押捺する。8は内黒の黒色土器壺。11・12は玉縁口縁の白磁碗。13は白磁皿で、外面にはカンナケズリ状の調整痕跡が残し、露胎のまま。内面にはヘラ状工具で削り段をつくり、施釉。14は古墳後期の須恵器甕の口縁部片。15は弥生中期後葉の高坏の脚部片。脚裾部に3条、脚端面に1条の凹線文を巡らし、脚中位に未貫通の矢羽根透かし文様を施す。器壁の芯部には淡黒色の黒化層が部分的に残る。

SD-103

A区北壁沿いのDR～DZ-45区で出土した東西方向にのびる水路である。西端はSX-121へつながら、検出した総延長は31.6mで、東端は調査区外にのびる。

溝幅は、東端のDR-45区では62cm、DS-45区では1.42mと広がるが、DT・DU-45区では58～95cm、DV・DW-45区では62～85cm、西端のDX-45区では95cm前後を測る。溝底にはかなりの凹凸がみられるが、溝の横断面は浅いU字形である。東端のDR-45区で26.08m、西端のDX-45区では25.96～26.00mと、西へ向かって緩やかに低くなる。

SS-108北東隅水口との連結部、SS-113南側畦畔東端水口との連結部、DT-45区西端、SS-113・117水口との連結部、SS-117南側畦畔中央水口との連結部、DW-45区西端、西端のSS-118南東隅水口との連結部の計7ヶ所で、SD-103埋土の観察を行った。

SS-108北東隅水口との連結部では、上半にⅡ-2・③層に対応する微細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられる砂礫混じり粘質シルトの③層、下部～溝底には細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる灰色シルトの④層が堆積する(図29・1)。SS-113南側畦畔東端水口との連結部では、SS-113水田面・水口部を含めて、上半はⅡ-2・③層に対応する微細砂の塊状ブロックが多く混じる灰色砂質土の①・②層で埋まり、下半～溝底には部分的に微細・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられる灰褐色砂質土の③層が堆積する(図29・4)。DT-45区西端では、上部～中部に微細砂を主とする灰色砂質シルトの①層、①層と比べて砂質がかなり強い灰色砂質シルトの②層がみられる。①・②層はⅡ-2・③層に対応する堆積土層である。溝底には③シルトに灰褐色砂質シルトとの微細砂が竊状に互層堆積する③層がみられる(図33・4)。SS-113・117水口との連結部では、上半にはⅡ-2・③層に対応するにぶい黄褐色シルト小塊や砂礫が多く混じる灰褐色粗砂質土の

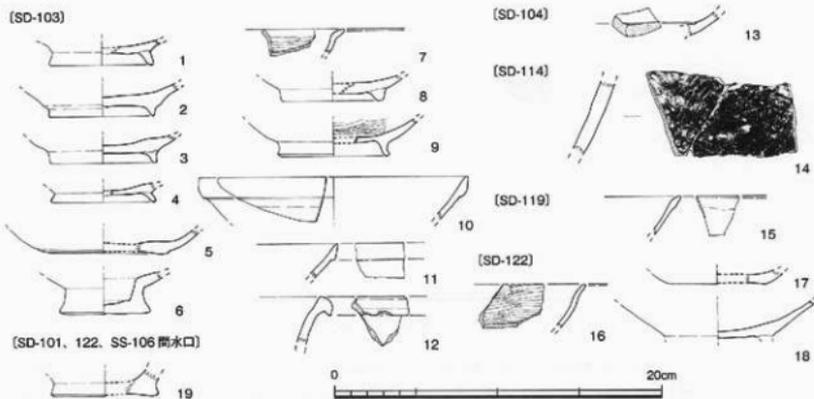


図35 A区Ⅱ-2-④(中層水田)層 SD-103・104・114・119・122・水口出土遺物実測図(縮尺1/3)

①層や、砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトの②層が堆積する。下半でも水口部底面近くには、部分的に黄褐色シルトが混じる褐灰色シルトの③層、SD-103溝底にはにぶい黄褐色シルトと褐灰色砂質土が薄い縞状に互層堆積する④層がみられる(図29-5)。SS-117南側畦畔中央水口との連結部では、SD-103の溝底に灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが互層状態で堆積する②層がみられ、上部とSS-117水田面および水口部には、Ⅱ-2-③層の細砂・小礫が多く混じる灰褐色シルトの①層が堆積する(図29-7)。DW-45区西端では、上部～中部にⅡ-2-③層にあたる細砂・小礫が多く混じる灰褐色シルトがたまり、溝底には灰色細砂の②層がレンズ状に堆積する(図33-5)。西端のSS-118南東隅水口との連結部では、上部にⅡ-2-③層である砂礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土の①層が堆積する。中位には、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の②層、砂礫が多く混じる黄褐色砂質土の③層、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の④層、砂礫ブロックの⑤層が互層状態で堆積する。SD-103溝底には砂礫が混じり砂質が強い黄褐色砂質シルトの⑦層がみられる(図29-8)。

いずれの土層断面でも、SD-103の溝底にはレンズ状に砂礫や砂質土が堆積しており、SD-102と比べて流水が比較的旺盛であったと考えられる。

SD-103埋土からは、土師器の埴(図35-1～4)・坏(5)・柱状高台土器(6)、黒色土器の埴(7～9)、

白磁碗(10-11)、須恵器甕(12)などが出土している。その中で、図35-3は、高台部の接合にあたって予めへら状工具で3条の深めの沈線を施す。5の土師器坏は外底面に回転糸切り難し痕が残る。6は土師器の柱状高台土器で、外底面には回転糸切り難し痕が残る。底部の芯部には灰色の黒化層が部分的に残る。外面には黒斑が生じている。7～9は内黒土器の埴である。

以上の遺物の中で、SD-103が機能していた段階に堆積した溝底の砂や砂質土などの土層から出土した遺物は、図35-4の土師器埴、7・8の黒色土器埴に限られている。12は混入品の古墳後期の須恵器甕の口縁部片で、内面には自然釉が付着する。

SD-104

A区南東部のDS～DU41区で部分的に出土した東西南方向にのびる溝である。周辺では、Ⅱ-2-③・④層は堆積しておらず、Ⅱ-2-②層を掘り下げた時点で、基本層序Ⅳ層に切り込まれた窪みがあった。埋土はⅡ-2-④層に類似する褐色～灰褐色のシルトで、砂礫が多く混じり、底面には細砂のレンズ状ブロックが点々とみられるので、水路と考えた。

検出した総延長は7.85mで、DT41区東半で二又に分岐するが、南側は調査区外にのびる。溝底は凹凸が多いが、横断面は浅い逆台形を呈する。溝底の標高は東端で25.81m、溝が分岐するDT41区東半で25.84m、西端のDU41で25.85mで、深さ3～5cmを測る。

埋土中から土師器片に加えて白磁碗(図35-13)な

どが出土しているが、遺物の出土量は少ない。

SD-114

A区南東部のDR・DS-42区に位置する。東西にのびる水路で、DS-42区北西部でSD-101と連結する。また、DR-42区とDS-42・43区境界部の2ヶ所で、畦畔を切ってSD-102と連結される。東側は調査区外にのび、検出した総延長は6.5mである。溝底は凹凸が著しく、DR-42区では標高26.31m、DS-42区南西部のSD-101と連結する部分では26.21mと、東から西に向かって緩やかに低くなる。横断面形は浅いU字形で、溝幅は67～68cm、DS-42・43区境界部のSD-102との連結部分では95cmほどを測る。

SD-102との連結部分2ヶ所で埋積土層を観察した。DS-42・43区境界部では、SD-114の溝底には、細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる灰黄褐色砂質土である②層が堆積することから、流水があったことがわかる。上部～中部とSD-102との連結部には、II-2-③層に対応する砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトの①層が厚く堆積する(図29-3)。これに対して、DR-42区のSD-102との連結部分では、上半に径2mm以下の砂礫が混じる黄褐色砂質シルトの①層、部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質土の②層、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土の③層が堆積する。①～③層はII-2-③層に対応する堆積物である。下半には、きめが細かい灰黄褐色砂質土の④層、砂礫が混じるが部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質シルトの⑤層、⑤層より粘性が強い灰黄褐色砂質シルトの⑥層が、SD-114からSD-102へ向かって流れ込むように堆積する(図33-1)。

前述したように、SD-102では常時流水があったとは考えられない。これに対して、SD-114では溝底に流水を示す堆積物があり、かつSD-114の溝底がSD-102よりも6～10cmほど高いことから、SD-114からSD-102への配水を目的として連結部が造られたと考えた。

SD-114では、須恵質土器の胴部片(図35-14)や土師器の細片が出土している。須恵質土器の蓋または鉢の胴部片で、DU-45区のII-2-③層から出土した破片と接合する。しかし、いずれも埋土上部のII-2-③層に対応する土層からの出土遺物で、SD-114が機能していた時期を示すものではない。

SD-119

A区北西隅のDY・DZ-45区で出土した。SX-121から東に向かってのびる水路の一部で、調査区内では1

mほどを確認したにすぎない。幅1.1～1.2mを測り、逆台形の横断面である。溝底は、かなり凹凸がみられるが、標高は25.96mで、SX-121底面から4cmほど高くなっている。

埋土は砂礫混じりの黄褐色粗細砂と灰褐色～灰白色砂質土で、後述するSX-121上部に堆積した土層と共通する。遺物は埋土中から須恵質土器の坏(図35-15)や土師器の小片が出土したのみである。

SD-120

A区北西隅のDY-45区で確認したSX-121から北に向かってのびる水路の一部である。調査区内では1.1mほどを確認できたのみである。幅58～60cmを測り、逆台形の横断面をもつ。溝底は、かなりの凹凸があるが、標高は25.98mで、SX-121底面から6cmほど高い。

SD-119やSX-121上部に堆積した土層と共通する砂礫混じりの黄褐色粗細砂と灰褐色～灰白色砂質土を埋土とする。埋土中から土師器の細片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD-122

A区南東部のDT-42・43区に位置する。SD-101・102を繋ぐ南北方向の長さ3.4mほどの水路である。溝幅はSD-101から分岐する地点で1.1mと広いが、SD-102をつなぐ部分は畦畔部を切り取ったように幅35cmしかない。溝底は凹凸があるが、標高26.22～26.26mで、SD-101側からSD-102へ向かって緩やかに低くなる。また、SD-122溝底面は、SD-101・102とは4cmほどの緩やかな段差が設けられている。

SD-101からSD-122の縦断面と、SD-102との連結部の土層断面を観察した。SD-101からSD-122縦断面をみると、上部は、II-2-③層に対応する砂礫が多く混じる灰白色砂質土の①層や、砂礫混じりにぶい黄褐色砂質シルトの②層で埋積されている。SD-122底面には、径5～6mmのぶい黄褐色砂質シルトの丸い小塊が混じる灰白色砂質土の③層が堆積し、それほど旺盛な流水は考えられない(図31-1)。また、SD-102との連結部では、上部に砂礫が多く混じる黄褐色砂質土の②層と、やや砂礫が細かい黄褐色砂質土の③層が堆積する。ともにII-2-③層に対応する堆積土である。底面には、砂礫が混じるが、粘性をおびた灰黄褐色砂質シルトの④層がみられる(図33-3)。以上の埋積状況から、SD-122は、SD-101・102をつなぐ水路であるが、常時流水があったとは考えられない。

埋土中から、土師器坏(図35-16～18)などの小片が

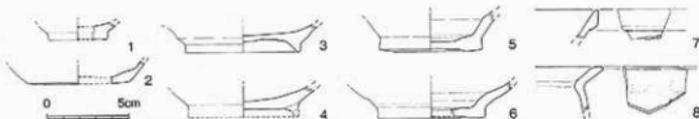


図36 A区Ⅱ-2・④(中層水田)層SX-121出土遺物実測図(縮尺1/3)

出土している。

3) 水灌遺構

SX-121

A区北西隅のDY-44・45区では、北側と東西側をⅡ-2・④層の畦畔で区画されたⅡ-2・③層の広がりを確認できた。当初、水田面と考えて掘り下げたが、東隣のSS-116水田面の高さまで掘り下げても、依然として砂礫が多い堆積土が続く。そこで、南北方向に先行トレンチを設定して土層断面の観察を行った。その結果、水田層であるⅡ-2・④層はみられず、SD-101から流れ込んだ砂礫混じりの堆積土層や薄い粘質土層が互層状態で堆積することを確認できた。そこで、SX-121として調査を進めることとした(図版10-2)。

SX-121は、南側を塹壕で破壊されているが、南北6m前後、東西4.8~4.9mの方形の掘り込みである。周囲を区画する畦畔から18~25cmの深さをもつ。底面は、南辺が標高26.08~26.10m、北東隅が25.80mと、南から北東に向かって緩やかに傾斜する。また、長さ5~20cmの不整楕円形や細長い不整形の窪みが多くみられ、凸凹が著しい。ただし、底面に残る窪みには、規則性を読み取ることはできなかった。南東隅でSD-101・102、北東隅でSD-103が流れ込み、北西隅から北に向かってSD-120、西側へSD-119が連結されている。南西隅でも西へのびる溝を部分的に確認できたが、SD-101の延長部分と考えられる。

DY-44・45区中央西より、SD-101を含めて南北方向の土層断面を観察した(図31-4)。①層は黄灰色細砂で埋まる小穴状の掘り込みである。②層は黄褐色粗砂に浅黄色や褐色の砂質土がまだらに混じり、DY-44区のSD-101南半部を含めて、SX-121の上部全体を覆う。土質の特徴から中層水田を覆うⅡ-2・③層に対応する堆積土層と判断した。③~⑤層は南から北に向かって流れ込んだ状態で堆積する。③層は砂礫混じりの明黄褐色細砂で、部分的に灰白色砂質土の薄

いレンズ状ブロックがみられる。④層は部分的に褐色砂質土が混じる褐色粘質土、⑤層は黄褐色砂質シルトのレンズ状や丸い小塊がみられる褐色砂質土で、ともに細砂・粗細・小礫の薄いレンズ状ブロックが多くみられる。⑥層はSX-121底面の窪みを薄く覆う砂混じりの黄褐色砂質シルトである。②は中層水田が廃絶される契機となった洪水でもたらされた砂礫層(Ⅱ-2・③層)、③~⑥層はSX-121へ流れ込むSD-101・102・103で運ばれた堆積土層であり、水灌遺構と考えた。

SX-121から出土した遺物は、水田面や水路と比べて少ない。土師器の皿(図36-1)、坏(図36-2)や埴(3~6)、白磁碗(7)、弥生土器甕(8)などがある。とくに、5・6・8は、SX-121底面に堆積した⑥層から出土し、SX-121が水灌遺構として機能していた時期に流れ込んだ遺物である。

4) 土塹

SK-123

A区DT-43区のSS-105北西隅の水口からSD-122にかけての地点で出土した土塹である。SD-122を底面まで掘り下げた時点で検出できた。78×80cmの隅丸方形を呈し、SD-122底面からの深さは7cm前後を測る。

SD-122の堆積土層を確認するため設定していた土層観察用ベルト上にあり、SD-122との関係を再確認できた。砂が混じるが、粘性をおびるにぶい黄褐色シルトの⑤層で埋積されている。部分的に灰白色砂質土が少量混じる(図31-1)。このように、SX-123は流水が少なく停滞した環境で埋積を推定できる。位置関係も考え合わせれば、SS-105の水口と関連する施設と考えられる。

埋土中からは土師器の小片が出土しているが、量は少ない。その中で、土師器碗の高台部破片は、SD-101・SS-106間畦畔出土の破片(図38-18)と接合する。

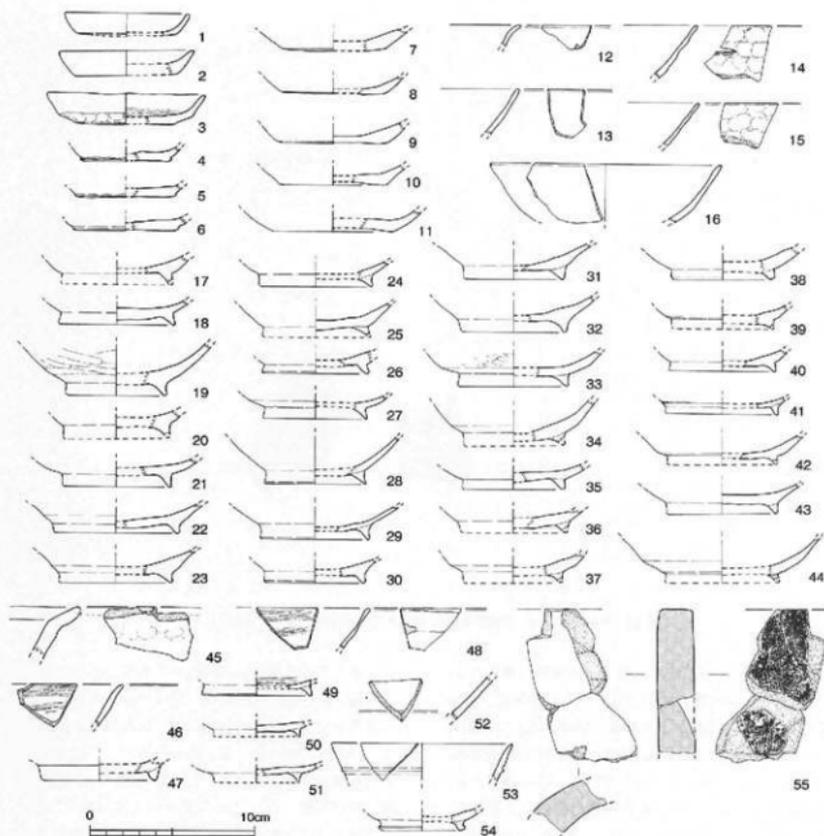


図37 A区II-2-④ (中層水田) 層耕作土出土遺物実測図 (縮尺1/3)

(2) 水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物

1) 耕作土出土の遺物

土師器・黒色土器・白磁・土鍋・石器などが出土している(図37、図40-3) 43は、DR-45区SS-1耕作土層、44はSD-101 (DW-43区北西部・DX-43区北東角) から出土した破片と接合する。

図37-1~6は土師器皿。1の器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。2は厚でのつくり。4の外底面には、回転糸切り離し痕が残る。5の外底面には回転ハ

ラ切り離し痕が残る。7~11は土師器の坏。11は、器体が歪んでいるため、復元底径はやや不確実である。外底面に回転糸切り離し痕が残る。12~44は、土師器碗。17~44はいずれも輪高台をもつ。12・16は、比較的薄でのつくりで、胎土も精選されている。とくに、28は砂礫をほとんど含まない精選粘土が用いられている。24・29・41も薄でのつくり。これに対して、34・37・38は比較的厚でのつくりである。18・22・28・36・40の器壁の芯部には黒色、灰色、灰黒色の黒化層が残る。43の外底面には回転糸切り離し痕が残る。

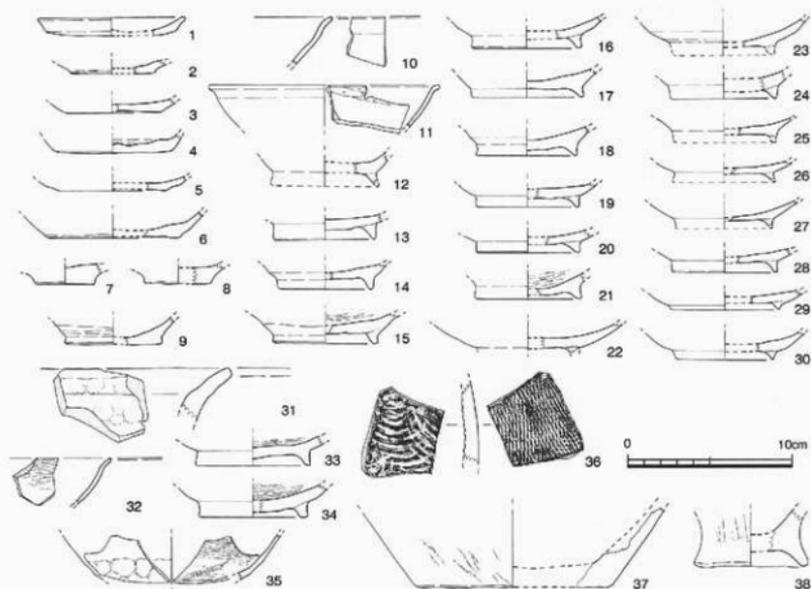


図38 A区Ⅱ-2・④(中層水田)層畦畔出土遺物実測図(縮尺1/3)

45は土鍋。46・47は内黒、48～51は両黒の埴である。52は白磁碗。小片のために器体の傾きは不確実。内底面見込み近くに沈線が1条巡る。55は、丸瓦で、端面がわずかに残る。凹面には平織りの布目圧痕が残る。53・54は、古墳後期終末期の須恵器で、混入品である。54は高台径から小型の長頸壺の高台部破片と考えた。図40・3は、片岩製の磨製石庖丁。両刃。片面の刃部は両側から交互に研磨してつけられる。刃部に直交する整形時の研磨痕が部分的に残る。また、右端部には整形時の敲打痕が部分的にみられる。重量74.7g。

2) 畦畔部出土の遺物

土師器・黒色土器・瓦器・石庖丁が出土している(図38、図40・2)。この中で、図38-28はDV44区SS-110耕作土～床上層から出土した破片と接合する。

図38-1～3・7・8は土師器皿。2は外底面を回転糸切り離したものか? 3は砂粒がほとんど混じらない精選された粘土を用いる。8の外底面には、回転糸切り離し痕跡がわずかに残る。4～6は、土師器

坏。6・7の外底面には回転糸切り離し痕跡がわずかに残る。9～30は土師器碗。9は厚い円盤高台、他は輪高台がつく。9の外底面には回転糸切り離し痕が残る。19の外底面はナダ仕上げられるが、回転糸切り離しの痕跡が部分的に残る。21の外底面には回転糸切り離し痕が明瞭に残る。22は、高台の貼り付けのために、ヘラ状工具で3条の沈線を予め施す。26・27は、胎土に砂粒をほとんど含まず、精選された粘土を用いる。比較的薄でのつくりである。また、30も精選粘土が用いられている。22・23の器壁の芯部には薄い黒色の黒化層が残る。23の外底面は黒変したままである。20・24・29は二次的火熱を受けて赤変する。

31は、土鍋で、「く」字形に屈曲する口縁部と考えられる。32～34は黒色土器の内黒の埴である。33は、厚でのつくりで、器体の歪みが著しい。35は、瓦器碗で、胴部外面は上半を乱雑な横ナダ、下半を指頭によるオサエ。内面はミガキ仕上げする。

36は古墳後期の須恵器の胴部片。37・38は弥生土器。37は、壺の底部片で、内面は薄く器面が剝離する。層

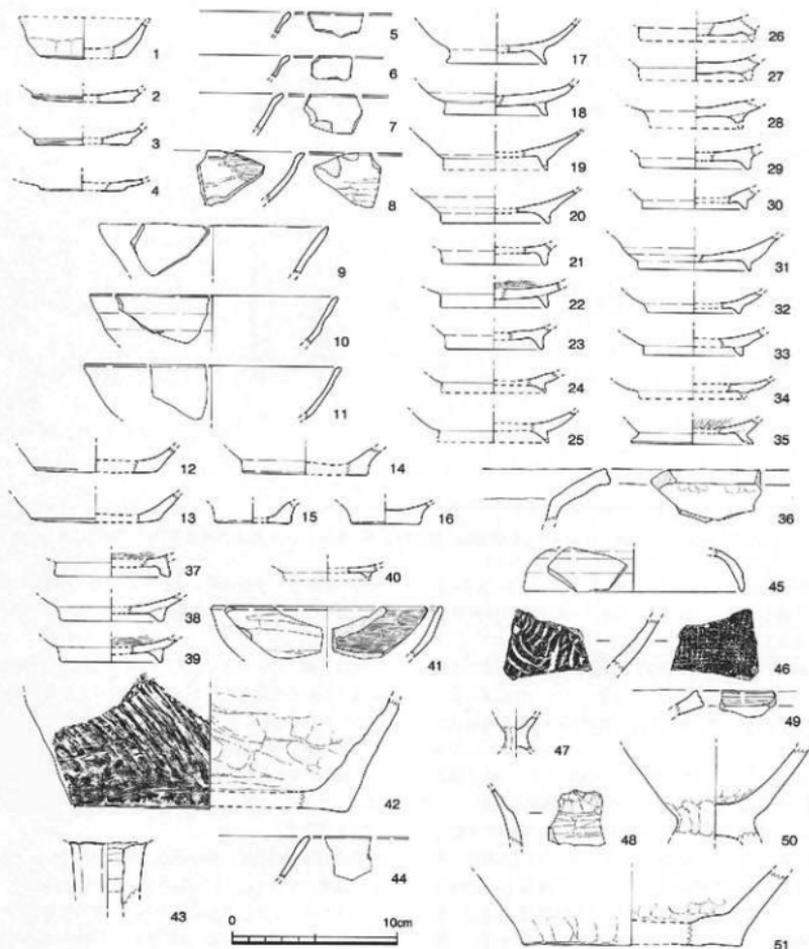


図39 A区Ⅱ-2-④ (中層水田) 層床土層出土遺物実測図 (縮尺1/3)

状焼成破裂の可能性も考えられるが、確定はできない。DT-43区のⅡ-2-③層、DW-44区のSS-115耕作土層から出土した破片と接合する。弥生中期～後期前葉。38は、脚台状の上げ底で、底部周辺は二次的な火熱を受けて赤変する。36～38は混入品である。

図40-2は片岩製の磨製石磨丁の破片である。両刃。

側端は研磨で面取り。刃こぼれが著しい。残存重量13.3gを測る。

3) 床土層出土の遺物

土師器・黒色土器・瓦器・須恵質土器・石器が出土している (図39、図44-4)。接合しないが、図39-4

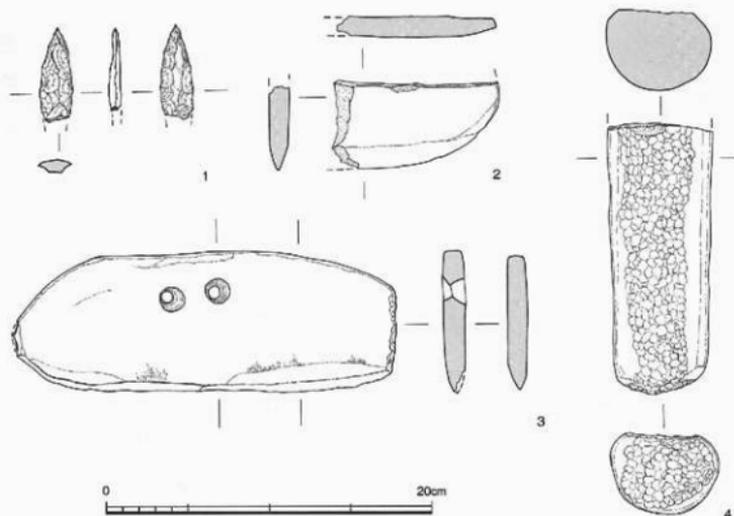


図40 AⅡ-2-③層、Ⅱ-2-④(中層水田)層耕作土層・畦畔・床土層出土遺物実測図(縮尺2/3)

と同一個体と考えられる破片が、DT42区SS-105床土層から出土している。17はSS-116東半部の砂礫層から出土した破片と接合する。

図39. 1~4・15・16は土師器皿。1は、厚でのつくりで、他の皿とは全く異なる。3は、外底面をヘラ状工具でナデを施すため、沈線状の条線が螺旋状に巡る。また、部分的に粘土がよれている。4・16の外底面には、回転糸切り離し痕が残る。5~11は土師器碗。5・6は、薄でのつくりで、精選粘土を用いる。これに対して、9は厚でのつくり。8の器壁の芯部には、淡灰色の黒化層が部分的に残る。10の内面は二次的の火熱を受けて赤変する。12・13は土師器杯の底部片。14・17~35は土師器碗である。14は厚い円盤高台、他は輪高台をもつ。内外面とも二次的な火熱を受け、外底面は赤変する。19は薄でのつくりで、胎土も精選されている。26は、非常に厚でのつくりで、内面は黒変のまま。28も厚でのつくりである。20の外底面には、強い指頭によるナデ調整を施すためか、底部周辺の器体の歪みが著しい。22は外底面を回転糸切り離した後にナデ仕上げを施す。31の外底面には板目圧痕が残る。17は、灰白色の焼き上がりであるが、器壁の芯部に黒色の黒化層が残る。19・27・28は、器壁の芯部に

灰色、淡灰色や黒色の黒化層が残る。28の外底面は黒変したままである。27の外面は二次的の火熱を受けて赤変する。

36は土鍋。37~39は黒色土器の内黒、40は両黒の碗。38は二次的な火熱を受け、内面の黒色もかなり薄れている。41は瓦器碗。42は須恵質土器。底径から壺と考えた。外面は、粗い平行条線のタタキ目を施した後に、底部側面を逆時計回りにヘラ状工具でケズりとる。内面は、粘土がよれるほど強い指頭によるナデ調整を時計回りに施す。

43は土師器の高杯の脚柱部片。幅が一定しないが8面に面取りされている。44は奈良時代の須恵器杯の口縁部片と考えたが、胎土には大粒の砂礫が混じり、ややざらついた質感である。45・46は古墳後期の須恵器。45は短頸壺の蓋か? 47~51は弥生土器。47は手づくねの小型品。脚柱部には指頭痕が多く残る。48は壺の胴部片。外面には、推定径5~6cm、深さ2~2.5mmの楕円形もしくは円形の剝離痕が残る。内面は黒変したままであるが、剝離面は外面と同じく赤茶色に焼き上がる。焼成破綻痕と判断した。49は、壺の口縁部片。口縁端部を横ナデによって、わずかに上方に拡張して端面に2条の沈線状の凹線を巡らす。50は脚台付き鉢

である。43～51は混入品である。

図44-4は、円柱状の砂岩を利用した敲打具である。

一側面と先端部に敲打痕が集中して残る。

6 Ⅱ-2-⑤層上面から掘り込まれた遺構と遺物

Ⅱ-2-⑤層を掘り下げ、下層水田面のⅡ-2-⑥層上面で遺構検出を行っている途中に、Ⅱ-2-⑥層の水田を切るやや淡い淡茶褐色土を埋土とする溝・土壇・小穴があることに気がついた。調査区東側の土層断面を再確認したところ、2条の溝がⅡ-2-⑤層上面から掘り込まれていることを明らかにできた。他の遺構も埋土の特徴が共通することから、下部のⅡ-2-⑥層の下層水田がⅡ-2-⑤層を堆積させた洪水以後、Ⅱ-2-④層の中層水田が造成される以前の時期の遺構である。

出土した遺構は、SK-201～204の土壇4基、SD-208・209の溝2条、SP-205・207・210～214の小穴である。

(1) 遺構

1) 土壇

SK-201

A区南東部のDT・DU-42・43区で出土した不整形の土壇である（図41、図版13-2）。西側は攪乱で上部を破壊されている。南北径2.35m、東西径2.45～2.5mを測る。検出面から深さ30cmが残る。下層水田層であるⅡ-2-⑥層を掘り抜き、基本層序Ⅳ層上部まで達している。底面はかなりの凹凸がある。

上半部は粗砂、径1cm～拳大の花崗岩円礫が多く混じる淡茶灰色砂質シルトの①層で埋積されている。壁

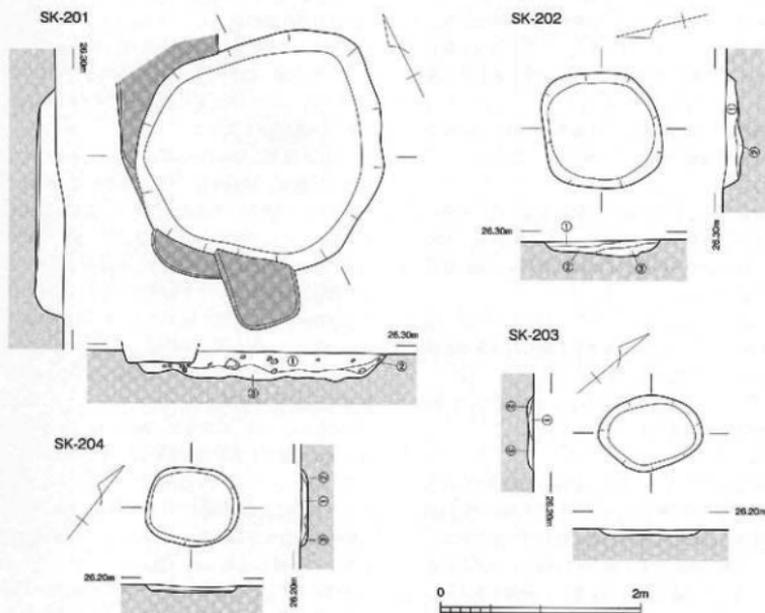


図41 A区SK-201～204遺構実測図（縮尺1/50）

際には南側から淡茶褐色シルトの②層が流れ込み、下半部は淡茶色シルトが斑点状に混じる灰黄褐色砂質シルトの③層で埋まる。

埋土中からは土師器の小片が数々と出土。土師器の坏の底部破片(図43-1)が埋土③層から出土している。外底面には板目瓦痕が残る。その他、砂岩円鏝を利用した敲打具(図44-1)や磨石(図44-2)、鉄器(図45-1・2)がある。図45-1は、一端を環状に曲げた棒状鉄器で、残存長4.2cm、幅3mmを測り、断面は方形である。2と同一個体の可能性がある。2は、残存長3cm、幅3mmを測る棒状鉄器である。断面は方形を呈する。

SK-202

A区中央のDU・DV-43区に位置する。膨らみをもつ隅丸方形の土塊で、径1.15m、検出面から深さ18cmほどを測る(図41)。下層水田層であるⅡ-2-⑥層を掘り抜き、基本層序Ⅳ層上部まで達している。底面は南西側がやや深い。

検出時から円鏝が多く混じることを確認でき、北側から流れ込むように、砂質がやや弱い淡茶褐色砂質シルトの①層、径2～3cmの円鏝が多く混じる淡茶褐色砂質シルトの②層、灰褐色粗砂質土が多く混じる淡茶褐色シルトの③層が堆積する。

出土遺物は土師器小片が少量あるが、東半部の埋土中から土師器の皿(図43-2)が出土している。

SK-203

A区北東部のDU-45区東半に位置する。浅い不整な長円形の小型土塊である(図41)。南北径103cm、東西径75cm、検出面からの深さ7cmほどを測る。底面はほぼ平坦である。

上部には淡茶褐色砂質シルトの①層がレンズ状に堆積し、底面には周囲から砂礫が多く混じる淡茶褐色砂質シルトの②・③層が流れ込む。

埋土中からは土師器の小片がごく少量出土したが、埋没時期を判断できるような資料はない。

SK-204

A区中央のDV-43区に位置する浅い長円形の小型土塊である(図41)。南北径90cm、東西径78cm、検出面からの深さ6cmほどを測る。底面はほぼ平坦である。

上部には淡茶褐色砂質シルトの①層がレンズ状に堆積する。周囲から流れ込んだように、砂礫を多く混じる淡茶褐色砂質シルトの②・③層が埋まる。

埋土中からは土師器の小片がごく少量出土したが、

埋没時期を判断できるような資料はない。

2) 溝

A区北半部で南東から北西にほぼ平行してのびるSD-208・209の2条の溝が出土した。Ⅱ-2-⑤層の掘り下げ中には気づかなかつたが、Ⅱ-2-⑥層上面で平面的に観察すると、Ⅱ-2-⑤層と比べて、SD-208・209の埋土に径3～5cm大の花崗岩円鏝や小礫・粗砂が多く混じることを確認できた。平面検出は比較的容易であった。

SD-208

A区北半部のDR～DZ-43～45区に位置する。SD-209を切り、SP-212に切られている(図版12)。また、DV-44区部分の溝底でSP-213を検出した。東西ともに調査区外にのび、検出した総延長は38mである。溝幅は、東端のDR-43区では2.5mを測り、DS-43・44区では次第に狭くなり、DT-44区東半では55cmほどとなるが、北側が急に張り出して1.3mとなる。DT～DX-44区では1.25～2m、DZ-45区では0.9m前後と一定しない。Ⅱ-2-④(中層水田)層の耕作で上部を削られているため、溝幅が一定しないものと考えられる。溝底はかなりの凸凹があるが、東端のDR・DS-43区では標高25.88～25.91m、DT・DU-43区では25.92～25.95、DV-44区では25.88～25.93m、DW・DX-44区では25.98～26.00mを測る。

DS-43区東端、DT-43・44区、DU-43・44区の3ヶ所で土層断面の観察を行った。DS-43区東端では、上半部は砂粒や径1～2mmの小礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの①層で埋積される。下半部には、砂礫が混じるオリブ褐色シルトの②層、砂礫がほとんど混じらず粘性をおびるオリブ褐色シルトの③層が堆積する(図42-1)。DT-43・44区では、溝の中央に径1mm～小指先大の小礫が混じる黄褐色砂質シルトの①層がレンズ状に堆積し、溝側面の底面近くには、細砂を主体とする黄褐色砂質土の②層が溜まる(図42-2)。DU-43・44区では、最上部に、砂粒や径1mm～小指先大の小礫が少量混じる灰黄褐色砂質シルトの①層がレンズ状に溜まる。下部～溝底には、径1mm前後の小礫が少量混じるにぶい黄褐色シルトの②層、きめが細かい黄褐色砂質シルトの③層、細砂混じりのにぶい黄褐色シルトの④層が堆積する(図42-3)。DV・DW-44・45区境界部では、上部は、細砂・粗砂・径1～3mmの小礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトの①層や、部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質シルトの②層で埋積さ